

教会学校教案誌

2006.4.5.6月号

日本キリスト改革派教会
中部中会教育委員会

No.21

2006年4～6月カリキュラム (第21号)

—救済史に基づく二年サイクルカリキュラムの一年目—

月 日	主 題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
教会暦・行事	単 元 の 目 標		
4月2日 レント・進級	十字架のキリスト	マルコ15:21-32	詩編22:30-32
	キリストを侮辱する者の姿を見て、キリストの十字架の意味を考える		
4月9日 受難週	葬られるキリスト	マルコ15:42-47	ヘブライ12:2
	キリストの死を確認することにより、神の贖いの御業に感謝するよう招く		
4月16日 イースター	キリストの復活	マルコ16:1-8	ヨハネ11:25
	死から復活されたキリストを仰ぎ、死からの復活の希望を持たせる		
4月23日	天地の創造	創世記1:1-31	ヨハネ1:3
	神がすべてを創造された方であり、世界の主権者であられることを覚える		
4月30日	人間の創造	創世記2:4-25	創世記2:7
	人は神に造られて生きているのであり、神があって人が生きていることを知る		
5月7日	人間の墮落と救いの約束	創世記3:1-15	ローマ6:23
	人の罪を知り、自分の罪を知り、悔い改めと主の信仰に招く		
5月14日 母の日	ノアの箱舟	創世記6:1-22	ヘブライ12:7
	人の罪の行く末と神の一方的な恵みを知り、神への感謝へと招く		
5月21日	バベルの塔	創世記11:1-9	コリント二10:17
	自らが神になるうとする人の姿と、それを裁く力を有しておられる神を見る		
5月28日	アブラハムの召命	創世記12:1-9	創世記12:4a
	神の一方的な選びと召しに、自分たちもあずかっていることを悟らせる		
6月4日 ペンテコステ	教会の誕生	使徒言行録2:1-13	使徒言行録2:4
	聖霊が働くところに神の教会がある。教会を建てて民を養う神への感謝に招く		
6月11日 花の日	アブラハムへの約束	創世記15:1-21	創世記15:6
	アブラハムの信仰の姿を通して、人の心をとらえる神の御業へと招く		
6月18日 父の日	イサクの誕生と奉獻	創世記21:1-8、22:1-19	創世記22:14b
	アブラハムの信仰を確認し、信仰によって与えられる主の恵みの感謝へと招く		
6月25日	ヤコブとエサウ	創世記27:18-29	ヘブライ12:16
	人の企てを用いて主が成就される御業のすばらしさを知り、主への信仰に招く		

も く じ

2006年4・5・6月カリキュラム		
まえがき	相馬伸郎 ... 4	
巻頭説教	牧野信成 ... 5	
日曜学校・教会学校訪問		
坂戸教会教会学校の紹介	坂戸教会教会学校委員会 ... 8	
本誌の基本方針	14	
中部中会教会学校教師研修会報告		
講演「魅力ある日曜学校を目指して」	相馬伸郎 ... 17	
発題「日曜学校教師の思い」	宮嶋豊美 ... 30	
自由献金のお願い	32	
聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例		33
4月2日	34	
4月9日	41	
4月16日	48	
4月23日	55	
4月30日	62	
5月7日	69	
5月14日	76	
5月21日	83	
5月28日	90	
6月4日	97	
6月11日	104	
6月18日	111	
6月25日	118	
成人科	石丸 新 ... 125	
いのちのパン（こども聖書日課）	131	
2006年7・8・9月カリキュラム		145
2006年度 年間カリキュラム		146
副読本のご案内		148
執筆者よりひとこと		150
あとがき		150

まえがき

相馬伸郎（中部中会教育委員会委員長）

中部中会教育委員会は、毎年、11月23日に「教師研修会」を開催いたします。今回4年ぶりに講師となり、「魅力ある日曜学校のために—教師会の形成—」という主題で語らせていただきました。出席者は55名。近年にない多数の出席者が与えられました。

実は、講演の中でこのように申しました。「教会学校教案誌を継続発行して4年余り。神の恵みの御業を心から感謝している。しかし、現状の日本キリスト改革派教会の日曜学校とその伝道には、大変な危機感を持っている……」実は、わたしの心の中に、「創刊号から第20号まで、膨大な時間を捧げ、膨大な原稿を執筆したけれど、この奉仕が、中部中会、また、日本キリスト改革派教会全体にどれほどの実りをもたらすことができたのか」、大変、心もとない思い、はっきり申しますと、疑いを抱えながら、なしてまいりました。（ただし言い訳を申しますが、少なくとも、筆者の仕える名古屋岩の上传道所においては、豊かな結実を見続けることができました。だからこそ、へこたれないで継続できたわけでもあります。）

ところが、午後のシンポジウムにおいて牧師、長老、何よりも教師方によるすばらしい発題がなされました。さらにまた、フロアからの発言においても、中部中会の日曜学校教師たちの質の高さをも垣間見ることができました。手前味噌の極みですが、確かに、少なくとも中部中会は、弊誌発行の実りが、遂に明らかに見えてきたと思われました。大胆に申しますと、もしも「教案誌」をきちんと教師会で読んでくたされれば、必ず成長されることも、信じることができました。（誤解のないように申し添えますが、他の編集部の教師たちは、わたしのよう

な不信仰に揺らいではおられませんでした。）

自分を棚に上げて申しますが、私どもの最大級の危機、誘惑の一つは、自分自身が、福音によって変えられ、成長し続ける望みを失うという事です。また、福音を告げた相手が変わられ（救われ）、成長するという望み、信仰を失うという事です。

今回のことで、あらためて、「福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力」（ローマの信徒への手紙第1章17節）であることをわきまえ、同労者の皆様と、御言葉の力、福音の実力への信頼を、いよいよ深めてまいりたいと願います。

60周年記念信徒大会を目前にして、私どもの教会は、危機的な状況に置かれていると、わたしはなお真剣に考えています。しかし、そこで、私どもが、先輩たちから受け継いできた信仰の遺産を正しく継承し、展開すれば、約束は必ず成就し、私どもは必ず勝利することを信じています。しかし、そのためには、「膨大な」努力、徹底した献身と服従が必須です。この覚悟、宣言を生きるこの決意なしに勝利はありません。

講演の最後に、牧師の責任について触れました。研修会に、牧師そして長老が少ないことは、紛れもない事実です。私自身の不十分さを省みず、どうしても言わなければなりません。牧師が率先して、教師を訓練、指導しなければなりません。「やってみせる」ことが必要なのです。

今年度も、皆様と祈りを集め、望みを抱いて前進してまいりたいと願います。

Soli Deo Gloria（ただ神の栄光のために！）

（教案誌編集長、名古屋岩の上传道所宣教教師）

「神の躰（しつけ）」

—申命記12章20節～13章1節による説教—

牧野信成（千里山教会牧師）

約束されたとおり、あなたの神、主があなたの領土を広げられるとき、肉が食べたいと言うなら、欲しいだけ肉を食べることができる。あなたの神、主がその名を置くために選ばれる場所が遠く離れているならば、わたしが命じたとおりに、主が与えられた牛や羊を屠り、自分の町で、欲しいだけ食べることができる。かもしかや雄鹿を食べる場合にのように食べることができる。汚れている者も清い者もその肉を食べることができる。ただ、その血は断じて食べてはならない。血は命であり、命を肉と共に食べてはならないからである。血は食べることなく、水のように地面に注ぎ出さねばならない。それを食べてはならない。こうして主が正しいと見なされることを行うなら、あなたも子孫も幸いを得るであろう。ただ、あなたは、ささげるべき聖なる献げ物と満願の献げ物を携えて、主の選ばれる場所に行かねばならない。焼き尽くす献げ物の場合は、肉も血もあなたの神、主の祭壇にささげる。その他のいけにえは血をあなたの神、主の祭壇の側面に注ぎ、肉は食べることができる。わたしが命じるこれらのことをすべて聞いて守りなさい。こうして、あなたの神、主が良しとし、正しいと見なされることを行うなら、あなたも子孫もとこしえに幸いを得る。あなたが行って追い払おうとしている国々の民を、あなたの神、主が絶やされ、あなたがその領土を得て、そこに住むようになるならば、注意して、彼らがあなたの前から滅ぼされた後、彼らに従って罠に陥らないようにしなさい。すなわち、「これらの国々の民はどのように神々に仕えていたのだろう。わたしも同じようにしよう」と言って、彼らの神々を尋ね求めることのないようにしなさい。あなたの神、主に対しては彼らと同じことをしてはならない。彼らは主がいとわれ、憎まれるあらゆることを神々に行い、その息子、娘さえも火に投じて神々にささげたのである。あなたたちは、わたしが命じることをすべて忠実に守りなさい。これに何一つ加えたり、減らすことがあってはならない。

（申命記12章20節～13章1節）

この教えは「肉食の許可」から始まります。レビ記11章にある清浄規定では、汚れた動物を食用にはしないと詳細な分類が施されていましたが、約束の土地に入ったときには、祭儀に用いる動物と、日常的な食用動物とは分けて考えることが許されます。「肉が食べたい」という言葉からは、荒野の彷徨時代に聞かれた民の嘆きが思い起こされますが、約束の地では思う存分食べなさいというのですから、それも約

束の土地の祝福なのかもしれません。そこでは、神は民の日常生活を寛大に受けとめておられます。また、身体についての清浄規定も、日常生活では緩和されているようです。死体に触れたとか、皮膚病に犯されるという汚れがあっても、祭儀には参加できなくても、日常の食卓からは排除されないように配慮がなされています。ただ、「血を食べてはならない」という原則は保持されます。血は命を表しますから、それは土地

に注ぎ出して、神にお返ししなくてはなりません。たとえ動物といえども、その血を流すことには最大限の注意が必要です。肉食が許可されたとはいえ、むやみな流血は好ましくないからです。ここにはベジタリアンへの薦めがあると理解する人もありますが、そうしますと肉食の許可という寛大さの表現が単なる修辞になってしまいますから、あまり無理に主張しないほうがよいでしょう。流血に対する神の御旨を踏まえて、もはや肉は食べまいとする志は、自発的なものである限り、神への忠誠の表現となりえます。

しかし、ここにある肉食の許可は、単に民の食欲への寛大な措置というよりも、「主の選ばれた場所」に祭壇を限定するという、聖所の集中化に伴う措置であるようです。この「主の選ばれた場所」がサムエルの時代のシロなのか、ダビデ以降のエルサレムなのか、はては、ヨシヤの宗教改革が行われたエルサレム神殿なのかは議論があるところで、文面からははっきりしません。ともかく、神殿が中央聖所に限定されずと、民は勝手に自分の町で犠牲をささげることではできなくなりますから、中央聖所に徹底して祭儀を集中するために、通常肉食のための屠殺は合法とされたのでしょう。したがって、より重要なのは、「主の選ばれた場所」での祭儀が民に尊ばれることです。

こうした具体的な規定に伴って、この段落では度重なる律法遵守の勧めがモーセによってなされています。12章25節、28節、13章1節などがその箇所です。

わたしが命じるこれらのことをすべて聞いて守りなさい。こうして、あなたの神、主が良しとし、正しいと見なされることを行うなら、あなたも子孫もとこしえに幸いを得る。(28節)

ここで特に注意したい表現は「主が良しとし、正しいと見なされることを行うなら」とあるところで、判断の基準を神に委ねることが求められています。そうすれば、子孫に代々及ぶ祝福

を得ることが出来る。約束の地の祝福を、受け継ぐことができると約束されます。このことを正反対から見ますときに、30節から31節の警告につながります。

「これらの国々の民はどのように神々に仕えていたのだろう。わたしも同じようにしよう」と言って、彼らの神々を尋ね求めることのないようにしなさい。あなたの神、主に対しては彼らと同じことをしてはならない。

つまり、カナンには偶像崇拜への誘惑があり、イスラエルの民が神の判断である律法から離れていくときに、「同じようにしよう」という別の判断が入ってくる。カナンは決して辺境の地ではなくて、そこには古からの文明があります。小さな領域かも知れませんが、エジプトやメソポタミアの伝統を引き継いだ、洗練された文化がある。それが民への大きな誘惑となって、「わたしも同じようにしよう」などという心が起こってくるわけです。それは、真の神、イスラエルを憐れんでくださった恵みの神を頼らずに、この世のつまらない、目先の華やかさによる人の判断を当てにすることですし、また、そういう自分の目を判断基準にすることで、そこにイスラエルが注意すべき「罫」があります。結果をいえば、31節に最悪の事例がひとつ挙げられています。「その息子、娘さえも火に投じて神々にささげた」という真に悲惨な事態に巻き込まれてしまうことにもなりました。モーセを通じて与えられた律法は、肉食についても十分な注意を促すような、人と動物の命を十分に生かす秩序でした。現代社会の法律と比較してもかなわないほどの、ある部分は理想主義的な、人道的配慮に満ちています。それが、人身供養という狂信に墮落してしまうのは悲惨という他ありません。

あなたたちは、わたしが命じることをすべて忠実に守りなさい。これに何一つ加えたり、減らすことがあってはならない。(13章1節)

古代オリエントの法令集にはこれと同じような文句がついていたもので、この法令には制定者である王の權威と、王に正義を行う権限を付与した神の權威があることを告示するものでした。モーセの律法もそうした様式を踏まえて語られていると考えてよいのですが、しかし、この決まったかたちの言葉にはもっと深刻な響きが聞こえるのです。他の何を頼りにするのでもなくて、ましてや自分自身の拙い判断を過信するのではなくて、まず、神の言葉によって生きる術を学ぶのでなければ、イスラエルの民は地上で生きながらえることすらままならないのです。豊かな土地を与えられるのは、ただ神の恩恵によります。戦争を勝ち抜いたからといって驕り高ぶっている程の実力はありません。あるとすれば、神の実力だけです。それを身をもって証明するのが彼らの選びの理由だとしてもよいところです。だから、民は神にまず聞かねばならず、その教えを一言一句おろそかにしないで、忠実に守って、神の恵みの支配下に留まらなくてはなりません。律法遵守の義務などという、いかにも奴隸的な扱いを受けるような印象をもってしまいますが、それが土地の豊かさを享受する祝福へと繋がっていて、自由に肉食もできる寛大さとも結びつきます。神はイスラエルを見せかけの餌で釣っているわけではなく、祝福は本当であって、その祝福の約束が子孫に及びます。

それでも背いて行くのですから、わたしたちは旧約聖書を通してイスラエルの歴史を思うときに、人間の罪深さと愚かさ、その結果として

の悲惨さを思い知らされます。しかし、このモーセの律法は、民の躓きによって廃れたわけではありません。むしろ、民を信仰の内に教育し続ける神の言葉として守られてきました。イスラエルの民は、罪を犯しながら、たびたび躓きながら、神の言葉に呼びかけられて、いわば神に躓られていったのです。イスラエルの神は、不条理な方法で民衆を踏みつける暴君では決してなく、民を愛情をもって躓る親でありました。わたしたちはここに、人間に対する神の変わらないまなざしを知らされます。神の言葉は永遠に、今はキリストの霊となって、わたしたちを教育し、神と共に生きる祝福へとわたしたちを導いてくれます。

祈り

御言葉を守ることの大切さを、モーセを通じて語り続けられた主なる御神、わたしたちはあなたの判断よりも己を上とし、この世の知恵を信頼しがちですけれども、どうか罪の誘惑に引き込まれないように、あなたの恵みに留まらせてください。あなたの真実は御子の十字架と復活において明らかです。わたしたちがそこから目を離さずに、いつも御言葉によって生活を整えていただけるように、謙遜な思いをもたせてください。どうか、罪の支配下におかれた悲惨さを人々に悟らせてくださり、あなたの御支配のはかりしれない恵みと寛大さのうちに、子供たち共々招き入れてくださいますようお願いいたします。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。

坂戸教会教会学校の紹介

坂戸教会教会学校委員会

1. はじめに

坂戸教会は、池袋から急行電車で45分の距離にあり、同じ東武東上線沿線には、新座志木教会、上福岡教会、川越教会があります。市役所や中央郵便局はすぐそばですが、最寄りの3駅からはどの駅を使っても徒歩20分ほどかかります。今年で伝道開始29周年、教会設立26周年を迎えます。2003年に新会堂を建設し、150席の礼拝堂を与えられました。CS では、2004年度に校長がベテラン長老から若手長老にバトンタッチされました。新体制においては、①「新来会者を増やすための伝道の模索」②「教師の成長・次世代への引き継ぎを意識して」の2つをテーマとして取り組んでいます。

2. 教会学校の礼拝と分級

1) 礼拝

主の日は朝8時50分にCS教師の祈禱会があります。9時から9時半が礼拝の時間です。説教は第1主の日は片岡牧師、第2主の日は現校長と前校長が交代で、第3、4主の日はその他の教師のローテーション、第5主の日は元CS教師の兄姉が担当しています。現在レギュラーのCS生徒は契約の子ばかり11名です。以前は地域の子もたちの出席もあったのですが、継続が難しく、先に挙げたテーマを生む結果となっています。子どもたちの奉仕は専ら献金当番のみでしたが、今年からは奏楽、司会などにチャレンジしてもらおうと働きかけているところです。また、後で述べますが、第4主の日は朝はお休みして午後には野外礼拝を行っています。

2) 分級

礼拝後10時頃までが分級の時間です。クラス

はエンゼル科(嬰兒、幼児)、ダビデ科(小学下級)、ヨシュア科(小学上級)の3つで、8名の教師が3クラスに列れ担当しています。中高生の来会者があった場合は、校長が対応します。エンゼル科は、母親である教師3名が交代で、分級を受け持ちます。自分の子どもを見ながら分級を進めるのは正直なところ難しさがあります。内容は、簡単な讃美、紙芝居か絵本、時間のあるときは工作などです。



〈エンゼル科〉

ダビデ科では、「365日の聖書物語」から、その日のテキストにあったお話を読みます。昨年は十戒の暗唱に取り組みました。ギター伴奏でワーシップソングを歌って讃美するのが子どもたちは大好きなのですが、それで盛り上がりすぎて、收拾がつかなくなってしまうことがあるのが、教師のうれしい悩み(?)です。



〈ダビデ科〉

ヨシュア科では霊的な成長を意識して、十戒、使徒信条、主の祈りの暗唱と全員が自分の言葉でお祈りできるように導いています。楽しいゲームなども取り入れて、次回につなげる工夫を心がけています。



〈ヨシュア科〉

全体的な課題としては、教師中心の分級から、子ども中心の分級への取り組みが今後さらに必要だということです。

分級のあと、共同の礼拝前におやつタイムがあります。エンゼル科の和室に小学生がやってきて、一緒におやつをいただきます。教会では日によって昼食の時間が遅くなることもあり、特に小さな子どもは共同の礼拝中にお腹がすくと機嫌が悪くなるので、その予防を兼ねています。また、礼拝や分級では見られない素顔がおやつタイムの雑談で見えるので、子どもたちの理解に役立ちます。

3. 教師会

教師会は第3主の日の午後、定例会をもっていきます。行事の計画や反省に多くの時間がかかります。そこで今後の課題が次々出てくる良さもあるのですが、この定例会では教師の学びや分級についての話し合いにはあまり時間を割くことができていないのが現状です。教師個々の学びとしては、この教案誌に基づく学びと、ゴー宣教師によるCS教師訓練会が主なものです。坂戸教会で金曜日の夜に行ってきた訓練会の2学期には、15名の受講生の内、坂戸教会のCS教

師は7名出席、新座志木教会からも2名のCS教師が出席されました。CS教師ではないけれど、熱心に共に学ぶ教会員にも刺激され、聖書を学び、主に近づく喜びを感謝しています。今年からは、教師会の時間に説教演習を計画しています。青年教師の増員が長年の願いでしたが、ここ2、3年は青年会の中にCSへの重荷を与えられる兄弟が起こされ、彼を中心に青年たちのCS行事への参加が盛んになってきたのはうれしいことです。

4. 行事と活動（主に2005年の内容）

1) イースター

近隣の公園で礼拝の後、卵探しやゲームを楽しみます。例年、朝のCSの時間に行っていましたが、朝の公園には子どもたちがあまり遊んでいないので、去年は午後に行いました。

2) お楽しみ会

教会のガレージを利用して、焼きそば、かき氷を食べ、スライム作りや工作、簡単なゲームを楽しみます。ひとりのCS教師が経営する保育園や学童からの参加もあり、通りがかりの子どもが飛び入りしてくれることもあります。去年はOKC夏期伝道チームの滞在中だったので、パントマイムや体を使った讃美、ピースで十字架のネックレスづくりなどをしてもらい、子どもたちは大喜びでした。

3) サマーキャンプ

新会堂を与えられてからは教会に1泊しています。共同の礼拝の後、開校礼拝をして、市民プールへ行きます。夕方戻って夕べの礼拝に出席します。年に1度、この日の夕礼拝は子ども向けの説教があります。去年はCS教師による「放蕩息子」の劇の後、牧師が同じ箇所から説教をしました。青年会と共にガレージでのパーベキューの後、近隣の公園へ肝試しと花火にでかけました。肝試しについては、クリスチャンで???という心配もあったのですが、ゴー宣教師から「暗闇と光を体験する意味をふまえて」と

いうアドバイスをいただき、始める前に校長が信仰生活に結びつけて短く説明してからはじめました。青年たちが脅かし役をしました。翌日は早天礼拝、朝食、分級の後、去年は河原に出かけて泳いだり水鉄砲したり、カレーを作って食べたりして楽しみました。キッチンワーカーとしても女子青年の積極的な奉仕があり、青年たちの成長がうれしいキャンプでした。去年は川越教会のCSが合流してくださり、子ども同士、青年同士の交わりも豊かに与えられ、とても良かったと思います。

4) 野外礼拝

昨年からの大きな変化として、野外礼拝の定例化があります。基本的に第4主の日は午後近隣の公園で礼拝をすることにしました。朝に弱い青年たちが午後なら大勢参加してくれることや、親と一緒に共同の礼拝から教会に来るために、普段はCSに参加できない子どもたちが午後なら参加しやすいというメリットがあります。また、午後の方が公園が賑わっていることも魅力です。いつもの礼拝をそのままでも周囲の人々は近づいてくれないので、OKCにならって体を使った讃美やバルーンアートでアピールします。いろいろな形の枠を使ったシャボン玉も好評で、何組かの親子が遊んでいってくれました。人が集まったところで聖書の紙芝居を読みます。予想以上に見ていってくれるので、手応えと喜びを感じています。去年は12月25日が第4主の日にあたったので、サンタクロースの衣装で、大きな袋にトラクトとバルーンをつめて、50人ほどの子どもたちに配ることができました。ここでも青年たちが大活躍でした。野外礼拝についてはまだまだ工夫の余地がありますが、継続して出かけていって、伝道の喜びを味わいたいと思っています。

そのほか、花の日に消防署、警察署、老人ホームを訪問し、光の子の日には教会員に、主にある成長を祝ってもらいます。ペアレントデイに

は教会中のお父さん、お母さんにクッキーを手渡します。クリスマス礼拝の後の祝会、毎月の誕生会などが定例の行事です。

5. 今後の課題

CSの存在のアピールと、行事への誘いの手段として、過去には小学校の校門前でのチラシ配布をしていましたが、昨今の社会情勢の影響を受け、難しくなりました。学校の許可を得て配布しても、心配する保護者から警察への通報があったことがありました。ディズニーなどの映画会も好評だったのですが、チラシを見た市民から著作権違反との指摘があったことがきっかけで、最近はお休みしています。今は、はじめた野外礼拝を通して、外へのアピールをし、子どもたち自身が身近な友だちを誘えるよう、CSの内容自体も、契約の子どもが真の喜びと楽しさを体験するものを追求していくことかと思っています。

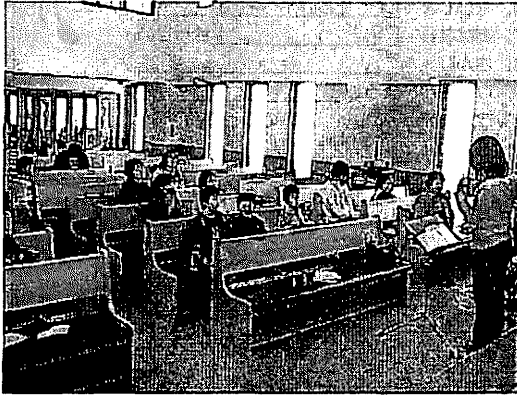
坂戸教会では今年3月にCRCのチャールズ・ホン宣教師を、青少年担当協力宣教師として迎える予定になっています。これは、私たちの大きな喜びです。チャールズ宣教師と坂戸教会のつながりはかれこれ10年になります。OKC夏期伝道のメンバーだったチャールズが、宣教師として赴任してくれるということ自体本当にうれしいのですが、その豊かな可能性に多くの希望を感じています。現実には、去年のOKCとの交わりを機に、しばらく教会を遠ざかっていた2人の契約の子(青年)が戻ってきて、信仰告白に至りました。また、青年CS教師の一人が献身を志し、今春から神学研修所に通うこととなり、今年のCSは既に多くの夢でふくらんでいます。

埼玉西部地区の諸教会の交わりも今年一層の充実を目指していますので、CS同士の交わり、合同の行事などへの期待もあります。CS教師同士の情報交換などにも今後は積極的に取り組みたいと思います。

CS 生徒が減少していき、CS 教師も心細くなっていた時期が、坂戸教会にも何年間かかりました。しかし昨年、教案誌を「成長」からこの中部中会の教案誌に切り替えてからは、改革派信仰に基づく安心感と、知っている先生方がお忙しい中書いてくださった原稿に教えと励ましを受け、またゴ－宣教師を始め、私たち CS

教師を訓練して下さる先生にも恵まれて、私たちの内に安心感と喜びが満ちてきていると感じます。子どもたちと共に成長するこの幸いな奉仕に召されていることを主に感謝し、これからもさらなる成長を目指し、喜び楽しんで奉仕に励んでいきたいと思ひます。

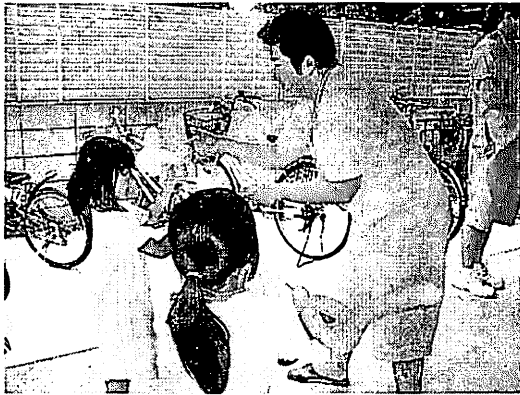
(文責 島野美佳子)



〈礼拝の様子〉



〈サマーキャンプ 河原で水鉄砲合戦〉



〈お楽しみ会 CRC オレンジコリアンチャーチの伝道チームと共に〉





今日のしゅうほうは
うたをうかがいかいてくれ
んた〜んよ


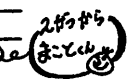
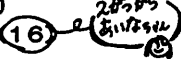
きょうかいがっこう しゅうほう

2008年1月15日

しかい いけ た せんせい

1. もくとう
2. さんび 14 
3. おいのり 
4. 十戒 (じっかい)
5. ことば カテキズム 冊 76
6. せいしよ エヨハネ5:14~15
7. おはなし ぶらたけまきみ せんせい
8. さんび 55



9. けんきん ほろしどもやんまことん 
10. けんきんかんしゃ おいのりとさんび 
11. しゅのいのり
12. しょうえい (16) 
13. もくとう
14. おしらせ

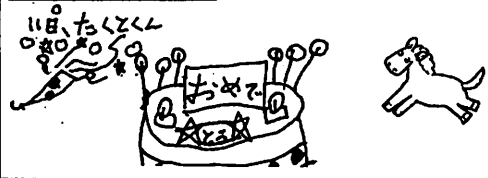
<今日のみことば>
Iヨハネ5:14

1月のみことば

よろこびいわいしゅにうたえよろこびうたえみまえにうたえ

1月のおたんじょうび

(しへん100:2)


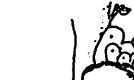


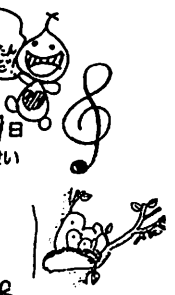
今日のしゅうほうは
のせみからうたがうたえてきた
だ



きょうかいがっこう しゅうほう

2008年1月29日

しかい はのかわ子 せんせい

1. もくとう
2. さんび 55 
3. おいのり 
4. 十戒 (じっかい)
5. ことば カテキズム 冊 78
6. せいしよ ローマ8:14~16
7. おはなし 内とう せんせい
8. さんび 51



9. けんきん ほろしまいごらん たくみん 
10. けんきんかんしゃ おいのりとさんび
11. しゅのいのり
12. しょうえい (16) 
13. もくとう
14. おしらせ

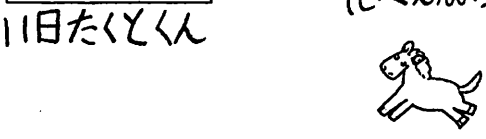
<今日のみことば>
ローマ8:14

1月のみことば

よろこびいわいしゅにうたえよろこびうたえみまえにうたえ

1月のおたんじょうび

(しへん100:2)



本誌の基本方針

～教会（日曜）学校像について～

相馬伸郎（『教会学校教案誌』編集長）

1. 子どもの「礼拝共同体」としての日曜学校

教会をあらわす聖書の表現の一つに「祈りの家」（イザヤ第56章7節、マタイ第21章13節）があります。神の民の祈りの家である教会はまた、古来、「学びの家」と称されてまいりました。

教会は、神の御言葉によって立ちもし倒れもするのですから、教会が御言葉（教会の教え＝教理）を教える、つまり学びを施す場所として整えられ、考えられて来たことは当然であったと思います。学びは、必然的に、神の生ける言葉なるイエス・キリストへの礼拝を生み出します。むしろ礼拝においてこそ学びの対象となる生ける神との交わりが与えられ、深められてまいります。つまり、礼拝なしに、教会の学びは成立しないのです。

私どもは、「日曜学校」と称して自らの営みを致しておりますから、うっかりすると「学校」の真似事のような営みへと傾斜してしまうのではないかと思います。日曜学校を学校と称しますが、何よりも、教会自身が学びの家、学校です。そうであれば、日曜学校は、まさに教会独自の「学びの家＝学校」になります。

現住陪餐会員によって組織される言わば大人の教会は、礼拝共同体です。このすべての営みを通して、キリスト者が生み出され、その成長がなされます。また、教会が形成され、成長させられます。日曜学校の営みもまた、「子どもの礼拝共同体」の営みとして捉えること、これが本誌の基本的な日曜学校像です。

日曜学校のことを、外部向けに「子どもの教会」と呼ぶ教会もあるようです。もちろん教会は大人と子どもを含んだ契約の民の集いですから、大人の教会、子どもの教会という言い方は

神学的には疑問が投げかけられてしかるべきです。しかし、日曜学校を、子どもたちの礼拝共同体として捉えようとする意味であるなら、むしろすばらしいことであると思います。

日曜学校の礼拝式を、私どもはどれだけ真剣に礼拝式として理解し、捧げているか、これは常に問われて良いことと思います。「大人が中心の主日礼拝式は本物だけど、日曜学校の礼拝式はその真似事……」このように考える奉仕者は誰もいないと思います。礼拝の真似など不可能です。日曜学校の礼拝式にも、キリストの臨在が確保されています。神の御言葉を語る説教者は洗礼を施されたキリスト者なのですから。

未陪餐会員や地域の子どもたちを対象にした日曜学校とは、現住陪餐会員である日曜学校教師の交わり（教会）の中に子どもたちを迎え入れてなされます。聖餐における交わりの共同体の中に、子どもたちを招き入れ、彼らに届く言葉と式次第（プログラム）を整えて捧げられるのが子どもの礼拝式です。つまり、そこには鮮やかにキリストが臨在しておられるのです。日曜学校の礼拝式に出席して、その後の主日礼拝式（朝拝）に列席する契約の子は二回の礼拝式にあずかっていることになります。

2. 分級中心より、礼拝式中心

子どもの礼拝共同体の形成という視点から日曜学校の働きを位置づけるとき、必然的に、日曜学校の働きの比重は、分級に置くのではなく、礼拝式に置くこととなります。

正直に申しますと、おそらく平均的な日曜学校教師の奉仕の姿は、土曜日の午後になって、切羽詰ったように焦る……。もちろん、それは

良いことでないことは明らかです。そこでこそ、準備の手間を軽減させてくれるような教案誌やワークブックを求める……。本誌が、繰り返し申し述べて参りましたことは、「分級展開例をそのまますることが大切なではありません。分級では、子どもと共に祈りを捧げることができればそれで良いのです。」準備したものの全部をやれたかどうかということが分級運営の良し悪しの基準にはならないと思います。礼拝式で、きちんと福音が届いていれば、分級は「オマケ」くらいに考えてくだされば良いと考えております。ただし、子どもたちがそのオマケに目がないことは、お互い良く知っていることでもあります。

3. 子ども礼拝式における説教の重要性

——日曜学校の目標——

日曜学校の目標を、もし一言で言い表すなら、「祈りの生活へと導くこと」となります。「信じることは祈ること」であり、それゆえに日曜学校の目標は、自分の言葉で祈れる子ども、祈る生活を確立できるように導くことにこそあります。しかもそれは、まさに公同の、共同の祈りである子ども礼拝式の充実によってこそ、正しく担われます。個人的な祈りの生活の訓練だけに焦点をあてるようなアプローチを改革教会はとることはできません。主日礼拝式（公同の大きな祈り）に支えられ、あずかってこそ、個人の小さな祈りの生活は生み出され、健やかに立つことができます。

またそうであれば、当然、子ども礼拝式の中心が神の言葉の説教に求められることは、明らかかと思えます。何故なら、祈りとは信仰の業であり、それは御言葉を聴くことから始まるからです。外からの言葉つまり御言葉によって、信仰が与えられ、祈りの言葉は与えられ、生み出され、紡ぎ出されるのです。ですから、日曜学校の働きにおいても、あるいはそこでこそ説教の重要性が強調されることになるでし

う。そうなれば、牧師こそが日曜学校の奉仕、礼拝説教を担うことが求められるのではないのでしょうか。

本誌の説教展開例は、要旨、ポイントだけではなく、ほとんど完全原稿を掲載しています。それは、一つのモデルを提示する試みです。もちろん、大切なことは奉仕者自らが、これを参考にしつつ、御自分の言葉で説教の言葉を紡ぎ出していただくことです。そこでわきまえるべきことは、聖霊御自身が、聖書を説く自分の言葉、声を用いて子どもたちに届けてくださることを信じることです。主イエスへの愛と子どもたちへの愛があれば、必ず、子どもの心に主イエスを紹介することができます。届くことができます。

4. 説教の完成としての牧会

——分級の目標——

さて、しかしながらまたここでこそ、分級の固有の意義、重大な意義も明らかになります。神の言葉の説教を通して子どもたち全体になされる御業は、また一人の子どもの固有の状況、心の奥底にも届きます。しかし、一人の子どもの魂の状況に、よりの確に触れ、届けるためには、「牧会」が求められます。私どもが、分級の目標を「共に祈る」こととしておりますのは、子どもへの牧会を指し示すあり方を指し示しているのです。この牧会に奉仕するのが分級なのです。この分級イメージは、「牧会」のイメージ、子どもと向き合う姿勢です。子どもの心、気持ちを聞き出すこと、聴き取ることが求められます。そこでこそ、教室において生徒全体に均一の知識を提供する「学校」のイメージは薄くなるはずで

説教（神の言葉の共同的伝達）と牧会（個人的伝達）が有効になされる時、日曜学校は正しく豊かな実りを結ぶことを確信致します。

5. 教会形成の一環としての日曜学校

——教師会と教師——

およそ教会的な奉仕の在り方は、いずれも共同的な奉仕の業です。とりわけ、日曜学校の働きは、共同の働きによってこそ正しく担われ、正しい実りが結ばれるのです。つまり、担任教師の力量に基く、それぞれの分級の力に期待するよりむしろ、教師会（全員）の奉仕と祈りを束にして子ども礼拝式の充実を求め、そのために努力するあり方こそ求められていると考えます。

例えば、礼拝説教を担うのは、担当日の奉仕者一人です。しかし、その時こそ、その背後の教師たちの祈りがどれだけ集められるかが問われます。教師たちの祈りに支えられてこそ説教や、その礼拝式は必ず聖霊の豊かな働きのなかで捧げられることを確信いたします。

教師会が、単に教師たちの実務的会議で終わるのではなく、日曜学校の働きを担う核としての「共同体」として形成されることが大切なのです。具体的には、充実した教案研究がなされ、全体の課題と一人ひとりの課題とを共有できる教師会を持つことです。本誌は、その一助となるために発刊されたものです。

さらに申しますと、教会全体の祈りに支えられなければ、日曜学校の業が、教会形成そのものとしての結実を求めることは難しくなります。日曜学校の働きとは、各個教会の形成と伝道の働きそのものと直に繋がっているのであり、そうでない働きは、少なくとも改革教会の教会形成の筋道とは異なる日曜学校となってしまいます。だからこそ、礼拝指針の第31条にある通り、小会の監督、配慮が定められているのです。日曜学校の営みとは教会形成そのものの営みなのです。いわゆる賜物のある牧師とか専門家の牧師だけが担うものではありません。

6. 伝道する日曜学校像

日曜学校は契約の子の信仰継承のためにもあります。しかしこれまで、宣教地である日本の教会は、日曜学校を地域の子どもたちを捉える伝道の場として考えてまいりましたし、今なお同じ状況にあると思います。

私どもは、今日の日本の荒廃は、教会の福音伝道の力の低下の責任であると考えております。社会から、教会の責任を問う問いはどこからもあがっておりません。しかし、神からは、問われています。

私どもの目に子どもたちは、どのように映っているでしょうか。彼らは、天地の創造者なる神、罪の赦しの福音に飢え渴いて、倒れています。真の教会で説かれる福音が届きさへすれば、子どもらこそはっきりと霊的な反応を示してくれるのです。現実の困難さを理由に、日曜学校を通して、地域の子らに伝道しようとする意欲と働きを減退させてはなりません。

私どもは、教案誌を作成し、出版すればそれで良いとはまったく考えておりません。日本キリスト改革派教会をはじめ日本の諸教会から子どもたちの讃美の声、祈りの声が溢れるようになることをこそ目指しています。

「子どもたちを私のところへ来させなさい」と命じられた主イエスの御前に、共に悔い改め、祈りの叫びをあげたいと思います。忍耐と労苦が求められます。けれどもその光景を夢見ながら、主と共に、皆様と共に、戦い続けてまいりたいと祈り願っています。

本誌へのご批判、ご意見をお寄せ下さい。改革派日曜学校像を確立するために神学的、実践的な広い論議を心から期待致しております。

Soli Deo Gloria（ただ神の栄光の為に！）

講演「魅力ある日曜学校を目指して—教師会の形成—」

相馬伸郎（『教会学校教案誌』編集長）

序論

中部中会教育委員会は、2001年4月に「日曜学校教案誌」を発行しました。すでに4年半が過ぎました。現在は、新しい救いの歴史のカリキュラム、旧約聖書と新約聖書を2年にわたって学ぶカリキュラムにもとづく新しい「教会学校教案誌」発行のために、すでに、動き出しております。船出した当初のことを思い出せば、おそらく多くの方々が、ここまで継続するとは、予想できなかったのではないかと思います。しかし、中部中会の有志の教師と中部中会の有志の日曜学校教師会の力で執筆、発行が支えられてまいりました。しかも今では、日本キリスト改革派教会のすべての中会から、執筆者が与えられております。これは、最初に、立ち上げた者たち、今の編集部の教師たちにしてみますと、まさに神の恵みの証であると、心から感謝する者であります。

1. 「教会学校教案誌」発行の志と目的

「教案誌」の発行の志と目的はいくつもあります。そもそもの問題意識は、第一に、改革派信仰に立つ、自前の、定期刊行物としての「教会学校教案誌」が50年来、刊行されていないということへの問題意識です。それは、中部中会、現場の教師の声に端を発しているのです。当時の私のなかには、にわかには信じがたいことでしたが、他教派の教案誌を教師会で採用しながら、——ただし、そのこと自体は、現状では、教案誌がないわけですから、仕方がないと思います。ただし、その教案誌のなかには、明らかに私どもの信仰理解とは異なる立場の神学に立つものもありました——しかし、問題とす

べきことは、そこで牧師がそのまま渡してしまっただけで、丁寧な教案研究をなさずにいるという現実であります。そこに、日本キリスト改革派教会が、相対的に見て、成人への教理教育は熱心でありながら、日曜学校における教育的伝道においては、乖離現象が起きているかもしれないと思いました。

多くのバプテスト教会は、教会全体が学びの家であるという理解に立って、礼拝と教会学校（分級）を、同じ程度の重要性に位置づけています。つまり、すべての会員が教会学校の生徒であって、分級に出席するという姿勢です。ですから、日本キリスト改革派教会だけが、成人教育に熱心であるなどとは、言えないでしょう。しかし、少なくとも、教えられている内容は、改革派信仰なので、もっとも聖書と伝統に即した教理教育が施されているとの自負は、なお、私どものなかにはあってよいと思います。

しかし、そこでも、こと日曜学校の現実において、先ほど申したような教案研究がなおざりにされている現実があるとすれば、もしかすると、改革派神学にもとづく教理教育を施されている大人である教師が、しかし、自分たちが教理を教えるところで、説教するところで、カルビニズムではなく、アルミニアン（救いにおける人間の可能性を強調する教え）のようなことに気づかないところで陥る危険性は、ありえると考えました。これは、実は、私どものような牧師自身でさえ、常にその危険性をはらみ、これを克服するようにと修練をかさねているわけなのです。たとえばまた、超教派で発行され、幅広く採用されているある教案誌に記事のなかには、福音の教育であるより、道徳教育になっ

てしまう危険性を秘めたものがあると私は認識しております。その危険性をわきまえ、少なくとも注意して使用する必要性があると思いました。

横道にそれますが、それと通じることですが、大人への教理的教育も、自分の生活において実践する、結実させるところまで、教師がきちんと見届けるところまで責任をもって指導するというその次元において、なお課題があるのではないかという問題意識がわたしの中にはとくにありました。教理教育が、伝道の実践となり、伝道の言葉を整える意味でも大切になる、その力がカテキズム教育のなかにはあるのだというわたしの認識がありました。

第二のことは、なんとかして、「子どもたちをわたしのところに來させなさい」(マルコによる福音書第10章14節)という主イエスの命令に生きたいという祈りでした。日本の子どもたち、地域の子どもたちを日曜学校(主イエスの臨在したもう教会)に招き入れたい、主イエス・キリストと出会ってもらいたいという祈りです。地域の子ども達が来なくなっている日曜学校への危機意識です。この現状を、あきらめてしまう、契約の子たちが来ているから、彼らを育てるだけでよいという現状を受け入れてしまうことへの警鐘を鳴らしたい、鳴らし続けなければならないと思いました。そして、それを克服する運動、教師を励ますような運動を起こしたいと思いました。

今日、日本の子どもたちに、福音の真理、神の言葉が届いていません。もとよりそれは、大人においてはすでに深刻な現実であることを、私ども牧師、伝道者は、自分の無力感と真剣に戦い続けなければならない、厳しい状況が続いていると思えます。しかし、そのような現実の只中でこそ、主イエスの説教を思い起こさざるを得ませんし、思い起こします。「イエスは町や村を残らず回って、会堂で教え、御国の福音を

宣べ伝え、ありとあらゆる病気や患いをいやされた。また、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。そこで、弟子たちに言われた。『収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい。』(マタイによる福音書第9章35節~38節)飼う者のいない羊たちの状況とは、まさに現代の地域の子どもたち、青少年のなかにこそ色濃く見えている状況ではないでしょうか。弱り果てて倒れているのです。この現実を見ることができなければ、おそらく私どもの日曜学校伝道、青少年伝道は、正しい実りを結ぶことは、ほとんど難しいでしょう。私どもは、現実を、主の眼を与えられて、同じ思いで見ること、そして、そのために、教会員のなかから、一人でも多くの奉仕者が与えられるように、心から祈りたいのです。

実は、第19号から、事情によって、教案誌の発送の仕事をも担うようになりました。今までは執筆奉仕者とは、直に触れることはできましたが、この奉仕によって、こんどは購読者と直に触れることができる幸いを与えられています。新しい購読者が増え、教師会が増えていることの手ごたえも感じて嬉しく思います。しかし同時に、「来年度から、減らしてください。」という連絡を受けることもあります。もとより、これは、「商売」ではありませんから、分かりましたと、素直にお従いするのです。けれども心の中に、「ひとり教師が減ってしまうのか。辞めてしまう教師がおられるのか」と、たいへん悲しい気持ちになります。購読者が減ることが悲しいということは、この際どうでも良いのです。しかし、奉仕者が減ることは、できる限り避けなければならないと思えます。

第三のことは、契約の子たちに、改革派信仰を喜んで継承してもらいたい。次代を担う教会人として、主とその教会に大きく用いられる奉

仕者として育てたい。「キリスト教有神的世界観」に基づいて、積極的に、主の証人として社会のなかで活躍してもらいたい、というものです。そしてそのためには、必然的に、改革派信仰を身に着け、生活の全領域で神の栄光を現す、信仰の熱心にあふれ、献身的な子ども達に育てたいという願いです。

旧ソビエト連邦時代に、ロシア正教は、厳しい伝道の状況にありました。しかしながら、当時の指導者たちは、自分たちの教会が共産圏のなかで、なお生き延びる可能性については、大きな自信を持っていたと言われます。それは、なぜかと申しますと、ロシア正教が、私どもでいうところの「契約の子」への教育に自信をもっていたからだと言うのです。ロシア正教が、信徒の冠婚葬祭はもとより、信徒の全生活に影響を及ぼし、教会の外への伝道の障壁は厳しいものがあっても、信徒の子たちが新しく生まれる限りは、ロシア正教がなくなることはありませんという自負なのです。

私どもはしかし、ロシア正教のように儀式や、冠婚葬祭におけるキリスト教習慣を子ども達に継承することでよしなどは、決して考えません。自覚的な信仰の告白とキリスト者としての世界観に基づく、生の全体を神の栄光のために生き、捧げる子どもを育てよう目指しているのですから、それだけに、むしろ戦いが険しいのだと思います。それだけに、逆にまた、子ども達が、教会から離れることの危険性は、ロシア正教より起こりうる可能性は高いのではないかと、正確には知りませんが、わたしは思っております。その意味から申しても、契約の子たちの教育は、確かに、第一には家庭で担う側面があるのは当然ですが、しかし教会を挙げて担い、キリスト者の家庭を支援し、信仰告白への教育と、そこから始まるキリスト者としての聖化の歩みに積極的にかかわること、教会活動の中に契約の子らの居場所を積極的に整える必要があると考えます。

第四に、このような日曜学校の営みの核になるのは、「教会学校教案誌」の存在ではなく、むしろ、これを正しく利用する教師会の形成を目指したのです。その意味で、教案誌は、教師の「虎の巻」ではありませんと、何度も主張しました。また、これは、一方で、正直に申し上げて、申し訳ない思いも抱え続けております。もう少し、虎の巻のような親切さがあればとも思いません。現状では、精一杯というところにあります。

本日の講演の主題は、まさにこの第四の目標について、皆様と学び、確認しあいたいとねがったのであります。

最後の五つ目として、創刊号に記したことでしたが、「すべてのキリスト者の教育と伝道のため」に資する定期刊行物にしたいということです。これは、確かに、今から思えば、無謀な、ビジョンであったかもしれませんが。私どもは、当初は、日曜学校教案誌として刊行したのですが、2004年から、『教会学校教案誌』と名称を変更しました。これは、3年経って、もともとの目的に少しでも近づかせるためでした。

実は今年、大会の機構改革委員会から、教育的な機関誌を発行することが提言され、大会教育委員会が実現の可否などを検討するようにと、大会で決議されました。正直に申しますと、大会的に全信徒、会員のための教育機関誌の発行を実現できるのかどうか、大会教育委員会の一人の委員としても、それは、きわめて大変な奉仕になる、危ぶむ思いが先立ってしまうというのが、正直な気持ちです。しかし、「大変だから何もやらない」、あるいは、「言い出した人がやればよい」、ということでは、歴史をつくること、教派形成はできないと考えております。

そもそも礼拝指針第4章の教会学校の項の第28条で、「教会学校とは、教会の教育的事業が主として行われる組織をいう。それには、日曜学校・週日学校・休暇中の聖書学校・その他がある。」と規定しています。つまり、教会学校と

は、教会の教育的機能を総括して言い表す概念なのです。教会は、なによりも幼子から高齢者まで、すべてのキリストの民、会員を教育、訓練する務めが主イエス・キリストから命じられています。「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。」(マタイ28章19・20節)特に牧師は、福音宣教によって、キリストの弟子を育て、洗礼を施して、キリストの体なる教会を造り上げて、会員を、神の子に対する信仰と知識において一つのものとし、キリストの満ちあふれる豊かさになるまで、つまり成熟した人間へと成長させる聖霊のみ業に奉仕することが求められています。ですから、教会教育、教会学校に牧師が率先して奉仕すべきことは明かなことです。その材料は、一つの教団であれば、教団、私どもで申しますと中会、そして何よりもまだまだ小さな教会なのですから、大会として提示することも重要であろうと考えます。

II. 日本キリスト改革派教会の日曜学校の現状と認識

このように壮大な志をもって、「教会学校教案誌」の刊行がなお今日まで継続することができましたことを、神の恵みとして心から感謝しています。執筆奉仕者、読者の方々に心から感謝するものです。

さて、それなら、発行者たちは、今日の私どもの日曜学校の現状に対して満足しているのかと申しますと、必ずしもそうではありません。少なくとも、私自身は、大変厳しい思いをもって、日本キリスト改革派教会の現状を見ております。講演者として何より願っていること、それは、ほとんど一つだけで充分であると思っています。それは、この危機感、危機意識を、皆様に共有していただくこと、真実に受け止めていただくことです。真実に受け止めるというこ

とは、現状を誰かのせいにしたたり、何かのせいにしたたりして、責任転嫁することはできなくなると思います。つぶやくだけ、あきらめてしまうことで終わることもできなくなると信じます。「真実に」認識するということは、「信仰的に」認識すると言い換えてよいのです。この研修会に集められた者たちから、ここから始まる、始めるのだという志です。神は、私どものこの祈りを、喜んで受け入れてくださるのだという確信です。いへ、神ご自身がこの私どもの祈り、教会の青少年への伝道を、契約の子が信仰に生きる子として育ててほしいという祈りを祈らせておられるのだということを、確認しあいたいのです。

端的に申し上げて、私どもの日曜学校の現状は、なお地域の子たちを主イエス・キリストに導くことができずに、喘いでいると思います。あるいは、もうそれが常態化してしまって、教会全体がこれを仕方がないのだと、受け入れているような雰囲気、もしかすると漂っているかもしれません。少なくとも自分たちの日曜学校には、契約の子たちが通っているから、それでよい、とする空気がどこかに漂っているのではないかと思うのです。

しかし、その一方で、これはきちんと申し上げなければなりません、この現状をあきらめないで、とにかくできる限りのことをしよう、契約の子の教育はもちろんですが、自分たちは、伝道するためにもっと真剣に祈り、教会をあげて取り組もうと励んでおられる教師や教会もあります。少なくとも、本日、ここに来られた方々、教師、牧師はそのような祈りを与えられていると思います。一つでも二つでもそのような日曜学校教師、教師会、そしてそれを支える教会、伝道所が増えること、これこそ、私どもの心からの祈りです。そのような教会が増えることこそ、私どもの最高の喜びなのです。「教会学校教案誌」の目標はまさにそこにあります。

私事ですが、この夏に、西部中会の一つの教

会にお招きを受けて、子ども伝道のためのお話をさせていただきました。それは、日曜学校教師会の方々だけの集会ではなくて、午後の集会には、多くの教会員が集っていただきました。そこにすでに、私自身今日もここで訴えることとなりますが、年来の願いが実現していることを見ることができました。つまり、そこでのわたしのお話は、教案誌を通じて、あるいはその他でも、訴え続けていることでした。「日曜学校の営み、日曜学校を通しての地域の子も達への伝道は、教会をあげて取り組むべき自分たちの課題である。励んでまいろう。」この認識がすでにその教会では、共有されていたのです。日曜学校教師はもちろんですが、長老たちが率先して聞いてくださいました。つまり、その教会は、日曜学校の働きとは、日曜学校教師会や校長、熱心に奉仕に励んでおられる一部の教師に支えられる営みではなく、教会全体を挙げて担わなければならない、聖なる務めであるという理解がすでに与えられていると思えました。そうであれば、もはやわたしのお話は不要であるとする思ったのです。

本論 教師会形成

1. 福音の本質と教会共同体

日曜学校の姿や雰囲気は、集う子らの年齢層、男の子と女の子の比率、それら集う子ども達によって異なると思います。しかしそこで、何よりも決定的に影響を与えるのは、教師自身の存在であろうと思います。日曜学校の営みは、日曜学校教師によって担われ、一人ひとりが担任の子も達と向き合うのですから当然のことです。やはりそこで、教師個人の信仰の資質の問題が決定的に取り上げられてまいります。この点をなおざりにして議論することは、机上の空論になるおそれがあります。この世の学校組織において、教師個人の資質が決定的に重要であることは、お互いに経験済みのことではないでしょうか。

ですから連載におきまして、教師の資質についても書きました。ある牧師からは、教師たちから、ハードルが高いという嘆きの声があったと教えていただきました。また、逆にある牧師からは、教師の資質、資格として、ハードルが低すぎるのではないかという応答も頂きました。大変、興味深いことでした。それぞれに、真実なのだと思えます。私自身は、そこに書いたとおりの姿勢で、現実の奉仕に当たっております。

なるほど神のみ業も、ひとりの突出した賜物と信仰の教師によって担われて来た面も確かにあります。使徒たちの例を挙げれば、すぐに分かると思います。2000年の教会の歴史においてもこのような「特別の名前」が無数に与えられてまいりました。しかし同時に、まさに無名の、しかし、熱心で、献身的な信徒たち、婦人の信徒たちの奉仕なしに、教会の歴史を語ることもできません。

日曜学校は、教会の業です。教会の教育的伝道のための機関です。およそ教会的な奉仕のあり方とはいずれも共同的な奉仕の業です。簡単に言えば、チームプレーによって担われるものです。とりわけ、日曜学校の働きは、共同の働きによってこそ正しく担われ、正しい実りが結ばれるのです。教師会として「共に」担うべきものです。つまり、担任教師個人の力量に基く、それぞれの分級の力に期待するよりむしろ、教師会（全員）の奉仕と祈りを束にして捧げることが重要なのです。そしてこの点からも、私どもの日曜学校の営みの中核が、分級にあるよりも、子どもの礼拝式にこそあることにも通じています。礼拝式は、個人の業ではなく、まさに共同体の業です。その充実を求め、そのために努力するあり方こそ、実りある日曜学校の営みの土台、中心なのです。

たとえば、まさに突出した、個性的な伝道者、使徒パウロ自身が、その手紙を記すときに、ほとんどが、「パウロとシルワノとテモテ」から書

き送りますと告げていることを確認したいと思います。いわば「共著」のような書き方です。しかし、もとより、著者は、一人パウロなのです。それなら何故、そのような書き方をしたのでしょうか。それは、パウロの伝道はいつでも、共に働く同労者との交わりに支えられてのものであったからです。ただ単に、パウロ先生の伝道が困難であって、助け手、助手が必要であって、彼らへの言わば礼儀として書きとめたというような性格のものではないと思います。

そもそも使徒パウロは、キリストの福音を、「わたしの福音」（ローマの信徒への手紙第2章16節）とすら呼びえたほど、キリストの福音を自分のものとしていました。その彼が、何故、教会宛に書き送る手紙の挨拶部分で、常に、「シルワノとテモテから」と書いたのでしょうか。それは、福音とは、彼らとの具体的な交わりの中で、生きられ、体得されたものという意味が込められていると思います。彼らと一緒に奉仕に生き、共に祈りあうというキリストにある交わりなしに、キリストの福音の全貌を知ること、その本質を究めることもできなかったのだと思います。

実に、福音が正しく語られ、正しく信じられるところには、必ず、キリストの教会が生み出されてまいります。福音そのものが、キリストにある交わりを形成させるのです。またそこで同時に、その交わりのなかで、福音は確かめられ、体験させられるのです。この関係は切り離せません。新約聖書のほとんどが、教会宛、共同体宛に書き送られた性格を持っていることを見るだけでも明らかな真理です。

要するに、私ども教師が子どもに証し、伝えるべき内容である、キリストの福音そのもの、教理が教会共同体を生み出し、形成させるのです。さらに、その伝え方まで規定して行きます。さらに、日曜学校のあるべき姿、日曜学校像や、求められるべき教育目標までも導かれてまいります。今回は、この事柄には触れませんが、教

案誌の連載で、教理そのものが教え方まで規定する、カテキズム教育の形に触れましたので、確認していただければと思います。

スピーカー（本体）が、それを響かせる箱と組み合わせられたとき、はじめて一個のスピーカーとなるように、福音あるいは教理も、信仰共同体と不可分なものなのです。福音が生み出す交わりによってこそ、豊かに響き渡るものなのです。相手に深く届くものなのです。

私どもの目標実現のためには、教師個人の成長を求めることは決して避けて通れません。しかし、日曜学校教師会の成長と形成を求めるところこそ、日本キリスト改革派教会らしい、つまり聖書に即した、日曜学校の営みと結実の姿があると信じます。その中で、一人の教師の真実な成長がなされるのではないのでしょうか。

II. 子ども達の福音的共同体の中核としての日曜学校教師会

この真理に基づけば、日曜学校の営みが正しく実るためには、また日曜学校の絶えざる目標としても、子ども達による、子ども達のための福音的な共同体の形成が求められることも自明になるのではないのでしょうか。そして、そうであれば、その中核になるべきなのは、日曜学校教師会に他なりません。確かに、子ども達は、教師個人のなかに、福音の魅力を発見することの方が近道となると思います。しかし、その教師個人の福音的な輝きは、その教会共同体自身が持っている、そこで養われる聖霊のみ業、力、命によることが大きいのではないのでしょうか。日曜学校教師にとって、その教会の交わりの力、教会自身の教育力が成長の鍵となるのではないのでしょうか。それをもっとも与えられる交わり、教育と研鑽の場こそ、日曜学校教師会なのです。

わたしは、確信しておりますが、子どもにとっての日曜学校の魅力とは、結局、福音の魅力です。主イエス・キリスト御自身の魅力であります。この確信が揺らいだら、日本キリスト改革

派教会の日曜学校の営みにならないと考えます。ただし、子ども達を、このまことの魅力へと導くためには、どうしても目の前に見える、立つ教師の存在が問われるのです。子ども達は、最初は、福音を共鳴している教師の存在と教師同士の交わりの中に、福音の力を認めてゆくのではないのでしょうか。それは、地域の子らには、学校や地域の共同体にはないもの、なにか新鮮な空気をそこに認めるからなのではないかと思えます。子ども達は、教師自身が本当に日曜学校に祈りと熱心を注いでいる姿、喜んで子ども達に目を注いでいる姿、教師どうしが信頼しあって、協力し合って自分たちに主イエスを紹介し、恵みを届けようとはつらつとしている空気を感じて、日曜学校の魅力のなかへと招かれてゆくのではないのでしょうか。

これはまた、教師自身の体験からも、よく分かるのではないのでしょうか。もしも、教師会に出席することが苦痛であれば、よい日曜学校奉仕を望むことはできなくなると思えます。逆に、共に祈り、支え、励ましてくれる先輩、後輩の信仰の仲間たちがいれば、説教の準備に苦しみ、分級教案準備に焦って、責任の重さに押しつぶされるようなときでも、新しくやる気がわくと思えます。

さらにここであらためて確認したいことは、福音が交わりを作り出すのですから、教師自身が、分級の生徒との交わりそのものから福音的な慰めを受けることができるはずですし、それを求めることが重要なのです。第10号でも取り扱いましたが、分級において、単に、教える人と教えられる人という区別だけではなく、福音による交わりを育てるという意識をもって、教師が奉仕することが重要です。子どもの信仰と成長から教師が慰められるのです。子どもたちの福音的な交わりからも教師は育てられるのです。

またそれは、子どもたちどうしの交わりを育てるためにも極めて大切です。たとえば、欠席

が続く子どものために、教師はとりなしの祈りをするはずですが。しかしその祈りを子ども達にも共有してもらうのです。小学科の中級にもなれば、それを積極的に喜んで参与する子もいるはずですが。そのようにして、分級において福音的な、霊的な共同体が育まれてまいります。

Ⅲ. 楽しい教師会をめざして

楽しい教師会、あるいは、「楽しい奉仕」などという表現は、よろしくないのでしょうか。いえ、日曜学校ほど、楽しい奉仕にしなければならない奉仕も少ないと思えます。なぜなら、教師が楽しんでいなければ、子ども達に楽しい日曜学校を味あわせることなどできないからです。

その意味からも日曜学校教師会を、楽しい会議にすることがとても大切であると思えます。そのためには、日曜学校が祝福され、子ども達を生かすためには、楽しい教師会は不可欠だという共通の「理解」と「心がけ」が大切です。その基本は、「兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい。」(ローマの信徒への手紙第12章10節)に求められるでしょう。また、交わりを育てるための鍵となる信仰の真理は、「詩編と賛歌と霊的な歌によって語り合い」(エフェソの信徒への手紙第5章19節)という御言葉にあると思えます。賛美とは、まさに神に向かうべきものです。人に聴かせるための賛美歌は、芸術でしかないでしょう。しかし、ここでパウロは、歌を歌うその心のままに、お互いに向かって語り合いなさいと勧めるのです。神に感謝し、賛美する思いのままに、兄弟を見るわけです。ここに、交わりを育てる鍵があります。

言うまでもなく、これらの本質は、信仰の課題です。これらを、精神論、つまり品性とか性格の課題として考えることは危険です。むしろ、「技術」の課題、たとえば言い方などを工夫すればよいだけのことが多いかと思えます。人間関係における技術とは、カウンセリングの手法、

対人関係の知恵などです。しかもそれらは、すでに御言葉によって教えられていることごとと重なるものです。つまり、技術と信仰（あるいは愛）とを分離することもまた危険であろうと思います。

IV. 教師会で何をするのか

(1) 教師会は、現実には、ごく限られた時間でなされると思います。(ちなみに、名古屋岩の上传道所では、毎月第三主日の1時30分から4時過ぎまで行われています。中高科は、その後さらに、独自に打ち合わせのときを持ちます。) 本当は、ある程度ゆっくりとした時間をとることができれば幸いです。しかし現実には、ほとんどの教会は、月に一度の開催となるのではないのでしょうか。そのような状況であれば、少なくとも最低2時間は必要となるのではないのでしょうか。

しかし、これもまた現実的には、多くの教会が主日の午後も学びや会議や奉仕に忙しくしていると思います。しかもは、おそらく多くの教師たちは、他の奉仕や会議をも兼務しておられるのではないのでしょうか。そうなれば、時間の関係上、いきおい、事務的なことを優先する傾向にあるかと思いますが。年間計画の立案。行事計画の準備、状況。前月あるいは当月の礼拝式や分級における課題。翌月の計画・準備・確認などなど。それだけでもきちんとなすのは、大変なことです。しかし、この事務的な連絡などをおろそかにすることは、日曜学校の営みに決定的な支障をあたえますから、やはり不可欠のことです。

(2) 教案研究にどれだけ時間を費やすことができるか、それが、教師会の充実の決定的な要素となります。弊誌発行の一つの大きな意図はまさにそこにありました。弊誌を採用しておられる教師会は、時間のある限り、聖書研究、カテキズム研究、説教展開例を共同で読んでいた

だきたいと思います。しかし、一月4週のすべてを読むことも大変です。一週分だけを集め的に取り上げてくださることも一つの方法です。あるいは、それに加えて、「単元のねらい」だけでも、すべて読んでいただくことも助けになるかと思いますが。

(3) 「説教の演習」「教授法の研究」など、教師としての技術の研鑽の場を設けることも大切です。毎月持つことは、おそらく不可能でしょうから、行事計画の少ない月や、あるいはそのために特別の教師研修会を開くこともすばらしいと思います。自分の分級を牧師や他の教師に陪席してもらい、批評を受けることも有意義です。そのように、仲間の声に心を開いて、耳を傾けることができれば、それだけですでに十分な効果があると言っても過言ではありません。

(4) 教師の動機付けが常に新鮮になされることも重要です。読者の皆様に、教案誌編集部と執筆陣の日曜学校への情熱が伝われば、それだけでも発行の労苦が報われます。なぜなら、教師たちが、もしも「惰性」で奉仕し始めるなら、子ども達を、躓かせることになるからです。そのような日曜学校であれば、子ども達を主に導き、ささげることなどどうして望めるのでしょうか。牧師を始め、校長の重要な務めの一つは、常に、教師を召しに応えるように励ますことです。豊かな実りを期待する信仰を富ましめるように、動機づける務めが与えられていることを自覚していただきたいと思います。現在は、各中会で、教師研修会・訓練会が行われています。牧師や校長は率先して出席し、教師たちに参加と研鑽の必要性を訴えていただきたいと思います。

(5) 教師会は、自分自身の課題、また担任の子ども達の課題を皆で祈ってもらう場所でもあります。教師会は、共に祈る仲間たちの集いで

す。祈りの課題は、山ほどあるはずです。

筆者は、(すべての会員がそうなのですが)日曜学校教師方は特に、週日の祈祷会に必ず出席してほしいと考えております。それは、本人のためだけではなく、この尊い務めが、教師会だけの課題ではなく、教会全体の課題であることを祈りの課題とすることに通じるからです。五つのことを数えましたが、他にもあるかと思えます。

いずれにしる、教師会の主要な目的は、教師の信仰の研鑽を目指すところにあります。そして、繰り返しますが、これらは、子ども達の福音的共同体の中核としての教師の交わりが豊かにされ、日曜学校の営みそれ自体が福音にかなったものとして整えられることを、目指すのです。それを自覚することができれば、成熟した教師、教師会となってゆくのではないかと思います。

V. 日曜学校教師会と教会(小会)との関係

「教会学校とは、教会の教育事業が主として行われる組織」(礼拝指針第28条)とありますように、日曜学校は、教会学校の監督、管理の下になされるものです。また、第31条は、「小会の監督」と言う項目を立てて、「小会は、すべての教会学校を監督し、その校長を選任する。校長は、牧師の同意を得て教師を小会に推薦し、小会はこれを任命する。小会は、教会学校の状況とその必要について常に報告を受け、その十分な活動に必要なものを備えるように配慮すべきである。」(第31条)と日曜学校との緊密な関係と責任の所在を規定しています。

日曜学校、とりわけ、契約の子の教育は、教会全体の最重要な責務です。現在、憲法第三委員会では、礼拝指針の改訂作業がなされています。その第一次改正案では、幼児洗礼において、会衆の誓約を求めていました。これは、とても大切なことと思えます。牧師が親に対して誓約を求めた後で、「あなたがたは、この子のキリスト教養育の責任を、教会の交わりのなかで担い

ますか」会衆もまた親と同じようにして、「神と教会の前で謹んで誓約します」とそこで答えることが求められるのだと思います。しかし、第二次、三次改正案では、この会衆の誓約は削除されました。とても惜しいと思います。

ただし、現在の私どもの式文には、受洗後の「宣言」において、「親と教会は、この幼子がイエス・キリストを、主また救い主として信じ告白するように教育でなければなりません。」と記してあります。つまり、誓約は求めておりませんが、勧告を受けているわけです。つまり、契約の子の信仰告白に向けての教育は、親だけの責任とするのではなく、教会を挙げて、養育すべきであることが明らかにされているわけであります。

そうであれば、そのことを中心的に担うことが求められている教会の教育機関である日曜学校は、まさに教会を挙げて支援され、祈られ、最大級の関心を注がれてしかるべきです。その意味で、小会と牧師の責任は重大です。礼拝指針の第三次改正案の第108条では、「教育的伝道」という項目を立ててこういいます。「福音宣教は、聖書と教理に関する教育を伴う。牧師と小会は、子どもへの伝道をはじめ、様々な形の教育的伝道に対して責任を負っている。」まさにその通りだと思います。牧師と小会の責任はきわめて重いのです。

私どもの教会では、すでに長老たちが、成人科クラスで、ウエストミンスター信仰基準を教えておられる教会もあると思います。それと同時に、契約の子たちの教育のため、特に信仰告白準備教育にも、牧師とともに長老が担っておられる教会もあります。それも実に、すばらしいことであると思います。

ついでのことですが、礼拝指針の改定案には、「契約の子」という名称が亡くなっているように思います。「教会の子ども」という、どこの教団、教派でも用いられる呼称になっているのは、私どもが慣れ親しんでいる、「契約の子」という

名称がとてもすばらしいだけに、残念に思います。

ついでのついでに申しますと、この改正案では、現行の礼拝指針では、第四章「教会学校」となっているところを、第一部「神礼拝」第二部「教会の活動」と分けて、第二部の中の第二十一章「宣教活動」として、その第108条に「教育的伝道」という項目を立ててこういます。「福音宣教は、聖書と教理に関する教育を伴う。牧師と小会は、子どもへの伝道をはじめ、様々な形の教育的伝道に対して責任を負っている。」「宣教活動」の後の第二十二章が、「キリスト者の訓育と教会学校」とされています。現行の礼拝指針第29条では、「教会学校教育の対象」として、「教会学校は、その目的に従って、契約の子らを訓育し、成人会員を教え」とうたわれております。ところが改訂案では、この「さらに未信者と未信者の子らに教育的伝道を行うものである。」という文言が削除されました。これは、第百八条で、「牧師と小会は、子どもへの伝道をはじめ、様々な形の教育的伝道に対して責任を負っている。」と明確にしているのです、削除したのでしょうか。しかし、現状の私どもの日本の状況における教会学校は、日曜学校が何よりも重んじられてきた背景にあります。日本の教会の歴史と、日曜学校の歴史はほとんどかさねていると言っても過言ではないのです。(2005年中部中会信徒研修会分科会記録参照) 日曜学校は、日本伝道において特筆すべき成果を挙げたと思います。そして今後も、日曜学校における子ども伝道の重要性は、ますます緊急の課題であり、重んじられてしかるべきであるはずで、そうであれば、この礼拝規定の改定の作業の中で、「未信者と未信者の子らに教育的伝道を行うものである」という文言を削除することが、よいのかどうか。大変に案じる思いが致します。現状の礼拝指針について、もっと日本の教会の現状に寄り添っていただきたいと願っている者ですので、あえて触れました。このことで、教

会学校のなかの日曜学校や青年会、さらに各会も、これまで以上に伝道の視点を重んじた学びの集いとならなければ、明日の日本キリスト改革派教会を思い描くことはできないと思います。

横道にそれたついでに重ねて申しますと、礼拝指針の改正案では、現行の第5章の「祈祷会」の項目がありません。今、この日本の教会の現状のなかで、祈祷会への熱心が後退、退行すれば、どれほど、主日礼拝式がリタージカルな、厳かな、伝統を継承したよきものとなっても、そこでも正しい実りを結ぶことが困難になると思います。日曜学校教師は、率先して、週日の祈祷会に出席すべきです。現行の第36条には、「出席されることが奨励されるべきである」、とあります。ですから、日曜学校の教師は、祈祷会に出席すべきなのです。そして日曜学校を教会の祈りの課題のなかに、入れていただいて、教会の執り成しをもとめるべきなのです。

実は、大会教育委員会から、「信徒の手引き」を改訂して、出版する計画が報告されています。新しい礼拝指針は、実に、すばらしい礼拝式の充実のために有効であると評価していますが、第二部の「教会の活動」の項目だけでは、日本キリスト改革派教会の信徒生活を教育することには及ばないと、信徒の手引きがどうしても必要であると思わざるを得ません。

VI. 日曜学校の現状と牧師の課題

最後に、これは皆様に申し上げることではなく、牧師じしんが自ら問いつづけるべきことにも触れなければならないと思っております。

今年の大会の教育委員会の報告における資料として提出した私のわたしの文書の一部に、「教師会形成（教師の訓練）の課題と牧師の責任」という文章を皆様にもご紹介させていただきたいと思っております。

「現在、連載中の『日曜学校教師会のために』は、日曜学校が正しく実るために決定的に重要なのは、教師会の充実、研鑽であると主張して

います。そこで要になるのは、当然、教師たちの教師である牧師の指導力です。牧師が、教師たちを指導し、また自ら子どもたちに御言葉を説教することが、その職責上、回避できないのです。日曜学校に責任、関心がない牧師は、ありえないとすら言えましょう。しかしその点でも、長く日曜学校教師の奉仕をされ、校長をしておられる方々から、このような訴えと叱責を受けたことがあります。『自分は、教師としての訓練をきちんと施されたことはありません。これまで、見よう見まねでしてきただけです。』

牧師自身の神学教育や訓練のありかたそのものが問われるのかもしれませんが。あらためて、牧師の責任と務めを再確認したいと思います。なお開拓期にある、あるいは改めて検討の必要性を覚えている私どもの現実の日曜学校の姿を思いますと、牧師が教師会に出席し、教師を訓練し、また率先して模範的な姿をして見せることが不可欠なのではないでしょうか。その意味でも、教会学校教案誌の執筆の奉仕にかかわることは、大変な労力が求められますが、牧師じしんの研鑽にもなると思います。」

端的に申しまして、牧師は、いったいどれだけ、日曜学校に関わっているのでしょうか。教師会に出席し、教師たちを指導しているのでしょうか。実際、日曜学校教師から、批判の声が聞こえないわけではないのです。

礼拝指針の第31条に、「小会は、すべての教会学校を監督し、その校長を選任する。校長は、牧師の同意を得て教師を小会に推薦し、小会はこれを任命する。」とあります。第33条は、「教会学校教案」の条項で、校長の職務をこのように規定しています。「校長は、牧師とともに、小会に対し教会学校の教案について責任を負う。」わたしは大変、正直に申しまして、この校長の職務を、この規定に沿って担える方がいったい何人おられるのだろうかと思います。教案について責任を負うということは、校長自身が、教える内容、カリキュラムをきちんと準備できな

ければならないわけです。しかもこれは、礼拝指針によれば、「日曜学校」校長ではなく、「教会学校」校長ということがうたわれているのです。つまり、全年齢層の教会員の生涯教育に責任を担い、その上、各個教会の霊的な現状にふさわしいプログラムを提供することが求められるのです。おそらく、この校長の職務を担うほどの人は、少なくとも神学校の1年生のレベルの課程をおえるほどの素養を持たなければ難しいと思います。

もちろん、礼拝指針は、それを牧師とともに行うことが指示されていますから、牧師がそこで、校長に任せっぱなしにすることは許されていません。そうなれば、やはりそこでも問われることは、牧師の働きであろうと思います。牧師がそのような校長を育てる課題があるわけです。そして、校長は、いきなり育てることはできませんから、まずは、日曜学校教師を育てることが求められます。そうであれば、牧師が、教師会の形成、教案研究、日曜学校全体の働きに積極的に関わるべきことは、明らか過ぎるほどであると思います。

そこでも、求められることは、牧師が伝道の最前線に立って、やってみせる。そのような姿勢がどうしても必要であると思います。そのためには牧師を、伝道の最前線に立たせる時間と力を作り出すための環境を整備することも求められます。大会でも中会でも、委員会を統廃合することが求められています。しかし、もしも委員会の仕事量が減ってなお伝道が前進しなければ、牧師たちはそれこそ、根本から問われることになるかもしれません。

ついでに申しまして、語弊がありますがもしも、日本キリスト改革派教会の牧師が、教会の管理者、行政の執行官、学校における教師のようなあり方、仕方では、教会を治め、現状を保つことなら、できるかもしれません。しかし開拓伝道や、伝道所を教会へと養い育てることはどうでしょうか。実際に、日本キリスト改革派

教会は、100人を超すような礼拝出席者は、ほんの一握りです。小さな教会、伝道所が圧倒的に多数なのです。そうであれば、日本キリスト改革派教会の牧師たちが、牧師像をある意味で再検討すべきではないのか、神学校のカリキュラム、訓練方法すら再検討とすべきではないかと考える者です。今年の大会で、そのための特別の委員会が設けられたことは、大きな光であると考えております。

もとより一人の牧師だけの課題ではなく、中会として、教育委員会が、このような研修会を少なくとも継続することは、最低限の務めであると考えます。昨年の講師としてご奉仕くださった CRC のゴー宣教師は、おそらく個人の働きとして、アメリカの日曜学校教師養成講座を東部中会の有志の教会、教師を募ってなさっております。本来は、中会の働きとして、日曜学校教師養成のクラス、継続教育のクラスを設けることが願わしいと考えております。

牧師も日曜学校教師も、それぞれの務めを忠実に担って、心新たに、契約の子らへの教育と未信者の子ら、地域の子ども達のために立ち上がりたいたいです。志新に祈り、励むことを決意したいのです。主イエス・キリストが「子ども達をわたしのところに來させなさい」と私どもに命じ、子どもを招いておられるのです。そうであれば、必ず子ども達は主のもとに來るはずで、來れるはずで、この命令は、約束です。そしてまことの羊飼いな主イエスが、子ども達を深く養い、育ててくださるのです。わたしの拙い奉仕を、そこで主が求めておられます。それを用いて、神がみ業をお進めくださるのです。

祈祷

あなたのお召しによって、あなたが招いてくださった子ども達に福音を告げる尊い働きにあずかせてくださいますことを心から感謝申し

上げます。しかし、時に倦み疲れ、自分の奉仕が少しも実らないと意気消沈し、惰性のように子ども達の前に立ってしまうことがないわけではありません。深く恐れます。どうぞ、私どもを新しくして下さい。私どもの奉仕を用いてください。教会を挙げて、日曜学校伝道に祈りと奉仕を注ぐことができるようにしてください。一人でも、多くの奉仕者を与えてください。何よりも一人でも多くの子ども達を、主イエスに導かせてください。種を蒔き続ける者が必ず大きな収穫にあずかることができるとの信仰の幻に固く立たせてください。 Soli Deo Gloria!
(2005年11月23日、中部中会教会学校教師研修会講演、名古屋岩の上伝道所宣教師、中部中会教育委員会委員長)

付録

「教会学校教師研修会を終えて」、相馬伸郎

11月23日、毎年この日は、中部中会の教師研修会開催日です。今回4年ぶりに、講師となり、「魅力ある日曜学校のために—教師会の形成—」という主題で語りました。出席者は、55名。近年にない多数の出席者でした。

●何より嬉しかったこと、それは、「教会学校教案誌」の発行の実りが、遂に明らかに見えてきたということにあります。実は、講演においてこのように申しました。「教会学校教案誌を継続発行して4年余り。神の恵みの御業を心から感謝している。しかし、現状の日本キリスト改革派教会の日曜学校とその伝道には、大変な危機感を持っている。誰かのせいにしないで、ここに集った者たちで共有して、立ち上がりたいたい……」ところが、午後のシンポジウムの発題のなかで、多治見教会のひとりの教師の言葉を聴きました。そこに、「教案誌」によって成長し、私どもが祈り願い、目指しているように成長されている、変えられ始めている教師のお姿を拝見することができたのです。(もとより、弊誌だけの力などとは考えておりません。まさに「教

師会」の力の実りです。)さらにまた、他の発題者や、フロアーからの発言においても、中部中会の教師たちの質の高さも垣間見ることができました。手前味噌の極みですが、確かに、少なくとも中部中会は、「教会学校教案誌」によって意識が深められてきていると実感させていただきました。もしも「教案誌」をきちんと教師会で読んでくだされば、必ず成長すること、日本キリスト改革派教会の日曜学校の将来に光を見ることができると思いました。

●恥をさらして告白しますが、心の中で、「この小さな貧しい奉仕は、結局、結実を見られないのかも……」と時に考えつつ、奉仕していました。悔い改めさせられました。キリスト者は、信じて行くことが大切であることを、今回の研修会であらためて教えていただきました。(他の奉仕者は違います!)日本キリスト改革派教会は、「打てば響く」との望みを持つこともできました。(ただしそのためには、大変な労力、膨大な奉仕が求められますが!)

●御言葉の教師さらにキリスト者全員に通じることがですが、福音によって変えられ、成長し続ける望みを失うことは最大の危機です。伝える者が、福音の力やそのすばらしさにどきどきしていなければ、子ども達や隣人、そして会員にそれを届けることは不可能でしょう。

日曜学校教師とは、子どもを教えるという一方通行の業をなすではありません。教えているまさにそこで、伝える福音によって自分自身

が成長させられて行く奉仕なのです。福音(御言葉)の教師は、福音によって、自らその人らしい「福音にふさわしい教師」として、資質や技術においても整えられて行くのです。

●しかし、午後のディスカッションでは、「教える技術」の問題も提起されました。もとより、技術の問題を無視することもやはりできません。それとあわせて今回も、教師たちから、継続的な教師訓練・養成の場を求める強い声を受けました。しかし、「現状では、不可能」と申し上げました……。『教案誌』発行のように、誰かが、立ち上がって組織する必要があるはずなのですが。

●講演の最後に、牧師の責任について触れました。研修会に、牧師そして長老が少ないことは、紛れもない事実です。私自身の不十分さを省みず、どうしても言わなければなりません。牧師が率先して、教師を訓練、指導しなければなりません。「やってみせる」ことが必要です。

●講演録は、第21号に掲載の予定です。どうぞ、『教会学校教案誌』のために続けてお祈りくださいませ。教師はもとより、親、会員のご購読をも心からお勧め申し上げます。

教会を挙げて、日曜学校教師会を支え、日曜学校伝道になお励んでまいりましょう!

ただ神の栄光のために!

(中部中会機関紙「改革派中部」2006年1月号掲載、名古屋岩の上伝道所宣教教師、中部中会教育委員会委員長)

発題 「日曜学校教師の思い」

宮嶋豊美 (多治見教会日曜学校教師)

多治見教会では、中部中会の「教会学校教案誌」を第4号から使わせていただいております。この教案誌は、今ではこどもたちへの説教の準備や分級の準備に、なくてはならないものであり、非常に大きな助けとなっていることを実感しています。

特に、これまでになかった「聖書研究」と「カテキズム研究」のページは、聖書箇所背景や、その箇所の中心点を理解するうえで、欠かすことができません。このふたつの重要なポイントをもとに、「単元のねらい」や「説教展開例」を読み込んで理解を深め、自分なりに組み立てて物語ることへとたどり着く、というのが、私の準備の通常のプロセスです。これほどいいいに準備された教案誌に出会ったのは初めてで、ここには説教についての学びにとどまらず、日曜学校教師としてのあり方や、教会の歴史など、多方面にわたって語られており、執筆された先生方の熱意が伝わってきます。日々の多忙な生活のなかで準備を続けるなかで、この教案誌が十分に活用されてゆくことを心から願っております。

充実した教案誌の内容から、受けとめられる第一のことは、私たち日曜学校教師の働きのいかに重要なことか、ということです。日曜学校教師も、キリストの「三職」である「預言者・祭司・王」としての働きを担うもの、とどこかに書いてありました。「えーっ、それじゃまるで牧師じゃん！ そりゃムリでしょ！」というのが、偽らざる私たちの現状です。はたして日曜学校教師が、これまでそのような使命感をもって奉仕にあたってきたのでしょうか。子どものことだから、親が責任を持つものと、家庭まかせ、

親まかせにしてきたのではないのでしょうか。あるいは、まだ子どもだから、わからなくても仕方ない、と手抜きをしてきたのでは……と、これまでの契約の子らの現状を見るにつけ、反省を強いられます。

教案誌のことでもうひとつ気づいたことを述べます。2004年から、終戦記念日にいちばん近い主の日を「平和を創り出す」とのテーマで礼拝を献げ、分級を行なうように企画されています。これはとてもよい試みだと思います。私たちキリスト者は、平和を愛する者として、特に近年の危険な風潮が強まる中で、子どもたち自身が真の平和について関心をもち、考える姿勢を養うことは、非常に大切と考えます。

さて、多治見教会の日曜学校には、現在、20人くらいの子らが集まっています。上は高校生から下は2歳児まで。今年のクリスマスから加わった2人の子らを除いて、みな会員の子やお孫さんたちであり、「契約の子」がほとんどです。

一方、教師も契約の子をもつ親たちがほとんどで、長年の奉仕にややくたびれてきています。のどから手が出るほど若者がほしいのですが、現状では望めそうにありません。それでも昨年は、2名の若い熱心なお母さんが加わってくださり感謝です。教師会のメンバーは、牧師を含めて9名です。

やや、というより、かなりくたびれてきたメンバーばかりだったために、ここ4～5年は、子どもたちだけのクリスマス祝会が開かれていません。何とか再開したいと、若いメンバーの募集と共に祈り願っています。子どもたちに対

しては、何よりも「祈ることのできる子」になってほしい、と願いつつ取り組んでいます。

中学生になると、教会から遠ざかる子が多いのはどこも共有の課題かと思います。多治見教会の場合も例外ではありません。教会の中にも、さまざまな社会的な現象が忍び込んできます。小さな可愛い子どもたちも、思春期を迎えると、社会の現実と向き合い、取り込まれてゆくことは往々にしてありますが、やがて翼折れ、傷つき、力尽きたとき、そして自分を取り戻した時に、教会が、帰ってきたい場所であってほしい、と願ってやみません。また教会は、そんな「放蕩息子」を、もちろん受け入れる場所であってほしいと思います。私たちのめざす天の故郷にたどりつくためには、救い主イエス・キリストにつながっていなければならないからです。

そこで私は、子どもたちが教会を自分のふるさと、帰る場所と思ってくれるような関係づくりを、今、しておくことが求められていると考えます。それには日曜学校教師にも、子どもたちと一对一の親密な間柄を築いてゆける「牧会」の力が必要とされます。すべての子を等しく神様の子どもとして語りかけ、愛し、受け入れる心が、私たちに求められています。

罪人である私たちは、皆それぞれに試練に遭い、挫折を経験しています。そしてそれは十字架のキリストの道に従うために欠かすことのできない、神から与えられた訓練であり、やがては益となって実を結ぶことを知っています。そのような経験なしには、主の痛みも愛も、感謝も喜びも、学ぶことはできませんから。

子どもたちより先に痛みを知っている者として、私たち教師は、子どもの心に寄りそい、対話をすることによって、信頼関係を築いておきたいと願うものです。“牧会の基本は対話である”と、加藤常昭先生が今年の教師会で語られたことを教案誌を通じて教えられました。

対話——それは一方通行の語りかけでなく、双方の呼応で成り立つもの、交わりの中で成り立つものです。その基本は聴くことからだと思います。まず聴くこと。「聴く」という文字は、十四の心で耳を傾ける、と書きますが、文字通り耳をじっと傾けることから始まります。聴くためには、心を開いて、相手を理解しようとする柔らかい心をもつことが必要です。祈りを通して、神様が私たちの魂の叫びやつぶやきを、さえぎることなく、終わりまで聴き届けてくださることによって、深い安らぎを得ることができるよう、私たち日曜学校教師も、子どもたちひとりひとりの声に、しっかりと耳を傾けることから始めたいと思います。

私たちキリスト者は神のみ声に耳を澄ませて聴く者であり、加えて、日曜学校教師は、将来の兄弟姉妹とされるであろう子どもの全身から聴き取った声を、神様にお届けする「とりなし」の役目を負う者でもあるのだと思います。一時は教会から離れたかに見える子どもたちが、いろいろなつらい経験をすなかで、もういちど教会を自分の故郷として「帰郷」してくれるきざしもあります。祈りが聴かれることを、これからも信じてこの務めをはたしたいと願っています。

(2005年11月23日、中部中会教会学校教師研修会発題、多治見教会執事)

『教会学校教案誌』発行のための 自由募金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあげます。

中部中会教育委員会は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『教会学校教案誌』を発行しています。2001年4月に始まり、すでに満5年となり、第21号まで発行して参りました。中部中会では7割ほどの教会により採用され、改革派教会全体でもおよそ40教会で採用されています。大会教育委員会もご支持を表明してくださっています。皆様のご支援に心からの感謝を申し上げます。

『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会教育委員会では、あわせて皆様からの自由募金によってご支援いただきたいと願っています（2005年4月中部中会第一回定期会にて自由献金願いを可決承認）。子どもたちの信仰教育のために、ぜひ皆様からのお祈りと献金のご支援をいただきたく、よろしくお願ひ申し上げます。教案誌を購入していただきやすくするために、教案誌の頒布価格を印刷・製本単価ぎりぎりにおさえています。『教案誌』をご購入くださることも発行のための支援となりますので、ご購入いただくことによってもご支援くださいますよう、お願いいたします。

目標金額	30万円
送金先	郵便振替 伊藤治郎
	00890-2-148183

※通信欄に「教案誌のための自由募金」と明記してください。

聖書研究・説教展開例・分級展開例

テキスト マルコによる福音書15章21～32節

このところは主イエスが刑場に向けて歩まれ、やがてゴルゴダの丘に着き、十字架につけられ、人々からののしられるまでを描いています。ここでは容赦のない嘲りの言葉が浴びせられています。しかし皮肉なことにそのような嘲りの言葉の頂点となる「神殿を打ち倒し、三日で建てる者」の中に主イエスの勝利を予告する響きが隠されています。マルコの特徴としてはルカに見られる主イエスの人々へのとりなし、罪人の悔い改めがないこと、ヨハネのようなユダヤ人達による称号への抗議がないこと、その一方でシモンについて詳しく述べていることなどがあげられます。

〈シモンについて〉

ローマ16章13節では、パウロがわざわざルフォスの名をあげ、彼とその母によるしくとし、さらにルフォスの母は自分にとっても母だとまで言っています。このルフォスとマルコに登場するルフォスは同一人物であると思われます。そうしますと、主イエスに代わって十字架を担いだのは、後に教会の重要人物となるルフォスの父親シモンということになります。彼とその家族がどのようにして信仰を持ったのか聖書は語りません。けれどもこの時無理やり十字架を担がされたことが、後の信仰へとつながったとみて差し支えないでしょう。信仰への糸口は突然やってきます。それはシモンに臨んだ様に半ば強制されるように、あるいは誰もしたがらないことを押し付けられるようにしてかもしれません。シモンはこれを受け入れました。一方多くの方は主イエスを信じる事を拒み非難する側に回ったのです。

〈苦しみ〉

22節で、主イエスは没薬を混ぜたぶどう酒を飲む事を拒まれました。没薬は傷みを和らげる作用があったそうですが(箴言31:6参照)それを自ら退けられました。そして24節は、兵士が十字架

につけた後に残った主イエスの衣服をあらかじめくじで決めたとおりに分け合ったとも記しています。これは明らかに詩編22編の成就として読むことができます。それは本日の箇所からは離れますが、34節にも見られます。主イエスは私達の罪の贖いのために、人間として徹底的に苦しみぬかれました。それは肉体的苦痛、嘲りによる精神的苦痛と嘲りや裏切り、父なる神の怒りを一身に受ける靈魂の苦痛という霊肉共の苦しみの体験です。しかし、一方で私たちは、マルコが主イエスの苦しみを過度に強調して描いていないことも十分に注意してよいでしょう。むしろマルコは、主イエスを十字架につけた人々の嘲りに焦点を当てているといってもよいかもしれません。

〈三日で建てる〉

主イエスを嘲る人たちの言葉を要約すれば、奇跡を起こして悲惨な現実を変えるならイエスをメシアと認めようということです。それを象徴的に表しているのが、「神殿を打ち倒し、三日で建てる者」との言葉です。ところで主イエスは、神殿を物理的奇跡として三日で出現させると言われたのではありません。マルコ11章17節を見ますと、主イエスが当時の神殿を「強盗の巣」と呼んでおられます。父なる神の御心からそれ、自分達だけの救いと恵みを願う神殿礼拝を批判した言葉です。そのような神殿を廃棄し、全く新しい神殿、聖靈なる神を一人一人の中にお迎えするという形での神殿を建てあげるために、主イエスは来られました。その死と復活と昇天・着座、そこから聖霊を派遣されることでこれらは成就します。そのために父なる神は、自分達を正しいと主張し福音を拒む人たちの嘲りと悪意に主イエスをゆだね、殺されるにまかされました。それは無抵抗であることによる神の御愛の罪への勝利です。主イエスの死によって罪の力は打ち砕かれ、新しい神殿建設の道が開かれたのです。(杉山昌樹)

テキスト マルコによる福音書15章21～32節
参照カテキズム 子どもカテキズム問19～21

〔単元のねらい〕

レントの期間の最初のメッセージとして、キリストの受難全体の中で当該箇所を位置づけることを目指す。小学校高学年から中学生を対象年齢として想定し、聖書的な知識を提供することで、神の救いの計画を学ぶ。あえて見守る婦人達や悔い改める罪人などを並行箇所などで補わず、この個所に表されているキリストの孤独さを印象づける。ただし、キリストを侮蔑する者を単純に批判するのではなく、自身をその立場に置き、キリストの救いを印象づけるようにすることを目指す。

「イエス様を苦しめる人たち」

〔導入〕 イースターに向かう季節であること

おはようございます。今日も聖書のみ言葉に耳を傾けて参りましょう。

ところで、昨日から4月になりました。4月と言ったら何の季節でしょう？ 新学期？ そうですよ。今日は教会学校でも進級式がありますよね。でも、教会ではこの春の季節、3月から4月にかけて、もっともっと大切なことがあります。それは、イースターです。イースターは毎年日にちが変わるんですけど、今年は4月16日、来々週がイースターになります。

イースターは、もう皆さん知ってますように、イエス様がよみがえられたことをお祝いする記念日ですけど、その前の6週間の間、イエス様の十字架の苦しみを思い起こす期間とされています。その期間のことを、レントと言います。今年のレントは、もう3月1日の水曜日から始まっております。ちょっと遅くなってしまったのですが、今週と来週、イエス様の十字架の苦しみをおぼえて参りましょう。

〔展開1〕 キリストの十字架を取り巻く人々の姿を描き出す

今日お読みいたしました箇所には、イエス様以外に何組かの人たちが出て参ります。

イエス様を捕まえて処刑するために引いてきたローマの兵隊達は、イエス様の服をはぎ取って裸

にしました。上着も下着も奪って、それをイエス様がかかっている十字架の下で分け始めました。イエス様は質素な一枚の布の下着を着ておりましたから、くじを作って嬉しそうにそれを分けていました。どうです皆さんは、自分のものを取り上げられてそれを目の前でくじ引きで分けられたりしたら、どんな気持ちになるでしょう。

下を通りかかった人たちは、イエス様のことを見上げて「頭を振り」ました。これは何かとてもイヤなもの、キライなものを見た時にする動作です。先生が子供の頃は何か汚いものに触ったりした人に「エンガチョを切る」ってのをしましたけど、みんなは知ってます？ 他の人たちからこんなことをされたらどうでしょうね。頭を振ってイエス様をのしっていた人たちは、イエス様が「神殿を打ち倒し、三日で建てる」と言っていたことを知っていました。それまでもイエス様の周りにいた人たちが居たかもしれませんが、イエス様が人氣があった時には、イエス様の周りに集まってきたのに、捕まるとすぐにイエス様のことをバカにしているなんて、ヒドイですよ。

祭司長達や律法学者達もイエス様のことを侮辱しています。何とかイエス様を言い込めてやろうと色々意地悪な問題をイエス様のところに持ってきた律法学者達ですが、どんな難しい問題にもイエス様がキチンとお答えになって、かえって言い込められてしまっていたのですが、この時とば

かりイエス様のことをバカにしています。

しまいには、イエス様と一緒に十字架につけられている人たちまで、イエス様をののしっています。捕らえられ、鞭で打たれ、十字架に釘付けにされたしまったイエス様ですが、この時イエス様の周りには、イエス様をののしり、侮辱する人ばかりでした。

〈展開2〉 私たちも同じようなことをすることを 確認し、それを赦す主の愛を思う

なんてヒドイ人たちだろうと思うでしょう。その通り、本当にヒドイことです。イエス様が十字架に架かれる時に、イエス様の周りにいたのは、イエス様の服をうばって自分たちで分けてしまう者、頭を振ってののしる者、侮辱する者、そんな者たちばかりでした。「なんてヒドイ人たちだろう」と思うのです。

けれども、実は、こんな風にイエス様にヒドイ態度をとっているのは、この時の十字架の周りに集まっているこの人たちばかりではありません。イエス様は私たちのために、この地上においてになって、色々なことを教えてくださいました。神様がどんなお方であるか、どうすれば私たちが救われるのか、救われた私たちがどんなふうに住めばよいのか、そんなことを、ただ教えるだけでなく御自分で私たちに示してくださいました。それなのに私たちは、イエス様の言う事を聞かず、相変わらず、神様が嫌われる悪いことばかり続けております。他の人を憎んだり、意地悪をしたり、馬鹿にしたりしてないですか？ 兄弟げんかをしたり、お父さんお母さんにダメだって言われていることをしたり、学校の決まりを破ったりして

いないですか？ そんなことはみんな、イエス様を悲しませることで、いつまでたってもそんなことを辞めない私たちは、まるで、イエス様のことを嫌いで、イエス様がイヤがる事ばかりしているこの時の十字架の周りの人たちと何も変わらないですよ。私たちは、自分たちがしている、この悪い罪の行いが、本当にイエス様を悲しませていることを知って、悔い改めて、イエス様に救っていただかなければなりません。

〈展開3〉 キリストの苦難が神の計画であることを 確かめ、神様の「救い」への意志を知る

こんなひどい目に遭ったイエス様ですが、実はイエス様は、このことをとっくの昔にご存じであり、それを知った上で、この屈辱を受けてくださっているのです。

実は、イエス様の服を人々がくじを引いて分けたことや、人々が頭を振ってイエス様をののしたことはイエス様よりずっと昔、旧約聖書の詩編22編に語られております。その詩編では正しい人が、苦しめられている様子が記されています。イエス様は、そんなことを全て御承知の上で、このように人々から侮辱され、ののしられました。なぜならそれが、私たちを救ってくださるために必要だったからです。詩編22編の最後では、苦しみを受けた正しい人であるイエス様が命を得てくださることが語られております。

イエス様は、私たちに命をくださるためにここまで苦しみを受けてくださったのです。イエス様の受けた苦しみをおぼえて感謝しましょう。

(長田詠喜)

[今週の暗唱聖句] 詩編22編30～32節

わたしの魂は必ず命を得

子孫は神に仕え

主のこを来るべき代に語り伝え

成し遂げてくださった恵みの御業を民の末に告げ知らせるでしょう。

〈一週間の準備：これで分級の90%は決まる〉

1) 3/26にお休みの子はいませんか？ どうしてお休みだったんでしょう。次回出席できるようにお祈りください。できたら、お手紙を出しましょう。2) 4/2の分級で何を話しますか。話す内容を一週間じっくり考えましょう。当然、出席する子供たちの顔を浮かべながら……。教案の準備は祈りではじめましょう。2) 子供たちの成長のために、教会に送り出してくれている家族のみなさんのために祈りましょう。

〈分級では〉

さあ、新しいクラスが始まります。子供たちも、先生も緊張してますね。で……。十字架の話、こりゃ重い。幼稚科さんでは、みんなの名前を覚えることに時間を割いてもいいかもしれませんね。先生にお願いします。絶対子供たちの名前は一回で覚えてくださいね。今後、手帳見ないと名前わからないと言っていたら、その時点で教師失格です。聖書の中でも、イエス様は、“名前”で呼んでいるでしょう。“あんた”とか言ってませんよね。自分の名前をきちんと覚えてもらえているか、どうかは一大事なのです。間違っても、何度も、お名前は??? と聞いてはいけません。鉄則です。



〈分級のねらい〉

十字架というと、美化されているところがあり、本来の残酷な処刑のイメージがあまりないのではないのでしょうか。子供たちにまず怖い処刑であることをまずわかってほしい。その上で、その苦しい処刑にイエス様はかかってくれたこと、それはなぜ……が伝わればと願っています。

〈展開例：最初の部分のみ書きます〉

みんなは十字架って知ってるかな???

どんな形しているかな??

そうだね。時々、お姉さんがネックレスにして首にかけているのをみたりしないかな??

かっこいい??、きれいなもの??

でもね、ほら、絵を見て……

誰かが、十字架を担いでいるよ??

周りには槍を持った人もいるよ??、十字架を持っている人はうれしそう??、そんなことないね。悲しそうな顔をしているよ。十字架を担いでいるのは誰かな??

そうだね。イエス様……。何でイエス様は十字架を担いでいるんだろう??、イエス様は何か悪いことをしたのかな??

回りの人たちも心配そうに見ているよ……

そうなんだ、これからイエス様は処刑されるんだよ。え……。何でイエスさまは処刑されるんだろう?

〈祈り〉

神様、十字架はたいへん苦しい処刑です。その怖くて、痛い、苦しい十字架の処刑にイエス様はかかってくださったことを知りました。イエス様は、本当は十字架にかかることなんか何もしていませんでした。でも、十字架にかかってくださいました。私たちのために十字架にかかってくださったのです。そのことをわすれることがありませんように

〈子どもたちに伝えたいこと〉

イエス様は十字架の上で確かに苦しまれたこと。

しかし、それでもイエス様はご自分を苦しめる者たちのために祈られたこと。

う（ペトロ一2:24）。「私たち」と言わず、「私」が神様のいいつけを守れないから、「私」が受けるはずだった苦しみを、イエス様が代わってくださったことを語りましょう。

〈展開例〉

礼拝で聞いたお話を思い出しましょう。

○イエス様は十字架にかけられました。

十字架は強盗や人殺しのような重い罪をおかした人がうける死刑の方法です。体を傷つけて十字架に手足を釘で打ち付けて太陽の光や雨風にさらして、体が弱って死んでしまうまでほおっておくという、長い時間苦しまなければならない刑罰でした。イエス様は何も悪いことはしていなかったのに、そんな苦しい十字架にかけられたのです。どうしてこんなことになってしまったのでしょうか？

※「ユダが裏切ったから」等の答えがでるかもしれませんが、「そうだね」と受け入れつつ、本当はその苦しみを受けなければならなかったのは、この私（教師自身のこと）であると語りましょ

○何も悪いことをしていないのに「私」に代わって十字架にかけられたイエス様は、「私」のことをどう思っているのでしょうか？

※普通なら、イエス様は十字架の上で、私を含め自分を十字架にかけた人々を恨むはずですが。しかし、イエス様は私たちが救されるように祈られました（ルカ23：34）。イエス様の究極の願いは、ご自分を十字架にかけたこの「私」が救われることであるということを語りましょう。

〈ちいさなお祈り〉

○イエス様が苦しい十字架にかけられたのは「私」のせいだったのに、イエス様は「私」が救されるようにお祈りしてくださいました。イエス様が私が救われるようにお祈りしてくださることを「ありがとう」とお祈りしましょう。

〈小学校下級の展開例の考え方〉

- ・それぞれのテーマについて、子どもたちに基本的に伝えておきたいことを2～3項目あげています。
- ・どのように伝えるかについては、できるだけ、子どもとの問答のスタイルを基本にしました。ここでは、単に問いかけだけの形にしていますが、低学年ではいくつかの答えの中から選ぶようなワークシートを作る方が進めやすいかもしれません。
- ・問いかけの答えは、できるだけ聖書の言葉で説明するようにしたいと思います。そのため、カリキュラムの聖書箇所以外もあげてあります。子どもたちに自分で聖書を開いてその箇所を調べるように指導してください。低学年に聖書を開かせるのは時間がかかりますが、聖書を開いて聖句を調べるというのも、小さい頃から「くせ」にできたら良いと思います。



〈ねらい〉

イエス様を十字架に架けた人と同じく自分も罪深い人であること、自分のためにキリストが十字架にかかってくださったこと、イエス様の十字架の苦しみによって自分の罪が赦されたことを覚える。

〈展開例〉

1. イエス様が十字架に付けられた時、周りにいた人々の似顔絵を書きましょう。
2. その似顔絵を皆に見せながら、それは誰で、なぜそのように書いたのか話し合しましょう。
3. メモ用紙に自分の行い、思い、言葉によって犯したことのある罪を書いてみましょう。
4. このような罪深い私のために、十字架の苦しみを受けてくださったイエス様に感謝の祈りをしましょう。

(簡単に一言ずつ祈っていただく)

〈祈り〉

愛する神様。私たちのような罪深い人々のために、イエス様を送ってくださり感謝します。

イエス様がわたしたちのために十字架の苦しみを受けてくださったことを覚えて、それに感謝し、また、キリストの十字架を知らない人に、それを伝えることが出来るようにしてください。



〈今日のカテキズム〉

ハイデルベルク信仰問答

問37 「苦しみを受け」という言葉によって、あなたは、何を理解しますか。

答 キリストがその地上での全生涯、とりわけその終わりにおいて、全人類の罪に対する神の御怒りを体と魂に負われた、ということです。

それは、この方が唯一のいけにえとして、御自身の苦しみによって、わたしたちの体と魂とを、永遠の刑罰から解放し、わたしたちのために、神の恵みと義と永遠の命を獲得して下さるためでした。

問39 その方が「十字架につけられ」たことには、何か別の死に方をする以上の意味があるのですか。

答 あります。

それによって、わたしは、この方がわたしの上にかかっていた呪いを、御自身の上に引き受けて下さったことを、確信するのです。

なぜなら、十字架の死は神に呪われたものだからです。

問40 なぜ、キリストは、「死」を苦しまなければならなかったのですか。

答 なぜなら、神の義と真実のゆえに、神の御子の死による以外には、わたしたちの罪を償うことができなかつたからです。

※ハイデルベルク信仰問答のこれらの箇条は使徒信条についての箇条です。「」でくくられているのは、使徒信条の文言だからです。生徒には、あらかじめ説明しておくといひと思います。

〈今週の聖書日課〉

日曜日 ベトロー2:21~24

月曜日 ベトロー3:18

火曜日 ローマ3:24~26

水曜日 ヘブライ10:14

木曜日 ヨハネ2:2, 4:10

金曜日 フィリピ2:6~8

土曜日 ガラテヤ3:10~13

先生方へ①

1年間、中学科の分級展開例を記させていただくにあたり、ねらいと方法についてお話しさせていただこうと思います。

この分級展開例では、その日の主題にあった教理問答をいくつか挙げ、これを生徒と問答することを中心にしようと考えました。後述する理由からです。(先に、今号の中学科分級展開例のコラムを通してお読み頂けましたら幸いです。)

教理問答をするのならば、番号だけ記せばことは足りるのかもしれませんが、文言をこの欄に記させていただくことにしました。分級の準備のために、幾冊もの本を開かなくてもよいように、という便宜上の理由からです。しかし、ウェストミンスターにしろ、ハイデルベルクにしろ、いくつかの訳があり、それぞれになじまれたもののおありだと思いますので、ご自分のお持ちのものも開いてみることをおすすめします。私が今回用いるのは、ウェストミンスター小教理問答は榊原康夫訳、大教理問答は委員会訳、ハイデルベルク信仰問答は吉田隆訳(全て新教新書に収められています)です。

それから、毎日聖書を読む習慣の手引きのために、聖書日課をつけました。これはカテキズムの引証聖句を参考に作ってあります。聖書日課の活用方法についても、後述します。

(つづく)

テキスト マルコによる福音書15章42～47節

ここで取り上げられているのは、主イエスの埋葬の様子です。安息日が迫る中、主イエスの遺体を引き取りに来たのは、意外にも主イエスを殺すことを願っていた祭司長・律法学者・長老たちで構成されていた議員の中の一人、アリマタヤのヨセフでした。弟子たちはすでに逃げ去り、マリアたちも遠くから様子をうかがうことしかできない中で、ヨセフが黙々と埋葬の支度を整えます。

〈安息日について〉

42節では、「すでに夕方」とあります。創世記に「夕べがあり朝があった」とありますが、これがイスラエル流の日の数え方です。この日は金曜日でしたから、その夕方から安息日が始まることとなります。また、イスラエルの習慣では遺体はその日のうちに葬るのが常識でした(申命記21:22)。埋葬のための時間は僅かしかありません。しかし、このところを見ると明らかなように、主イエスの遺体を引き取りに来る人は弟子にも身内にもいませんでした。ヨセフは「勇気を出して」とあります。その社会的地位からすればかなりの勇気が必要だったでしょう。しかし、同時にその地位は遺体を引き取るために役立ちました。かつて主イエスを慕いながらも思いを明らかにできなかった彼に、弟子たちに代わって主イエスを埋葬する役割が与えられました。

〈たしかに死んだ——死と葬り〉

このところで特徴的なのは、主イエスが確かに死なれたということが繰り返し確認されている点です。その中で中心的な役割を果たすのはピラトです。彼は、主イエスが3時に死なれた⁴⁴(34)との報告を受け不審に思ったようです。実際に十字架刑は死亡に到るまでに長い時間がかかり、それが刑の残酷さを増すことにもつながっていました。長い時間をかけて苦しみもだえて衰弱死していくわけです。そのような常識からすれば、わずか数

時間で死んでしまうのは異例のことだったのかも知れません。そこでピラトはわざわざ百人隊長に確認したのです。ここでまず一度主イエスの死が確かなこととして確認されます。しかし、それだけではありません。ヨセフは遺体を十字架から取りおろし、亜麻布で遺体を巻きました。さらに岩を掘った墓に安置し、大きな石を転がしていますが、これで墓の中から自力で脱出する可能性はなくなります。主イエスは確かに死なれ、葬られたのであり、仮死状態で後に蘇生したというようなキリスト教に反対する人たちの主張はありえないのです。

〈死の意味〉

主イエスは確かに死なれました。ではこの死の意味は何でしょうか。それは贖いです。贖いとは今の言葉でいえば、買い取るということです。ふさわしい値段で商品とお金を交換することですが、とくに旧約では申命記の裁判規定(19:21、「命には命……」)とレビ記の土地買戻し規定(25:23以下、貧しくなって土地を売った場合、親戚がそれを買戻す)が関連します。罪によって命を失った私たちは、貧しい人のような状態です。誰かに命を買戻してもらわなければなりません。人の命と同じ価値を持つものは人の命だけです。人の命は人の命によってしか贖えません。しかも買戻すのは永遠の命ですから、それを持っている人でなければなりません。永遠の命を持つのは罪のない人です。確かに人間であって、しかも罪のない完全な人が、その命を犠牲にしないかぎり贖いは成り立ちません。結果として、主イエスが命を代金として差し出す以外贖いは成り立たないこととなります。完全な人間である主イエスが私たちのために、身内の土地を買戻すように、ご自身の命によって私たちの命を買戻してくださったのです。それが主イエスの死の意味です。

(杉山昌樹)

テキスト マルコによる福音書15章42～47節
参照カテキズム 子どもカテキズム問24

〔単元のねらい〕

連続した聖書箇所ではあるが、今回だけ来た子供を対象に語る設定とする。また、対象年齢を小学校低学年とする。なお、低学年であっても死の意味については認識できるため、むしろはっきりと死の影について語る。「神の贖いの御業に感謝するように招く」は、直接的に当該聖書個所の主題の範囲ではないため、あくまでも「指し示す」に留まる。次週の復活の記事をあまり先取りしてしまわないように注意する。

「イエス様の葬り」

〈導入〉一般的な死と葬儀の様子を思い出させる

おはようございます。今日も、聖書のお話を読んで参りましょう。

今日の箇所は、何だかちょっと暗くなってしまふような、こんなに天気の良い朝にはあまりふさわしくないお話です。イエス様がお墓に葬られるお話です。皆さんはお墓に行ったことがありますか？ 実は、教会にもお墓があります。来週の日曜日には午後からそのお墓に出かけて、去年亡くなられた姉妹の骨を墓地に納めます。みんなの知っている人でも亡くなった方がいるかな？ お葬式をしたり、お墓に行ったりしたことがあると思います。お葬式はあんまり楽しいものではありません。涙を流したりする人もいますね。イエス様が亡くなってお葬式をした時もそうだったんです。

〈展開1〉キリストの死を周囲の人々がどのように受け止めたか想像する

イエス様は、歳をとってお爺さんになって亡くなったわけではありませんでした。十字架にはりつけになって殺されてしまったのです。それまでイエス様の周りにいた人たち、イエス様の言う事を聞いていた人たちはみないなくなっていました。イエス様が心から大切に愛していた弟子たちも、イエス様が捕まった時に、怖がってみんな逃げてしまいました。イエス様が亡くなった時にそ

の周りにいたのは、イエス様のことが嫌いで、イエス様が亡くなくても、「イイキミダ」としか思わないような人たちばかりでした。亡くなったイエス様のお葬式をする人は、イエス様の周りには誰もいなくなっていました。

けれども、たった一人だけ、イエス様のお葬式をして、お墓に葬ってさしあげようとした人がおりました。「アリマタヤ」という町に住んでおりました。「ヨセフ」という人です。ヨセフはそれほどイエス様と仲良くしていただいていたわけではないのですけれど、イエス様のお話をすばらしいお話だと思っていましたし、イエス様が救い主であると信じていました。ヨセフは大好きなイエス様が亡くなってしまったので、せめてキッチンとお墓に葬って差し上げようと考えたのです。もちろん、いくら丁寧に葬っても、イエス様がもう一度生き返ってくるはずはないと思っていました。それでも、大好きであったイエス様をせめてきちんと葬って差し上げたかったのです。ヨセフがイエス様のお身体を十字架から下ろした頃には、もう、夕方になってきておりました。日が沈んでしまう前にお墓に葬って差し上げなくてはなりません。ヨセフはたぶん大急ぎで、イエス様のお身体をお墓に葬りました。

ヨセフがイエス様を葬った時、他の数人がその様子を見ておりました。それは、マグダラのマリアとヨセの母マリアという二人のマリアでした。

他にももしかすると誰かいたかもしれませんが、彼女達は、お墓をじっと見つめていました。本当に大切な大切な人が亡くなってしまうと、本当にガッカリして、悲しくて悲しくて悲しすぎて、もう何もできなくなってしまうんですよ。この二人のマリアさんも、大好きだったイエス様が亡くなってしまって、本当に悲しくて悲しくて、ただただお墓を見ていることしかできなくなってしまうていたんです。そうやって二人は、お墓を眺めておりました。

〈展開2〉イエス様の死は私たちにとっても深い 悲しみであることを指摘する

皆さんはまだこんな気持ちになったことがないかも知れません。先生は先生のおばあさんが亡くなった時にちょっとこんな気持ちになりました。自分の大切な人が亡くなった時には、みんなこんな気持ちになります。

イエス様もみんなにとって、本当に大切なお方です。イエス様は、父なる神様と一緒に私たちの命を造ってくださったのですし、私たちが必要なものを毎日毎日与えてくださいます。私たちがお祈りをする時には、イエス様がいつも聞いていてくださるんです。私たちが元気な時も、病気の時も、学校に行っている時も、寝ている時も、いつでも私たちのことを見守っていてくださって、私たちを助けてくださるお方です。そんなイエス様が十字架で亡くなってしまった。お墓の中に葬られてしまった。それはそれは悲しいことです。

しかも、です。しかもイエス様がそのように十

字架に架かって亡くなられたのは、私たちのせいなのです。私たちが罪を犯しているから、イエス様はその私たちの代わりに十字架につけられて殺されてしまったのです。自分が何か悪いことをして、自分が怒られるはずなのに、誰かが代わりに謝って、自分の代わりに怒られている。「ざまあみろ、自分は怒られないで上手くやったぞ」と思うのでしょうか？ そんな筈はありません。何だか背中の辺りがもぞもぞする気持ちが悪い感じがするでしょう。しかも、自分の代わりに殺されてしまう。そんな悲しい、辛いことはありません。

〈展開3〉キリストの死は絶望で終わらないこと

でも、このお話は、ここでおしまいではありません。今日この聖書の箇所、悲しくて悲しくてお墓の前で呆然としておりました二人の女の人は、三日後に、今度はびっくりする程喜ぶことになります。この時亡くなってお墓の中に葬られてしまったイエス様が、よみがえられて復活するので

だからといって、私たちのためにイエス様が殺されてしまったことは悲しいことであるのは変わりありません。そんな悲しいことをイエス様にさせてしまったのは、私たちのせいです。本当ならば、私たちが叱られなければならないのを、イエス様が代わりに叱られてくださった、その結果が、今日のこのイエス様の葬りなのです。

イエス様の私たちのためのこの犠牲を、今日改めて感謝したいと思います。（長田詠喜）

〔今週の暗唱聖句〕 ヘブライ人への手紙12章2節

このイエスは、ご自身の前にある喜びを捨て、
恥をもいとわないで十字架の死を耐え忍び、神の玉座の右にお座りになったのです。

〈一週間の準備：これで分級の90%は決まる〉

1) 4/2にお休みの子はいませんでしたか？ どうしてお休みだったでしょう。次回出席できるようお祈りください。できたら、お手紙を出しましょう。2) 4/9の分級で何を話しますか。話す内容を一週間じっくり考えましょう。当然、出席する子供たちの顔を浮かべながら……、教案の準備は祈りではじめましょう。3) 子供たちの成長のために、教会に送り出してくれている家族のみなさんのために祈りましょう。

〈分級では〉

新学期を迎えました、子供たちのご家族に変化はありませんでしたか？ お兄ちゃんが小学校に入ったとか？ 子供たちは、自分や家族の変化を話したくてしょうがありません。子供たちのお話を積極的に分級の中で取り込んでいけるようにしましょう。準備しているお話を話したい気持ちはわかります。でもね……、特に幼稚科では、子供たちの話したい意欲をさえぎって準備したものを話すよりも、子供たちのお話を聞いてあげて、いっしょに喜び、悲しみ、残念に思い、祈ってあげる

ほうが、はるかに神様に喜ばれる分級となるのではないのでしょうか。分級の主役は、神様と子供たちです。先生ではありません。私たちは、神様と子供たちが会おうためのお手伝いをさせていたっているだけなのです。

〈分級のねらい〉

イエス様は確かに死なれました。そのことを子供たちにしっかり伝え、それが悲しみに終わらないことを感じてもらえて、分級を終われたらと願っています。現在の子供たちは死に直面する場面が少なく、死の悲しさも、恐ろしさもイメージできないかもしれません。難しい箇所だと思えます。工作例を活用いただき、葬られるイメージが子供たちにうまく伝わればと願っています。

〈祈り〉

神様、イエス様は十字架にかかって死なれ、洞窟の中のお墓に葬られたお話を聞きました。十字架の処刑は大変痛くて、苦しかったにちがいありません。イエス様のお苦しみを忘れることがありませんように。

工作例

主 題：イエスさまは本当に死なれた

目 的：まことの神、まことの人としてお生まれになったイエスさまは十字架につけられ、死んでしまわれました。その死は私たちの罪のための死でした。死んでしまわれたということを知っていきましょう。

準備するもの：長方形の空き箱、石の絵を描いた紙、セロテープ、白紙、はさみ

展開例：

- ① 空き箱のふたの部分に石の絵の紙を貼ります。(これはイエス様のおほかですと説明します)
- ② 白紙に人のからだのかたちを切り抜きます。
- ③ それぞれの人のかたちに〇〇のイエスさまと〇〇の部分に自分の名前を書いていきます。
- ④ それぞれのイエスさまを石の紙を貼ったふたの部分から丁寧に並べていれていきます。
- ⑤ 最後に先生がしっかり空き箱のふたをしめます(セロテープでとめてもよいでしょう)
- ⑥ イエスさまは、死んでお墓のなかにきれいに入れられたという説明をします。
- ⑦ 箱はつぎの復活のお話をするときに使うとよいでしょう。

〈子どもたちに伝えたいこと〉

イエス様は確かに死んでしまったということ。

しかし、罪の無いイエス様が私の身代わりになって死んだことは終わりではなく、復活へのアプローチであること。

その死によって私には大きな希望が生まれたということ。

〈展開例〉

礼拝で聞いたお話を思い出しましょう。

○アリマタヤのヨセフさんはイエス様の体を引き取って、自分のお墓に葬りました。お墓に入られたということは、イエス様はたしかに死んでしまったということです。

※来週学ぶ「復活」「よみがえり」ということに対して、子どもたちは子どもたちなりに「合理的な答え」を求めようとするでしょう。しかし、よみがえりというのは「寝ていたのが目が覚めた」「気絶していたのが気がついた」というようなことではなく、ほんとうに死んでいたのが再び命をもって生き返られたということなのだ、あらかじめ強調しておきましょう。

○イエス様が十字架にかけられたのは、「私」が受けなければならない苦しみを代わってくださったからでした。ですから、イエス様が死んでしまったのも、私の身代わりとしてでした。

※ローマ6:23 死は罪のむくいです。その死をイエス様が代わってくださったということは、私の罪を代わってくださったということです。ですから、イエス様が死んでしまったことで、私には「罪」がないことにしてもらえるという大きなのぞみが生まれるのです。普通の物語では主人公が死んだらお話は終わってしまいますが、イエス様と私の「物語」は、イエス様が死んでしまったところから新しく始まるのです。

〈ちいさなお祈り〉

○イエス様が死んでしまったことは悲しいことですが、それが私の身代わりだったことで、私には「罪」がないことにしてもらえるというのぞみが生まれました。その「のぞみ」をいただいたことを「ありがとう」とお祈りしましょう。



〈ねらい〉

死は罪を犯す全ての人の結末であり、その死の恐ろしさを覚える。しかし、私たちの代わりにイエス様が死んで下さったことを感謝し、その恵みに生かされていることを確認する。

〈展開例〉

1. 人は死んだらどうなるでしょうか。一緒に死について語り合しましょう。
2. 〈工作〉一緒に段ボールでお棺を作りましょう。(子供が入れるぐらいの大きさ)
3. 〈体験〉一人ずつお棺に入り、蓋を占めてしばらく置いておく。
4. どんな気持だったのか、話し合ってみましょう
5. 私たちの代わりに死んでくださったイエス様に感謝の手紙を書く。

〈祈り〉

恵み深い神様。わたしたちは多くの罪を犯し、死ななければならない者です。しかし、神様はイエス様を遣わして下さり、私たちの身代りになって死んで下さり、私たちを死から救ってくださいました。神様の深い愛を感謝致します。



〈今日のカテキズム〉

ハイデルベルク信仰問答

問41 なぜこの方は、「葬られ」たのですか。

答 それによって、この方が本当に死なれたと
いうことを証しするためです。

問44 なぜ「陰府にくだり」と続くのですか。

答 それは、わたしが最も激しい試みの時にも
次のように確信するためです。すなわち、
わたしの主キリストは、十字架とそこに
至るまで、御自身もまたその魂において忍
ばれてきた言い難い不安と苦痛と恐れとに
よって、地獄のような不安と痛みからわた
しを解放してくださったのだ、と。

※今回の問答も、先週に引き続き、使徒信条につ
いての箇条です。

ウェストミンスター大教理問答

問50 キリストの死後の低い状態は、どの点に
あったか。

答 キリストの死後の低い状態は、彼が葬られ
たことと、三日目まで死者の状態にあって
死の力の下にとどまっていたこと、すなわ
ち「陰府に下った」という言葉で従来表明
されていたことであった。

ウェストミンスター小教理問答

問27 キリストのへり下りは、どの点にありまし
たか。

答 キリストのへり下りは、次の点にありまし
た。キリストが生まれられたこと、それも
低い状態であられたこと、律法のもとに置
かれたこと、この世の悲惨と神の怒りと十
字架ののろいの死とを忍ばれたこと、葬ら
れたこと、しばらく死の力のもとに留まら
れたことです。

※ウェストミンスター信仰告白第8章四も参照。

〈今週の聖書日課〉

はじめの4日間は、4つの福音書に書かれてい
る葬りの記事を順番に読みます。同じような内容
を読ませようとすると、「もう読んだ」と飽きら
れてしまうかもしれませんが、読み比べをしてみ
るように促してみてください。

日曜日 マタイ27:57~61

月曜日 マルコ15:42~47

火曜日 ルカ23:50~56

水曜日 ヨハネ19:38~42

木曜日 使徒13:29

金曜日 コリントー15:3~5

土曜日 ヘブライ5:7

先生方へ②

改革派教会では、カテキズム教育が重んじ
られていますが、それはなぜでしょうか。ウェ
ストミンスター大教理問答、小教理問答など
を信仰規準として持っているの、信仰告白
をそろそろ考える中学生・高校生にその内容
を一通り教えなければならないから、でしょ
うか？

そういう面もあるかもしれませんが、しかし、
「言葉のやり取り」としての「問答」という形
式(言語活動といってもよいかもしれませんが)
が、実は重要な意味を持っている、と私は考
えます。(つづく)



テキスト マルコによる福音書16章1～8節

ここでは、主イエスに親しく教えられた女性たちが、み使いによって主イエスのご復活を告げられています。彼女達は安息日の終わった土曜日の夕方から準備をし、次の日の朝早く墓に向かいました。彼女達はみ使いからご復活を告げられますが、ヨハネの福音書とは違い、ここでは主イエスにお会いしません。ただ他の弟子たちに出来事を伝えて共にガリラヤに行くようにという指示を受けただけです。そして、注目したいのは、彼女達は喜んでいたのではなく、正気を失って逃げ出すほど恐ろしかったということです。

〈空の墓〉

この一つ前の箇所では、主イエスの葬りの様子が示されていました。主は確かに死なれ、そして急いでですが手厚く葬られました。墓の前には大きな石が置かれ簡単には動かせないものだったということは、女性達の会話からも分かります。その石が脇に転がしてあったのです。そして墓の中には遺体はすでになく、長い衣を着た若者が座っていました。マタイの福音書では、番兵が見張る中、突然現れたみ使いが石を脇に転がすというように描かれていますが、マルコではなぜ石が動いたのかという説明はありません。しかし、いずれにしても、み使いが主のご復活を告げ知らせています。復活がどのようなであったのかということ私達にはつつい考えてしまいます。しかし、このところで大切なのは、死なれた方が復活されたということであり、それが確かなことだったということです。日曜日の朝早く、墓が空だったことは主のご復活の徴です。み使いはそれを、「ご覧なさい、お納めした場所である」という短い言葉で婦人達に知らせました。空の墓こそ主イエスの勝利の徴なのです。そしてみ使いは、この事を弟子たちとベトロに告げるように、また主が約束どおりにガリラヤに行かれ、そこで弟子たちに会われることをも示しました。

〈おそれたマリアたち〉

しかし、このとき婦人達が抱いたのは喜びではなく恐れでした。彼女達は、空の墓の中に若者(み使い)が座っていた時にも「ひどく驚き」ましたが、み使いの言葉が終わったあと、彼女たちは墓を出て逃げ去り、震え上がり、正気を失っていました。この事実を私達には大切にしたいのです。彼女達はありえないはずの復活という神体験をしたのです。そして喜びではなく、口をきけないほどのおそれにとらわれました。あるいは、彼女達のおそれの中には、主イエスのご復活を預言された(8:31, 9:31, 10:34)ことを、自分たちも弟子たちも全く信じていなかったという反省が含まれていたかもしれません。いずれにしても、彼女たちはみ使いから命じられたように弟子たちに主のご復活を告げ知らせることもなく、押し黙ってしまいました。そしてこの段落は唐突に終わっています。主のご復活されたという事実は簡単なことではなく、単純な喜び以上のことです。その前で人間はただ圧倒されてしまいます。

〈主イエスと出会う〉

しかし、そうであるにもかかわらず、彼女たちにはその後どうすべきかが知らされていました。それは、ガリラヤに行き主イエスにお会いすることです。み使いは確かに言いました。「そこでお目にかかれる」。主イエスとお会いすることこそ、彼女たちがすべきことであり、弟子たちに告げ知らせるべきことであり、またそれを知らされた弟子たちが為すべきことでした。主イエスとお会いすることによってのみ、恐怖は取り去られ、ご復活を理解する目が開かれるのです。主イエスは彼女たちが探した墓にはおられず、彼女たちよりも先に約束の場所で待っておられました。主は常に私たちの先に立って進まれ、みあとに従う者を待っておられるのです。(杉山昌樹)

テキスト マルコによる福音書16章1～8節
参照カテキズム 子どもカテキズム問24,36

〔単元のねらい〕

復活節を迎えることは、キリストの教会にとって、まことに大きな喜びです。毎年、習慣のようにイースターはやってきますが、そのように習慣となったイースターにも、神の御霊は、大きな喜びを注いでくださいます。子どもたちにとって、イースターの不思議と喜びが、深く心に刻まれ、子ども時代の信仰の鮮明な記憶として、心に畳み込まれるよう配慮したいものです。教会暦は、繰り返されることによって、新しくなり、深められます。キリストのご復活によって始まった命の道は、私たちの地上の生活に注がれる神の革命です。イースターの喜びは、暗く沈んでゆくことも多い私たちの信仰に、何度も繰り返し新たな光を射し込んでくれます。児童説教の中にも、そのような光が満ちますよう。何よりも説教する私たちが、復活の使信への感謝と喜びを、声にも表情にも表しながら語りたいのです。

「イエス・キリスト、命の不思議」

イースター、おめでとうございます。イエスさまが復活された、その喜びを祝うのが、イースター（復活節）ですね。イエス様は、十字架について、大きな苦しみ、末に死んでしまわれました。イエス様の死なれる様子を、じっと見守っていた人たちのことが、先週まんだマルコ福音書16章47節に記されていました。ふたりとも女の人ですね。大切なイエス様が、十字架でどうとう息を引き取ってしまったとき、この人たちの悲しみは、どれほどだったか。私たちには想像もできません。

皆さんは、自分の大切な人が死んでしまうというのを、どこかで味わったことがありますか。私は、母がなくなったとき、そばに付き添っていました。さっきまで、うなずいたり返事をしていた母が、みるみる顔色が青ざめ、体全体がこわばるようになり、そして体温もみるみる冷たくなってゆくのです。人が死ぬ、ということは、こんなに悲しいことなのか、と涙が流れてとまりませんでした。

イエス様に愛され、イエス様によって病気を治してもらい、イエス様のあたたかい心に、ひきつけられるようにして、この女の人たちは生きてきたのです。ですから、イエス様とのお別れは、なんという悲しみだったことでしょう。「絶望」と

いうのは、むずかしい言葉ですが、もう喜びも希望もなくなって、目の前が真っ暗になる、そんな気持ちだったのでしょうか。

それが金曜日の夕方のことです。それから数えて三日目の朝（つまり金曜の夕方と、土曜日の一日、そして日曜日の朝、それで三日間です）、三人の女の人たちが、イエス様を納めてある墓にゆきました。イエス様がなくなって、今日で三日目です。女の人たちは、この朝早く、なぜ墓に行ったのでしょうか。まだイエス様が死んでしまったことを、心から信じることができない気持ちもあったかと思います。何よりも、イエス様の体のことが心配でした。イエス様の体には、十字架にかけられたときの傷がたくさんありました。手足を釘で打たれました。鞭で打たれた傷、いばらの冠で傷ついたひたい、槍で突かれた傷跡……。そういう一つ一つのイエス様の受けた傷を思うと、女の人たちは、いても立ってもおられないような気持ちで、日曜日の朝を迎えたのではないのでしょうか。あの傷跡に、もう一度油をぬってあげたい。死んでから、二日たち三日たつと、遺体は腐敗（くさること）を始めます。それを少しでも、遅らせるために、香油を塗って匂いを消すのも、女の人の仕事でした。

女の人たちが、ひとつだけ気がかりなことがあります。それは、イエス様の墓の前には、岩のような大きな石が置いてあって、だれかがその石を動かそうとしても、なかなか動かないようにしてありました。あの石を、いったい誰が動かしてくれるのだろう。それだけがとても心配だったので。石さえ動かせたら、イエス様の体に香油を塗って、傷口をもう一度きれいにしてあげよう……。そんなことを考えていたかもしれません。

ところが、女たちが墓に行ってみると、もう石はわきへ転がしてあるではありませんか。この大きな石を、いったい誰が転がしてくれたのでしょうか。女たちが不思議に思うまもなく、墓の中には、白く長い着物を着た若者が座っています。その若者の姿も様子も、女の人たちには大変な驚きでした。この世の人とは思えない様子だったのでしょうね。マタイの福音書などには「主の天使」と書かれています。

若者は言いました。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない」。イエス様を、お墓のなかでどんなに一所懸命さがしても、そこにイエス様を見つけることはできない。白い着物を着たその若者はそう言うのです。

イエス様は、復活されて、もう傷つくことも、疲れることもない、新しい体と新しい命をもつ、まったく新しい人になりました。イエス様は、クリスマスのお生まれになって、およそ30年あまりのあいだ、地上で、私たちと同じ人間として生きてくださいました。そして、神さまのまことの子として、神さまの御心にまったく従いながら、神を愛し、人々をかぎりなく愛する救い主と

して、歩んでくださったのです。そして、最後にイエス様は、十字架で私たちの罪をゆるすために、苦しみと痛みのなかで、死んでくださったのです。

そのイエス様の、おおきくふかい愛の十字架を、神さまは喜んでくださり、イエス様の死が、私たちの罪のためのほんとうの身代わりだと、認めてくださったのです。だから、父である神さまは、ひとり子イエス様を、死んだままにはされず、死人の中から復活させ、もはや苦しむことも年をとることも衰えることもない、まことの命をお与えになったのです。このようにして、イエス様が、まことの神であり、まことの救い主であることが、あきらかにされました。

復活されたイエス様は、「あなたがたより先にガリラヤに行かれる」。そう若者（主の天使）は言いましたね。ガリラヤは、イエス様が、弟子たちと最初に出会ってくださった場所です。イエス様の伝道が始まった場所です。その始まりの場所で、もう一度、弟子たちと会ってくださる。それはどういうことでしょうか。わたしは思います。イエス様が、これからも弟子たちや私たちの先頭に立ってくださることだ、と。イエス様が、復活され、私たちの先頭におられる。私たちが新しい人にするために、イエス様が、まず復活してくださった。これ以上すばらしい、これ以上うれしいことは、ほかにありません。こんなニュースは、世界中で、昔からいままで一度も聞いたことがありません。

イエス様の復活は、雷の音と光が、大音響をたてて天から降り注ぐような事件です。私たちも、イースターの事件を、心からおどろき、そして喜び、感謝しましょう！（小野静雄）

〔今週の暗唱聖句〕

ヨハネによる福音書11章25節

わたしは復活であり、命である。

〈一週間の準備：これで分級の90%は決まる〉

1) 4/9にお休みの子はいませんでしたか？
 どうしてお休みだったんでしょう。次回出席できるようにお祈りください。できたら、お手紙を出しましょう。2) 4/16の分級で何を話しますか。話す内容を一週間じっくり考えましょう。当然、出席する子供たちの顔を浮かべながら……。教案の準備は祈りではじめましょう。3) 子供たちの成長のために、教会に送り出してくれている家族のみなさんのために祈りましょう。

〈分級では〉

イースターの礼拝があり、その後、祝会ですね。教会の中も何となくあわただしく、ちょっといい匂いもして、子供たちも落ち着きません。そんな子供たちがいたら、何で、今日みんなでお祝いするのか、そんな切り口でお話してみるのもいいかもしれません。教会の中にある、すべてのことが子供たちの教材です。

教会によっては、イースターエッグを作ったり、教会の庭で卵探しをするのでしょうか？

大人になった生徒さんと話す時、卵ひろいのことをよく覚えている人が多いように思います。

子供たちにとって、大変印象に残る出来事なんですね。

〈分級のねらい〉

復活を子供たちに語るのは、なかなか難しいという先生がいらっしゃいます。でも、とても大切な、真正面から子供たちに話さないといけないことだと思います。私たちが喜んで子供たちにイエス様は復活したんだと話すことが今日のポイントだと思います。

〈展開例：最初の部分のみ書きます〉

イエスさまは十字架にかかって、死なれ、その後、穴に入れられて、岩のふたがされていたんだ。

イエスさまが死んでしまい、いっしょにいた人たちは、みんな、とても悲しかっただろうね。中には自分も捕まって処刑されると心配で家から一歩も出られない人もいたんだ。

そんな中、イエス様が十字架で死なれて3日目の朝、イエスさまといっしょにいた女の人たちが、イエスさまの遺体が置いてある洞窟に行きました。

(絵を見せて……) あれれ……。女の人たちが、びっくりしてるよ。何でかな??、ほら、穴をふさいでいた岩がどけてあるよ。どういうことなんだ??、誰かが、岩を動かしちゃったのかな……。 (子供たちに意見を聞いてみては?)

慌てて女の人たちが洞窟の中を見に行くと……。イエスさまの遺体がない?? 誰かが、持って行ってしまったのだろうか。女の人たちは、何が起きているのか、頭の中で、考えがぐるぐるしていたことと思います。でも、違いますよ!!、イエスさまはよみがえられたのです。

〈祈り〉

神様、おことばどおり、イエスさまが十字架で死なれ、3日目によみがえられたことを知りました。お話で出てきたイエス様の周りの人たちも、全然最初は信じられませんでした。私たちもそうです。でも、確かに、イエス様はよみがえられました。そのことをしっかりわかることができるよう助けてください。そしてイースターを喜んで、お祝いできますように。



〈これだけは子どもたちに伝えたい！〉

一度は本当に死んでしまったイエス様が、今度は本当によみがえられた。そのことは、信じがたいことであるけれども、イエス様はそのことを私たちが信じることができるようにしてください。

〈展開例〉

礼拝で聞いたお話を思い出しましょう。

○マリアさんたちは、イエス様のお墓がからっぽなのを見て、御使いが「イエス様はよみがえられた」と教えても、それが信じられず、大好きなイエス様がよみがえったというニュースも、恐ろしくてだれにも伝えられませんでした。

※イエス様のそばにいたマグダラのマリアや弟子たちにとっても「よみがえり」は信じがたいことでした。教師も最初にこのことを聞いたときには、心からそう信じられるものではなかったということを正直に語っても良いと思います。

○ヨハネ20：24～29

お弟子さんのトマスも、イエス様がよみがえられたことを信じることができませんでした。そ

のトマスにイエス様がしてくださったことは何だったでしょうか。

※イエス様は信じようとしないトマスを見捨てられるのではなく、釘の跡のある手を差し伸べて、信じられるようにしてくださいました。私たちにもイエス様はトマスにしてくださいましたように「信じられるように」してくださいます。教師もイエス様が信じられるようにしてくださいましたから、復活という「不合理」なことを信じることができるようになったはずですから、そのことを思い出してみてください。

(十字架の苦しみが「私」のためであり、死も「私」の身代わりであったのだから、復活も「私」に関わりのあることです。イエス様が「私」に復活を信じることができるようにしてくださいましたなら、その復活は「私」にも起こることであるとわかります。)

〈ちいさなお祈り〉

○イエス様が「よみがえり」という不思議なことも、私が信じることができるようにしてくださいることに「ありがとう」とお祈りしましょう。



〈ねらい〉

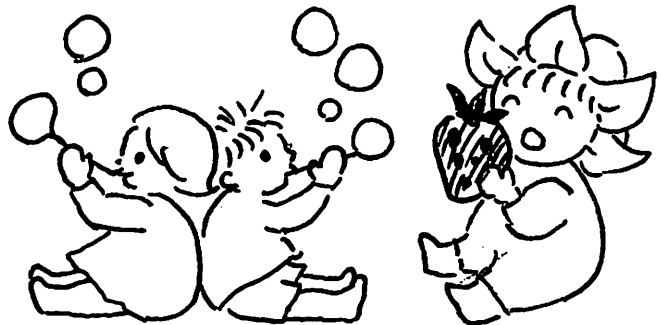
キリストの復活の事実を信じ、キリストの復活が私たちのためであることを知る。そして、キリストの復活の喜びを人々に伝えることができるように祈る。

〈展開例〉

1. マルコによる福音書16章の中で、復活されたイエス様と出会った人を数えてみましょう。
2. 復活されたイエス様と出会った人々は何をしましたでしょうか。
マルコ16:20節
3. イエス様の復活は、このように多くの人々が目撃しました。そして彼らはそれを証言する人になりました。
4. イエス様の復活は、将来、わたしたちが復活していただくことの保証です。この喜びをまだ知らない人々に伝えることができるようにお祈りしましょう。

〈お祈り〉

愛する神様。イエス様の復活を感謝します。イエス様の復活によって、わたしたちもイエス様のよう復活し、神様の国に入ることを感謝します。そして、まだこれを知らない人々にこの真実を伝えることができるように力をください。



〈今日のカテキズム〉

ハイデルベルク信仰問答

問45 キリストの「よみがえり」は、わたしたちにどのような益をもたらしますか。

答 第一に、この方がそのよみがえりによって死に打ち勝たれ、そうして、御自身の死によってわたしたちのために獲得された義にわたしたちをあずからせてくださる、ということ。

第二に、その御力によってわたしたちも今や新しい命に生き返らされている、ということ。

第三に、わたしたちにとって、キリストのよみがえりはわたしたちの祝福に満ちたよみがえりの確かな保証である、ということです。

※今回の問答も、先週に引き続き、使徒信条についての箇条です。

ウェストミンスター小教理問答

問28 キリストの高擧は、どの点にありますか。

答 キリストの高擧は、次の点にあります。キリストが三日目に死人の中からよみがえられたこと、天に昇られたこと、父なる神の右に座しておられること、終わりの日に世をさばくためにこられることです。

※次の問答は、とても長いので、参考のために記すにとどめます。挑戦する生徒がいれば、勧めてもよいと思います。

ウェストミンスター大教理問答

問52 キリストは、その復活において、どのようにして高くされたか。

答 キリストは、その復活において、次のように高くされた。すなわち、キリストは死において朽ち果てず（彼が死に支配されているはずはなかったからである）、彼が受難したのと全く同じ本質的属性を持ったままの（しかしこの生涯に属する死滅性や他の共通の弱さをもたない）体が真実に彼の靈魂に結合されて、ご自身の力により、三日目に、死人の中から甦られた。そのことによって彼は、ご自身を神の子であり、神の義を満足させており、死と死の力をもつ者にと打ち勝っており、また生者と死者の主である、と宣言された。彼はこれらすべてのことを、その教会の首（かしら）としての公人として、教会員を義とし、恵みに生かし、敵から守り、また彼らが終わりの日に死人の中から復活することを保証するために、なされたのである。

〈今週の聖書日課〉

日曜日 ルカ24：1～12

月曜日 ローマ4：25

火曜日 ペトロー1：3～5

水曜日 ローマ6：5～11

木曜日 エフェソ2：4～6

金曜日 ローマ8：11

土曜日 コリントー15：12～20

テキスト 創世記1章1～31節

1. 初めに

「初めに、神は天地を創造された」(1:1)。わたしたちが生きているこの世界には、「初め」があります。しかし、世界そのものの探求によって、この事実を確認することはできません。信仰によって、この事実を確認するしかありません。確かに、世界そのものの探求が、この事実の認識を補強することもあるかもしれませんが、しかし、その認識を決定的なものにするのは、主への信仰です。「信仰によって、わたしたちは、この世界が神の言葉によって創造され、従って見えるものは、目に見えているものからできたのではないことが分かるのです」(ヘブライ11:3)。

2. 神は言われた

この世界は、「第一の日」から「第六の日」に至る過程を経て創造されました。その過程において、繰り返されている御言葉があります。それは次の三つです。「神は言われた。」「そのようになった。」「神はこれを見て、よしとされた。」

この世界の起源が、神の御言葉に現された神のご意志にあることを端的に示しています。神のご意志によって、あらゆるものが存在するようになり、神のご意志によって存続し続けているのです。そして、次々と秩序正しく積み重ねるようにして、世界が創造されました。最初は、どのような意味も目的も希望も見出すことができないような「混沌」と「闇」のような状態から始まって、ついに完成されるに至るまで創造されたのです(1:2, 2:1)。その過程がどのようなものであったかについて、多くのことが隠されたままです。しかし、はっきりしていることは、「神は言われた」ということです。だから、世界は「そのようになった」のです。

3. 神にかたどって

人の創造は特別でした。「神はご自分にかたどっ

て人を創造された」(1:27)。そして、人にだけ、自覚的に果たすべき使命が与えられました。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ」(1:28)。子供を産んで育てて、どんどん子孫を増やしつづ、「地に満ちて地を従わせよ」と命じられたのです。アダムとエバの二人だけで使命を果たすのではなく、家庭を営み、社会を形成しつづ、その使命を果たすように命じられたのです。しかも、それは、神が「彼らを祝福して言われた」ことでした(1:28)。

4. 見よ、極めて良かった

この世界は、創造主である神のご栄光を現しています。本来なら、世界のどの方面に目を注いでも、神の永遠の知恵と力のご栄光を見ることができはずです。神が「お造りになった全てのもの」をご覧になった時、「極めて良かった」からです(1:31)。神によって創造された世界が、神に愛されて、神のご栄光に輝いていたと想像するのは極めて適切なことでしょう。そして、最初の人は、神の愛の中で、自分の価値と尊厳を心から確信していたでしょう。世界とその中にあるすべてのものが、自分自身をも含めて、「極めて良かった」のです。

神が創造された世界に、現在のわたしたちも生きています。しかし、大部分の人々が、何でも当然のように受けて、「(神を)神としてあがめることも感謝することもせずに、むなしい思いにふけり、心が鈍く暗くなった」まま、歩んでいます(ローマ1:21)。その結果、「極めて良かった」と宣言された世界と人間の価値や尊厳も見失われたままです。「初めに、神は天地を創造された」からこそ、今の世界があり、今の自分があり、今の生活があります。この事実は、聖霊の恵みに謙虚に信頼して、信仰によって認識させていただくしかありません。(貫洞賢次)

テキスト 創世記1章1～31節
参照カテキズム 子どもカテキズム問12

〔単元のねらい〕

天地万物を主が創造されたことを覚えることにより、主なる神さまが、天地万物を創造し、さらに今もそれらの全てを御支配になられていることを確認する。救済史を学び始めることにより、創造主と被造物の関係をしっかり覚え、聖書に語られている御言葉こそが真実であり、受け入れるに値する事柄であることを徹底的に覚えて頂きたい。子どもカテキズム問12のほか、ウェストミンスター信仰告白4章1節、同大教理問15、同小教理問9を参照のこと。

「全てを創られた主」

皆さんの中に、聖書の初めから最後まで、つまり創世記から黙示録まで、全てを読み通した方はおられますか？ 全てを読み通すことができた人は素晴らしいですよ。しかし「まだ少ししか読んだことがない」あるいは「全く読んだことがない」と言われる方も多いかと思いますが、それで構わないですよ。このことは、先生や大人の人たちであっても、大変時間がかかりなかなかできないことですからね。

でもね、今日から2年間、教会学校に続けて来て下さいますと、この聖書の全てを読むことができます。もちろん、教会学校の時間だけで、全部を読んでいくことはできませんが、聖書が語っている大切なことは、この2年間において、全て確認することができるのですよ。

聖書の一番初めには、何と書いてありますか？

創世記1章1節「初めに、神は天地を創造された」。どういうことか分かりますか？ みんなが生まれる前、先生も生まれていません。誰も一人、人間も生まれていません。みんなの住んでいるこの地球もまだない時に、主なる神さまが、この地球も、月も、太陽も、水も、植物も、動物も、そして私たち人間も、お創りになりました、と聖書は書いているのです。

では、どうですか？ 神さまが創られた地球は誰のものですか？ 神さまが創られた太陽は

誰のものですか？ 神さまが創られた星は誰のものですか？ みんなも、絵を描いたら、「これは私の絵だよ」って言うでしょう。粘土で工作したら、「これは私のもの」って言うでしょう。お菓子を買ってきたら、「これは私のもの」って言うでしょう。では、神さまが創られた地球、太陽、星は誰のもの？ 神さまが創られたのだから、神さまが「これは私のもの」って言うことができるのではないですか？

では、神さまによって創られたあなたは誰のものですか？ 「ええ～！」「私はわたし」「僕はぼく」だよ。でも、お父さん、お母さんの子どもだよ。それでお父さんは、お父さんのお父さん（おじいちゃん）の子どもだよ。それでは、ずっとずっと前に行くと、最初の人アダムさんは誰が創られたの？ そう、神さまが、植物や鳥、動物たちを創られたように、最初の人アダムさんも、神さまが創って下さったのですよね。だから、神さまに創られたアダムさんも、アダムさんの子どもも、ずっとずっとその子どもも、そして先生も、みんなも、神さまのものなんだよ。

それでは、神さまがどの様に全てを創っていかれたのでしょうか。

3、「神は言われた。『光あれ。』こうして、光があった。」

11、「神は言われた。『地は草を芽生えさせよ。』

種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける果樹を、地に芽生えさせよ。』そのようになった。」

14、「神は言われた。『天の大空に光る物がある、昼と夜を分け、季節のしるし、日や年のしるしとなれ。天の大空に光る物がある、地を照らせ。』そのようになった。」

24、「神は言われた。『地は、それぞれの生き物を産み出せ。家畜、這うもの、地の獣をそれぞれ産み出せ。』そのようになった。」

26～30、「神は言われた。『我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。』神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。……そのようになった。」

神さまは、ただ言葉を発せられることによって、天地万物、この地球も、太陽も、月も、星も、動物も、そして私たち人間も、創られたのです。神

さまは、それだけの力を持っておられるお方です。そして、今も、力を持って、全てを支配し、私たちと共に生きておられます。言い換えますと、今、私たちが生きているのも、神さまが「いいですよ」と言って下さっているからこそ、私たちは生きていることが出来るのです。神さまが「いいですよ」と言って下さっているから、住む家があり、家族があり、食べるものも飲むものも与えられているのです。

その神さまが、私たちに、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。」(使徒16:31、参照：マルコ16:16、ローマ10:9など)とお語りになられているのです。

全てを創り、支配し、救いをお与えになられる力を持っておられる主なる神さまを信じることにより、私たちは、生きることを、そしていつまでも続く生命である救いを得ることが出来るのです。

(辻 幸宏)

[今週の暗唱聖句] ヨハネによる福音書1章3節

万物は言(ことば)によって成った。

成ったもので、言(ことば)によらずに成ったものは何一つなかった。



〈一週間の準備：これで分級の90%は決まる〉

1) 4/16にお休みの子はどうしてお休みだったんでしょう。次回出席できるようお祈りください。できたら、お手紙をだしましょう。2) 4/23の分級で何を話しますか。話す内容を一週間じっくり考えましょう。当然、出席する子供たちの顔を浮かべながら……。教案の準備は折りではじめましょう。3) 子供たちの成長のために、教会に送り出してくれている家族のみなさんのために祈りましょう。

〈分級では〉

GWもまじかですわね。子供たちはお出かけの計画があるかもしれません。お出かけする場所が山だったり、海だったりすると、もうこの話題を使わないではありません。それを創ったのは神様です!! って思いっきり話せますね。子供たちの関心のある item と関連つけて話をすると、理解がどんどん進みます。天地創造は、まわりに教材がたくさんあります。神さまがいかにもすばらしいものを創造されたのか、自然の精巧な仕組み、雪の結晶、人間の体の働き……。いろいろなものがすばらしい教材だと思います。

〈分級のねらい〉

神さまが創造されたもののすごさ、精巧さを子供たちにわかってほしい。エンジニアの私にとっても、調べれば調べるほど、何でもこんなに精巧に神さまはこの世の中を作られたのだらうと感動す

ることの連続です。そのような先生の感動を子供たちに伝えていただきたい。そして、神さまは創られたばかりでなく、それを良く治め、また愛してくださっていることを伝えていただきたい。

〈展開例：最初の部分だけ書きます〉

(何でもいいのですが、ここでは、ひまわりの話を例に始めます) 大きなひまわりの絵を見せて……。みなさんはこの花の名前知っているかな??、そうひまわりだね。この花は、やく2mの大きさになります。2mというと、〇〇ちゃんがふたり分かな?? そんなに大きくなります。このひまわりは大きくなる前はどうなっているんだらう。(できたらひまわりの種、なかったら、小さい種の絵を見せて) 最初はね、こんなに小さい種かだったんだ。そこからあんなに大きくなるんだ。さて、このひまわりはどうやって大きくなるんだらう……。みんなが大きくなれっていったら大きくなるのかな? (略) こんなひまわりを創られたのも神様なんだ……

〈折り〉

神様、空も、海も、草も、鳥も、魚も、みんな神様が創られたことを知りました。また、神様は、その一つ一つをととても大切に思ってくださっています。神さまの造られたものは、大変良くできていてびっくりです。神さま、こんなすばらしい世界を創ってくださってありがとうございました。

工作例

主 題：神様ってすごい!

目 的：神様はなににもないところからすべてのものをつくられた。しかし、人間は材料がないとなにもつけれないし、形作るものも模倣しかできません。神様の創造の技のすばらしさを知り、感謝していきましょう。

準備するもの：紙粘土(または粘土)、粘土細工をするときに下にしく新聞紙

展開例：こどもたちに粘土で自分の好きな動物や昆虫、草、木、人間と神様の創られた被造物を形作らせる。それをひとつひとつ紙の上においてこどもたちのイメージする世界を作らせていく。作った後は必ず“これでよしとする”といってもらう。

〈これだけは子どもたちに伝えたい！〉

まず神様がいらっしゃって、その神様の「御言葉」によってすべてが造られたこと。

私たちも神様が「〇〇あれ」と言われたからこの世に生まれたこと。

御言葉は今も私たちとともにあり、私たちを「極めてよい」ものになるようにしてくださいということ。

〈展開例〉

礼拝で聞いたお話を思い出しましょう。

○この世がまだ何も無かったとき、神様だけがいらっしゃいました。神様は6日間でこの天と地のすべてのものをお造りになりましたが、そのとき、神様は何か道具を使われたでしょうか。

※神様が天地のすべてを造るのにお使いになったのは「……あれ」という言葉だけでした。神様がこの世にあるように望まれたものだけが、御言葉によって造られたのです。君たち一人一人も「Aくんあれ」「Bちゃんあれ」（子どもたち一人一人の名前を呼んであげてください）と言われたから、この世に生まれてきたのです。一人一人が神様に望まれて生まれてきたということを語りましょう。

○神様がすべてのものをお造りになった後、神様はどう思われたでしょうか。

※神様はすべてのものを御言葉の力によって「極めて良い」（1:31）ものとしておつくりになりました。それなのに、神様に造られた「人」が神様のいいつけにそむいたので、私たちは罪びと（神様から見てもよくないもの）になってしまいました。しかし、「よいもの」を造った神様の御言葉は今も「聖書」として私たちの近くにあります。神様は聖書の御言葉によって、私たちを「よいもの」にしようとしておられるのです。日曜学校では今週から、そのことをいっしょに勉強していきます（「救済史」の学びを始めるにあたって、全体の目標がどこにあるのかを、子どもたちと一緒に確認しましょう）。

〈ちいさなお祈り〉

○すべてのものをお造りになった神様の「御言葉」が私たちを「よいもの」へと導いていてくださることに「ありがとう」とお祈りしましょう。



〈ねらい〉

世界は神様によって造られたこと、神様が造られた世界はとても素晴らしく完全であること、その力ある神様がわたしたちをも造られたことを確かめる。

〈展開例〉

1. 創世記1章を通して、第一日目から第六日目まで神様が造られたものを書いてみましょう。

第一日目 光一昼、闇一夜

第二日目 大空、大空の上、下

第三日目 陸地、海、草、木

第四日目 星、月、太陽

第五日目 水の中の生き物、鳥、

第六日目 地の生き物、人

2. 面白い例話

あるクリスチャンの天文科学者がいました。彼はこの宇宙は神様が造られたと信じていました。しかし、同僚の一人の科学者はそれを信じることなく、宇宙は自然に出来たと信じていました。そこで、クリスチャンの科学者はある人に、素晴らしい天体模型を作ってもらいました。

それを机の上に置いてながめていると、神様

の創造を信じていない同僚が入ってきました。

「お！素晴らしい。これ、だれが作ったの」
彼は目を大きくしてその模型に感動していました。

「だれも作ってなんかいないよ。このままあったんだ。初めから」

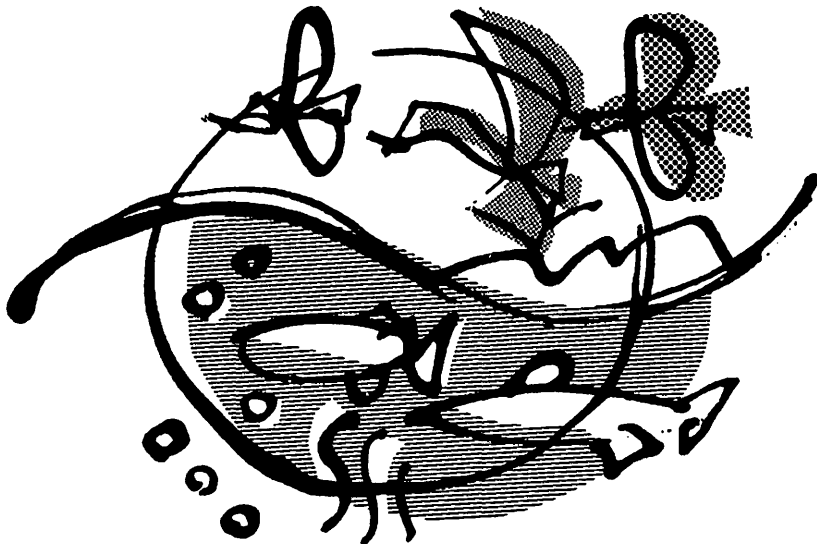
すると友達は、

「そんなことないでしょう。初めからここにあるわけじゃないか。だれかが作ったんだろう！」

「ほら。君もそう思うだろう。宇宙が初めからあるわけじゃない。きっとだれかが造ったからあるんだよ。だれが造ったと思う？ 人間では出来ないから、やはり神様でしょう！」

〈祈り〉

神様、神様は言葉だけでこの世界を造ることの出来る力ある神様です。そのような神様が私たちをも造ってください、この素晴らしい世界に住まわせてくださいました。神様の大きな恵みを感謝し、この世界をよく守っていくことができますようにお祈り致します。



〈今日のカテキズム〉

ウェストミンスター小教理問答

問9 創造の御業とは何ですか。

答 創造の御業とは、神が、すべてのものを無から、力ある御言葉により、六つの日にわたって、万事はなはだよく造られたことです。

ハイデルベルク信仰問答

問26 「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず」と唱える時、あなたは何を信じているのですか。

答 天と地とその中にあるすべてのものを無から創造され、それらを永遠の熟慮と摂理とによって、今も保ち支配しておられる、わたしたちの主イエス・キリストの永遠の御父おんちちが、御子キリストのゆえに、わたしの神またわたしの父であられる、ということです。

わたしはこの方により頼んでいますので、この方が体と魂に必要なものすべてをわたしに備えてくださること、また、たとえこの涙の谷間へいかなる災いを下されたとしても、それらをわたしのために益としてくださることを、信じて疑わないのです。

なぜなら、この方は、全能の神としてそのことがおできになるばかりか、真実な父としてそれを望んでもおられるからです。

※この問答も長いですが、暗唱までは難しくとも、ぜひ紹介していただきたいと思います。なぜなら天地創造の話は往々にして、私たちからうんと遠い時代の話として、時には伝説のようにしてとらえられますが、神様を「天地創造の神」ととらえることがどれほど「わたし」にとって恵み深いことかを告白しているからです。

〈今週の聖書日課〉

日曜日 創世記1:1~2:3

月曜日 ヘブライ11:3

火曜日 詩編33:6

水曜日 イザヤ44:24

木曜日 エフェソ1:4~5

金曜日 詩編55:23

土曜日 ローマ8:31~39

先生方へ③

相馬先生が当教案誌第13号に、カテキズムの語源、ギリシア語の「カテケーシス」が「下に向かって響かせる」という意味を持つこと、キリスト教会の信仰教育（教理教育）が「カテキズム」というあり方に整えられてきたこと、「カテキズム」を用いた教会の教理・信仰教育が正しく行われるときには、いつも「響き合い」（それは主イエス・キリストの恵みの響きに共鳴すること、神との人格的交流という響き合い、そして人間同士の真実の交わりを回復する響き合い）が起こる、ということを書いていらっしゃいます（p. 23）。（つづく）



テキスト 創世記2章4～25節

1. 土の塵で

「主なる神は、土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」(2:7)。人が「土の塵」で形づけられたことは、人にへりくだることを教えます。神が、「その鼻に命の息を吹き入れて」くださらなかったなら、人は生きる者となることはありませんでした。「塵にすぎないお前は、塵に返る」(3:9)。また、模範とすべき信仰者たちも、そのことを自覚していました。アブラハムは、自分のことを「塵あくたにすぎないわたし」と呼びました(18:27)。「土の塵」で形づけられたという事実をよく思い起こすならば、だれも神に対して高ぶることはできません。反対に、「命の息を吹き入れられて……生きる者となった」という事実を思い起こすならば、だれでも神の御前で価値ある人です。神によって創造されたということは、まったく神に依存しているということです。創造主なる神を無視して高ぶることも、卑下することも、神によって創造された人にふさわしいことではありません。

2. エデンに園をもうけ

「主なる神は、東の方のエデンに園を設け、自ら形づくった人をそこに置かれた」(2:8)。人は、その生活環境においても神にまったく依存していました。そして、神のご配慮はすばらしいものでした。その園には、「見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらすあらゆる木」がありました(2:9)。そして、それらの木のすべてについて、自由に取って食べることが許されていました。神は、人に選択の自由を与えてくださったのです。自分で見て、選んで行動するのです。その中で、いろいろ失敗することも、うまくいくこともあったでしょう。その中で学んでいくように決めてくださいました。しかし、越えてはならない一線が

ありました。「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」(2:16,17)。主の御言葉の内容は、死を警告する厳しいものでしたが、状況は決して厳しいものではありませんでした。別に、その木から取って食べなくても、十分に他の木で間に合っていました。それゆえ、この禁止命令が指し示す越えてはならない一線の意味がいつそう明白です。神に逆らおうと思わない限り、その木から取って食べる必要性はなかったからです。あくまでも神への服従の中にとどまることが求められていたのです。

3. 人が独りているのは良くない

「人が独りているのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう」(2:18)。神は、人が孤独に歩まず助け合って生きるように、結婚のご配慮をしてくださいました。ここから家庭が形成され、社会が成立していきます。しかも、女は男の「あばら骨の一部」を抜き取って造り上げられました(2:21)。これによって、「二人は一体となる」ことが象徴的に示されています(2:24)。

また、その交わりは具体的に豊かな安心と信頼に満ちていました。「人と妻は二人とも裸であったが、恥ずかしがりしなかつた」(2:25)。何も隠す必要がなかったのです。何も隠さずにありのまま、自信をもって二人で一人の人のように歩むことができました。

人は、神によって創造されました。人の生活環境も、神が整えてくださったものです。人の助け手も、神によって備えられました。家庭の営みも、社会の形成も、神のお導きによります。人は、あらゆる面で神に依存しています。そして、人は神に従ってこそ、神の祝福を受けて幸せです。

(貫洞賢次)

テキスト 創世記2章4～25節
参照カテキズム 子どもカテキズム問15

〔単元のねらい〕

人間の真実の姿は、神さまが、神にかたどって、神に似せて、命の息を吹き入れられ創造されたことを知る。そのことにより、人間は自分勝手に生きるのではなく、神さまを礼拝し、神さまの御言葉に聞き従う歩みを行うことこそが、私たちにとって何よりの恵みであり祝福であることを教えて頂きたい。進化論との関係については、子どもたちも悩むことでしょうから、上から抑圧的に否定するのではなく、子どもたちにも考えてもらい、たとえここで問題が解決しなくても、問題意識を持ち、真の信仰が与えられた時に自然と問題が解決出来るように導いて下されれば良いのではないのでしょうか。子どもカテキズム問15のほか、ウェストミンスター信仰告白4章2節、同大教理問17、同小教理問10を参照のこと。

「命の息を吹き入れられた人間」

先週の礼拝では、神さまが天地万物を、つまりすべてを創られた力あるお方であることを確認しましたよね。そして私たち人間もまた、神さまによって創られたのです。

しかし皆さんの中には、学校で教えてもらったこととは違うよ？ と疑問に思う人も多いかと思えます。学校では、「人間は猿から進化してきたのだよ」と教えられますよね。しかし、ここで少し考えて欲しいのですよね。学校で教えられることは、全て正しいのでしょうか？ 数年前には、古い古墳の発掘をしていた先生が、自分で発見したように嘘のことを公表していました。そしてこの嘘を、みんな信じて、多くの人たちは、そう信じていました。しかし、後に、実はあれは嘘だったことが分かり、学校でも誤って教えられていたのです。また、ずっと昔の話ですが、日本がまだ戦争をしていた頃、学んでいたことは、戦争が終わった後に、実は事実とは違いますよと、教科書を墨で塗りつぶして、全く別のことを学んだこともあります。しかしこの様なことは滅多なことではしょうから、学校の先生が教えて下さることは、しっかり学ばなければなりませんよね。

しかし、人間が猿から進化したのだと教えることは、それは違うのではと言う学者もいるのです。

しかし日本では、「人間は猿から進化したのだよ」と教えなさいと言われているのですね。でもね考えてみて下さい。最初の人間が出てきた時のことを、誰が確認することが出来るのでしょうか。古い化石から、そうだろうと推測することは出来たとしても、誰も猿から人間に進化した姿を見た人はいないのです。実験で確認したわけでもありません。また、今も、猿やチンパンジー、オラウータンのように人間に近いとされる動物（類人猿）がいますが、人間になった猿がいるのでしょうか。今、私たちは、進化の姿を確認することが出来ないのですね。

しかし、全てを創られた神さまは、聖書を通して、人間が創られた時の状況を、説明して下さいます。神さまは語られておられます。人間を創られた方が、その状況を説明して下さいます。このことほど、確かなことはないのではないのでしょうか。

神さまは語られます。「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう」(1:26)。私たち人間は、動物に似ているのではなく、神さまに似ているのです。人間は、他の動物とは全く異なるのです。比べられないほど、

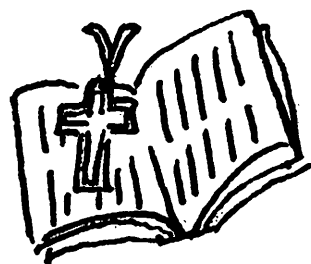
尊いのです。能力もあります。だからこそ、考えたり、信じたり、神さまを礼拝したりすることが出来るのです。意志は動物にも多少はあるでしょうが、魂・霊は、人間にしかないのです。それを聖書は「神に似せて」人が創られたということで、説明して下さっています。

また聖書は次のようにも語っています。「主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」（2:7）。息は動物も同じように行っています。しかし、人間が息をする

のと、動物が息をするのでは、まったく違うのですね。人間は動物のようにただ単に空気を吸って息をしているわけではありません。人間が生きるために与えられた命の息とは、神さまが共におられ、神さまが交わって下さるものとしてであります。つまり聖霊なる神さまが、私たちの内に注ぎ込まれているのであり、私たちは神さまとの交わりを続け、神さまを礼拝することにおいて、本当の意味で生きているのです。ですから、私たち人間は、神さまを礼拝して、神さまと共にあることによって、本当の意味で生きているのです。（辻 幸宏）

[今週の暗唱聖句] 創世記2章7節

主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、
その鼻に命の息を吹き入れられた。
人はこうして生きる者となった。



〈一週間の準備：これで分級の90%は決まる〉

1) 4/23にお休みの子はいませんでしたか？、どうしてお休みだったんでしょう。次回出席できるようお祈りください。できたら、お手紙をだしましょう。2) 4/30の分級で何を話しますか。話す内容を一週間じっくり考えましょう。当然、出席する子供たちの顔を浮かべながら……、教案の準備は祈りではじめましょう。3) 子供たちの成長のために、教会に送り出してくれている家族のみなさんのために祈りましょう。

〈分級では〉

今週はGWでお休みする子が増えます。お休みする子がいたら、分級でその子のために祈りましょう。まじかな目に見える課題を祈る経験って、子供たちのとってとても貴重なものと思います。休み中の子供たちにコンタクトを取ることも忘れないでくださいね。自分が休んだことを先生がきちんと気にかけてくれていることって、子供たちにとってとても大事なことだと思います。

〈分級のねらい〉

自分の作品は特別いとおいしい物だと思います。神様もそうではないでしょうか。私たちを作ったのは誰もいない、神様であること、そして、神様の作品である私たちをととても大事にしてくだっていることが子供たちに伝わるお話ができればと思います。



〈展開例：最初の部分のみ書きます〉

(最初に) 神様の創造したものを、先生が言うのではなく、最初のヒントを与えたら、子供たちに先週の続きを言ってもらえる方がいいかな……と思います。子供たちは、我さきに話してくれます。それは、ぜ……んぶ神様が造られたものです。先生が全部いうより、はるかに子供たちの心の中に創造の業がイメージできると思います。

(それでは以下お話) 先週のお話覚えているかな??そう、神様は、空を、海を、山を、川を、そして夏を、冬を、秋を、春を……そして、雨を、風を、台風を造られました。さらに、草を、木を、海草を、りんごを、みかんを、ももを、バナナを……造られました。まだまだ、神様は作ったんだったよね。そう、生き物、犬や、魚や、たこや、いのししや……、でも、待って、大事なものが無いぞ……。そう、人間。みんなも人間だね。神様が一番最後に人間を創られたんだ。ほら、男の人と、女の人がいるね。男の人がアダムさん、女の人がイブさんというんだ。

二人とも楽しそう??、悲しそう??

そう、楽しそうだね。

神様が作られた世界は、本当はとっても、とってもよくできて、いいところだったんだね。

じゃ、みんなは誰の作品だろう……?

〈祈り〉

神様、わたしたちのまわりの、すべてのものをほんとうによく創ってくださいました。ありがとうございます。わたしたちをいつも愛して、大切にして下さっている神様を思ってお祈りできますように。

〈これだけは子どもたちに伝えたい！〉

人間は神様から「命の息」を吹き込まれて「生きるもの」になったものなので、人間だけが神様を礼拝することができるということ。

神様は人間に「役目」を与えて造られた。だから、人間にとっては神様に従うことがもともとの自然な生き方であるということ。

〈展開例〉

礼拝で聞いたお話を思い出しましょう。

○神様はすべてのものを「…あれ」という御言葉の力でお造りになりましたが、人間にだけは特別なことをしてくださいました。それは何だったのでしょうか。

※神様は人間だけを「神様に似せて」造り、「命の息」を吹き入れてくださいました(2:7)。この「命の息」とは「神様のことを想うことができる力」です。

TVに出てくるチンパンジーのバンくんはとても賢くてお使いに行ったりカメラで写真を撮ったりできますが、チンパンジーはいくら賢くてもお祈りをしたり神様を礼拝したりしません。人間は、神様を想うことができる、お祈りしたり礼拝したりできる、という点で他の動物とは全然ちがう「神様に似た」特別なものとして造られたのです。

(「神様に似る」というのは姿かたちのことではなく「『霊的』な存在である」ということは低学年には難しいので、神様に似せられているので神様と交わることができるというような説明をしてはどうでしょうか)。

○神様は人間だけを特別なものとして造られ、人間だけに役目をお与えになりました。その役目とは何だったのでしょうか(1:28・29)

※神様は人間を特別なものとして造られ、神様の造られた地球を支配させようとお考えになりました。人間はもともと神様から役目をもらって造られたのですから、神様に従うことがもともとの自然な生き方なのです。

(水の中に生きるように造られた魚は、いくら広々としているからといっても空では苦しくて生きていけないように、神様に従うように造られた人間は、いくら好きなことができるように見えても、神様から離れては苦しくて生きていけなくなるのです。)

〈ちいさなお祈り〉

○神様が私たちに「命の息」をふきこんでくださって、神様にお祈りすることができるようにしてくださったことを「ありがとう」とお祈りしましょう。



〈ねらい〉

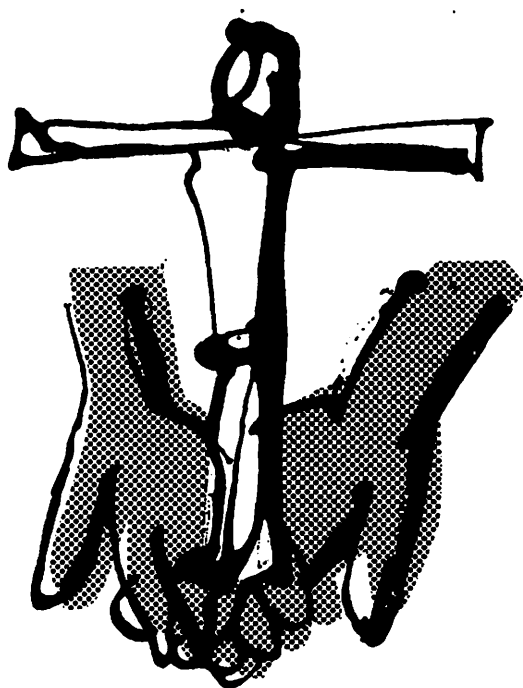
世界を造られた神様は、神様に似せて人間を造りになったこと、人間は、他の動物とは違って特別な存在であること、だから人間は神を礼拝することができることを確認する。

〈展開例〉

1. 神様は人間を何で造られたのでしょうか。聖書を見ながら答えてみましょう。
2. 神様が他の動物たちと違って、人間を造るときだけになさったことは何でしょう。
3. そのように特別な存在として造られた人間が、他の動物と違うところがなんであるか考えながら、一緒に話し合ひましょう。

〈折り〉

愛する神様、わたしたち人間を神様に似せて、霊的な存在として造ってくださったこと感謝いたします。そのような造られた私たちが、神様を愛し、神様を慕い、いつまでも神様を讃美することができるようにしてください。



〈今日のカテキズム〉

ウェストミンスター小教理問答

問10 神は人を、どのように創造されましたか。

答 神は人を、男性と女性とに、知識と義と聖において御自身のかたちにしたがって創造し、被造物の支配を託されました。

ハイデルベルク信仰問答

問6 それでは、神は人をそのように邪悪で歪んだものに創造なさったのですか。

答 いいえ。

むしろ神は人を良いものに、また御自分にかたどって、すなわち、まことの義と聖において創造なさいました。

それは、人が自らの造り主なる神をたたく知り、心から愛し、永遠の幸いのうちを神と共に生き、そうして神をほめ歌い讃美するためでした。

※ハイデルベルクの間6の問答は、私たちが神の律法に求められていることを完全に行うことはできない、なぜなら、神と隣人を憎む方へと生まれつき心が傾いているから、という問4、問5の問答を受けています。

〈今週の聖書日課〉

日曜日 創世記1：26～28

月曜日 創世記1：31

火曜日 創世記2：7

水曜日 創世記2：18～25

木曜日 コロサイ3：9b～10

金曜日 エフェソ4：20～24

土曜日 詩編8編

先生方へ④

ルードルフ・ボーレンという神学者は、『天水桶の深みにて？ ころ病む者と共に生きて』という著書の中で、こんなことを書いています。「カテキズムと共にあったとき、魂は孤独ではなかった。話し相手を得ていたのである。しかし、カテキズムが失われてしまったとき、一種の〈読むことを失った状態〉が、激しく襲うことになったのである。内的な沈黙の道は開かれ、信仰喪失の時代が始まることになり、重いころの病が、信仰者、不信者を問わず、猛威を振るうようになったのである。」(p. 39)

カテキズムが魂に話し相手を与えていた！これが単に形式的に問答をするというようなカテキズム教育をさしているのではなさそうだ、ということがお分かりになるでしょうか。

(つづく)



テキスト 創世記3章1～15節

1. 誘惑による墮落

神様は、人間をエデンの園に置き、その祝福の中で生きようとして下さいました。その際、神様は人間に必要なものを備えて下さいましたが、一つの命令を語っておられました。それは、「善悪の知識の木からは、決して食べてはならない」です。この命令は、人間が神様に従って生きる祝福のために用意された命令でした。

しかし、神様の命令を無視する出来事が、サタンの使いである蛇によってもたらされます。蛇はエバに対して「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか」というように、エバが神様の言葉を軽く扱ってしまうような、巧みな語りかけをします。蛇の狙いは、人間が神様の御言葉を軽く扱い、神様に対する疑いを持ち、いつしか神様から離れていくようになることです。蛇は、「善悪の木の実を食べてはならない」と答えるエバに対し、「決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ」と、更に言葉を重ねます。この巧みな言葉によって、エバは神様の言葉を軽く扱い、いつしか神様の言葉を忘れ、神様の思いを考えずに生きる道へと進みます。人間は、神様の言葉を蔑ろにし、神様の御心を思わずに生きようとするとき、罪の墮落へと道を進んでしまうのです。

2. 罪の悲惨

善悪の知識の木の実を食べたエバは、その実をアダムにも渡しました。彼らは神様の命令を無視してしまい、罪へと墮落しました。その結果、二人の目は開け、自分たちが裸であることを知るようになりました。神様のように善悪を知る者として目が開かれたのではなく、罪に墮ち、自分のやりたいように生きる恥に満ちた自分、神様の前に

進み出ることの出来ない自分の姿に目が開かれたのです。

更に彼らは、神様が近づいてくる音を聞いたとき、神様の呼びかけを聞いたとき、そこから隠れてしまいました。神様の側から近づき、呼びかけて下さっているにも関わらず、彼らは神様の御前から隠れ、交わりを拒絶するのです。しかも、神様の命令を破り、善悪の知識の実から取って食べたことを問いただされた際、彼らは自分自身を弁護し、罪の責任転嫁を始める。それが罪がもたらす一つの悲惨な状態です。

3. 神様の約束

神様の命令を無視し、神様に従わなかったアダムとエバは、神様から離れ、神様との交わりから遠ざかっていきます。それが罪です。取って食べると死んでしまうと言われた木の実を食べたことによって人間に罪が入り、罪に対する罰を受けなければなりません。神様と共に生きる命の道から、神様なしの死の道を味わわなければなりません。

しかし神様は、希望の言葉を語って下さいました。それは「お前と女、お前の子孫と女の子孫の間にわたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕きお前は彼のかかとを砕く」です。この原福音とも呼ばれる言葉は、神様が不信仰者と信仰者との間に敵意を置いて下さるといふ約束です。神様を信じ、従いたいと願う信仰者は、サタンの誘惑を嫌い、罪を憎むようになる。そして、両者の激しい戦いが予想されるものの、蛇の子孫としての不信仰者は信仰者のかかとだけに傷を与えるのみである。しかし、女の子孫として信仰者は頭を砕く決定的な勝利を得ることが出来る。それを可能とするのがイエス・キリストの十字架の福音なのです。神様はそのような救いの約束をはっきりと語って下さっています。(千ヶ崎基)

テキスト 創世記3章1～15節
参照カテキズム 子どもカテキズム問16～18

〔単元のねらい〕

アダムとエバがサタンに誘惑され、罪におちていくプロセスは、まさしく今私たちが罪を犯すプロセスと同じである。その意味で、エデンで起こったこの出来事は決して私たちから遠い出来事ではない。ここには私たち自身の姿が描かれている。私たちはまさしくアダムのすえである。しかしそうであるからこそ、神の私たちへの赦罪の恵みも真正正銘の恵みである。始祖の罪と墮落について聖書に忠実に聞きながら、世をこえて揺らぐことのない神の救いの恵みをあらためて深く覚えたい。

「墮落と恵み」

先週、神さまが人間をととてもすばらしくお造りくださったことを学びました。神さまは最初の人間アダムをご自身のみかたちに似せてお造りになりました。さらに、アダムの助け手としてエバをお造りになりました。アダムとエバとはエデンの園というすばらしい場所で、神さまに愛され、そしてたがいに愛し合って、とても幸せでした。

人間の幸せはどこにあるのでしょうか。それは神さまとともにあるということです。神さまとともに生きるとき、人間はほんとうの意味で生きていると言えるのです。また、幸せだと言えるのです。アダムとエバは神さまとともにあって、幸せでした。

さて、神さまはアダムとエバに、エデンの園で受けているよりももっとすばらしい、天国の幸せを用意されました。でも、アダムとエバとがその幸せをいただくには、ひとつのテストに合格することが必要だったのです。それは、園の真ん中にある木（善悪を知る木、と呼ばれます）の木の实を取って食べてはならないというテストです。つまり神さまは、ふたりがご自身のみ言葉に忠実に従うことができるかどうかをお試しになったのです。

そこにサタンが蛇のすがたをして現れました。サタンは人間を神さまから引き離そうとする者です。ここでもサタンは、ふたりを神さまから引き離そうとして、たくみな言葉によって誘惑しまし

た。

サタンは何と言ったのでしょうか。神さまは前もってふたりに、もしもこの木の实を食べるなら、あなたたちは必ず死ぬとおっしゃっていました。けれどもサタンは、神さまのおっしゃったことはうそっぱちだ、あなたたちは木の实を食べても決して死ぬことはない、かえってあなたたちが神さまのようになることができるのだ、と言ったのです。この誘惑によってアダムとエバは木の实を食べました。神さまのみ言葉に背いたのです。

私たちは神さまから離れて、自分ひとりで生きていくことができるでしょうか。自分の力と知恵とで、神さまのように何でもできるでしょうか。そうではありません。私たちは私たちを造ってくださった神さまとともにあるときに、そして神さまのみ言葉に従うときに、はじめて生きていくことができるのです。けれどもアダムとエバは、サタンの試みを受けて、あたかも自分たちだけで生きていけるかのように、自分たちが神さまになれるかのように思ってしまったのです。

この思い上がりの罪がアダムとエバにもたらしたものは死です。人間は神さまとともにあるとき、生きます。神さまから離れるとき、死にます。神さまはみ言葉に背いたふたりに、あなたがたはちりにかえると仰せになりました。死ぬ、ということです。こうして全人類に罪と死が入ったのです。

アダムとエバのお話は、遠い昔のおとぎ話でしょうか。そうではありません。聖書は、最初の人間アダムのこの罪を、アダムの子孫である全人類も受け継いでいると教えています。全人類の中には当然、私たちのひとりひとりも含まれています。

アダムとエバはどのように罪を犯したのかを、今日の聖書箇所からよく読み取りましょう。ふたりは、神さまからお聞きしたみ言葉を曲げました(4節)。また、罪の共犯者をつくりました(6節)。神さまの足音に恐れて身を隠しました(8節)。さらに、おたがいに罪をなすりつけました(11節以下)。これらは私たちが罪を犯すときにすることと、まったく同じです。私たちがアダムとエバの罪を受け継いでいるというのは、ほんとうのことなのです。私たちも生まれながらに神さま

から離れようとする者です。自分が神となることを好む者です。生まれつき罪と死の支配のもとに置かれている者です。

けれどもほんとうに幸いなことに、神さまはもうこのときに、神さまご自身がサタンと戦い、サタンを打ち負かして、アダムのすえである私たちが罪と死のさだめからときはなち、もう一度ご自身のもとにたちかえって生きることができるようにしてくださるとの、大いなる祝福を約束してくださったのです。その約束は時が満ちて、ひとり子イエス・キリストが十字架に死んでよみがえられたことによって、お言葉どおり実現したのです。そのようにして私たちが罪と死とから救い出し、もう一度ご自身のみもとに招いてくださった神さまの恵みに感謝しましょう。(木下裕也)

[今週の暗唱聖句] ローマの信徒への手紙6章23節

罪が支払う報酬は死です。

しかし、神の賜物は、私たちの主キリスト・イエスによる永遠の命なのです。



〈一週間の準備：これで分級の90%は決まる〉

1) 4/30にお休みの子はどうしてお休みだったんでしょう。次回出席できるようお祈りください。できたら、お手紙をだしましょう。2) 5/7の分級で何を話しますか。話す内容を一週間じっくり考えましょう。当然、出席する子供たちの顔を浮かべながら……。教案の準備は祈りではじめましょう。3) 子供たちの成長のために、教会に送り出してくれている家族のみなさんのために祈りましょう。

〈分級では〉

GWが終わりました。お出かけした子供たちは、先生にいろいろな出来事を話したくてしょうがないはず。一人が話し始めると、あの子も、この子も……。また壊れたCDプレーヤーのように何度も何度も同じことを……。でも一生懸命聞いてあげてください。神様は私たちの愚痴のような祈りを一生懸命聞いてくださっています。本当に辛抱強く。私たちも子供たちに、一方的に準備したものを話すのではなく、聞く耳を持つ、辛抱強い教師になりたいと願っています。(難しいけど……)

〈分級のねらい〉

アダムとエバが神さまのことを忠実に守らず、罪に落ちていくプロセスを子供たちに淡々と伝えてほしい。1) 最初は平和に生活しており、神さまと約束があったこと2) 蛇(サタン)の誘惑にあったこと、3) エバが神さまとの約束を破ったこと、4) そればかりでなく、アダムにす

すめたこと、5) 神さまの足音に恐れたこと6) お互いに罪をなすりあったこと。特に後半の5)、6)の部分は本当に人間の醜さをあらわしている箇所と思います。その醜さが何によってやってきたのか??。その部分が子供たちにしっかり伝わってくれればと思います。また、十字架のイエスの死と関連つけて話ができればと願っています。

〈展開例：最初の部分だけ書きます〉

アダムとエバさんは、エデンの園という場所で、神さまに守られて生きていました。そこで、神様と大切な約束をしていました。「善悪の知識の木」からは食べていけないというのです。しかし、そこに蛇がやってきました。蛇はいうんです。「おい、神さまは、本当に食べてはいけないといったか……」「食べると、お前たちも神さまのようになれるんじゃないか……」(略)

神さまは「お前たちは、あの木から食べたのか」とするとアダムが「この人が、私によこしたんです」。するとエバは「いえいえ、蛇が……」

(補足) 適切でないかもしれませんが、両親との約束を破って、悪いことをした時、どんな反応をするのか……。両親に怒られるを恐れて妹のせいにしたりしないか? というのを例にあげると、子供たちはイメージしやすいようです。

〈祈り〉

神様、私たちは神様との約束を簡単に破ってしまいます。神様の約束を守るよう助けてください。

工作例

主題：言われたことは守りましょう

目的：神様はアダムとエバにおことばを守ることを教えられました。この箇所では、言われたことを守るという訓練を兼ねた作業をします。

準備するもの：人数分の白紙、色鉛筆、くれよん、ペン(絵を描く道具ならなんでもよい)、果物、ケーキ、お菓子等子どもが好みそうな食べ物

展開例：果物等をいくつかテーブルの真ん中において「これを見て描きましょう」と指示をします。きれいに写生することが重要ではありません。絵の表現の仕方は子どもたちの自由です。絵を描き始める前と終了後(その指示を守れても、守れなくても)は一緒にお祈りをしましょう

〈ねらい〉

アダムとエバは神様に従うように造られたのに、自分が神様みたいになりたくてサタンの誘惑に負けてしまったこと。

それでも、神様は人間をそのままにしておかれずに、神様のところへもどる道を準備しておられること。

〈展開例〉

礼拝で聞いたお話を思い出しましょう。

○先週、人間は神様に従うように造られたということをお話しました。では、アダムとエバはずっと神様の御言葉にしたがっていたでしょうか。

※人間は「善悪を知る木の実」を食べてはいけないと言う神様からの言いつけを破ってしまいました。

そんなふうになってしまったのは、蛇(サタン)にそそのかされたからですが、それはアダムたちが①神様の御言葉をちゃんと聞いていなかったこと(1:17で神様は「必ず死んでしまう」とおっしゃっているのに、3:3でエバは「死んではいけないから」と御言葉をあやふやにしている)と、②神様に従うよりも自分が神様みたいになりたかった(3:5のサタンの言葉にのせられてしまった)ことのせいです。

このことは、今の私たちにもつながっています。私たちは、聖書の言葉を全部信じることはむつ

かしいし、日曜日に神様にしたがって教会に行くよりは自分の好きなように友達と遊びに行ったりしたいものなのです。

アダムたちの物語は、私に関係の無い昔話や神話ではなく、アダムたちの墮落の根にあるものは、今の私たちにもしっかりと残っていることを語りましょう。

○神様は言いつけを守らない人間を「もう知らない」と見捨ててしまわれるのでしょうか。

※(3:15)「女の子孫」とはイエス様のことです。サタンはイエス様のかかどに噛み付くけれど、イエス様はサタンの頭をつぶしてしまうと神様は約束されました。頭をつぶされては生きておられませんね。神様は、イエス様がサタンの息の根を止めてしまうということを約束されたのです。

だから、イエス様に守られている私たちは、サタンに誘惑されてもこうして教会に、神様のところへ来ることができるのです。

〈ちいさなお祈り〉

○私たちは神様の言うことを聞こうとしないのに、神様がサタンの息の根をとめてくださって、私たちが、神様のところに来ることができるようにしてくださったことを「ありがとう」とお祈りしましょう。



〈ねらい〉

人間は神様と共にいるときが一番幸せなのに、神を背くことによって罪が人間の中に入ったことを知り、再び人間を救うためにイエス・キリストを遣わされたことを感謝することが出来るようにする。

〈祈り〉

罪深い私たち人間を、忍耐をもって見守ってくださる神様。わたしたちは神様と共にいるときが一番幸せであります。イエス・キリストによってわたしたちが神様と共にいることを確信することが出来るように、私たちの信仰を導いてください。

〈展開例〉

1. 創世記2章8節から出てくるエデンの園とアダム、エバの様子を絵にしてみましょう。
2. 書いて絵を見ながら、どのような面で幸せを感じるのか話し合ひましょう。
3. 人が神様に対して犯した罪は何でしょうか。
4. 3章15節は神様が罪を犯した人に与えてくださった一つの約束です。それはどんな約束だったのでしょうか。



〈今日のカテキズム〉

ウェストミンスター小教理問答

問14 罪とは、何ですか。

答 罪とは、神の律法への一致に少しでも欠けること、あるいは、神の律法にそむくことです。

問17 墮落は、人類をどんな状態に落としましたか。

答 墮落は人類を、罪と悲惨の状態に落としました。

問18 人が墮落した状態の罪性は、どの点にありますか。

答 人が墮落した状態の罪性は、次の点にあります。すなわち、アダムの最初の罪の罪責を負っていること、原義を失っていること、人の性質全体の腐敗、つまりいわゆる原罪があること、そこからあらゆる現行罪が生じていることです。

問19 人が墮落した状態の悲惨とは、何ですか。

答 全人類は、墮落によって神との交わりを失いました。今は神の怒りとのろいの下（もと）にあり、そのため、この世でのあらゆる悲惨と死そのものと永遠の地獄の刑罰との責めを負わされています。

問20 神は全人類を、罪と悲惨の状態のうちに滅びるままにされましたか。

答 神は、全くの御好意によって、永遠の昔から、ある人々を永遠の命に選んでおられたので、彼らと恵みの契約を結ばれました。それは、ひとりのあがない主によって、彼らを罪と悲惨の状態から救助して、救いの状態に入れるためです。

ハイデルベルク信仰問答

問8 それでは、どのような善に対しても全く無能で あらゆる悪に傾いているというほどに、わたしたちは墮落しているのですか。

答 そうです。わたしたちが神の霊によって再生されないかぎりには。

〈今週の聖書日課〉

日曜日 ローマ5：12

月曜日 ヤコブ1：14～15

火曜日 ローマ3：19～20

水曜日 ローマ3：21～22

木曜日 ガラテヤ3：21～22

金曜日 ヨハネ3：3～5

土曜日 ローマ5：19

先生方へ⑤

ポーレンは信仰を学ぶためのひとつの手段として、「暗記して学ぶこと」について述べています。それは、印刷されたものを、自分とは異質のままのものではなく、自分自身のテキストとなるまでにし、こころに刻むという作業です。そしてそのことがどうして魂に話し相手を与えることになるのでしょうか。

『暗記して学ぶ』という言葉、言葉どおりに受け取ってみよう。それは、私が、学びながら、自分を外に向ける、ということである。孤独のままではいけない。パートナーを得るのである。このパートナーは、初めは沈黙しているが、やがて語り始める。自分を語り始め、遂には、私がこのパートナーに自分の声を貸せるほどになるのである。このようにテキストとパートナーの関係になることによって、私に取り次がれるのは、何らかの程度の自由である。(中略) (つづく)



テキスト

創世記6章1～22節

1. 墮落の状態

この当時、罪がありながらも神様を信じて生きようとする「神の子」と呼ばれる人々がいました。しかし、彼らの罪深さが一つの出来事をきっかけとして頭わになります。それは結婚です。「神の子」たちは、「人の娘たちが美しいのを見て、おのおの選んだ者を妻にした」のです。これは、「神の子」たちが神様を抜きにし、自分の都合の良い判断で妻を選んでいたことを伝えています。つまり、主にあって結婚しなかったという事実です。

神様の御心を抜きにして、神様の存在を無視して生きる。そして、益々神様から離れていこうとするのが罪です。それは一時的なものではありません。5節に「地上に人の悪が増し、常に悪いことばかりを心に思い計っている」、11～12節に「この地は神の前に墮落し、不法に満ちていた。神は地を御覧になった。見よ、それは墮落し、すべて肉なる者はこの地で墮落の道を歩んでいた」とある通り、悔い改めもなく、かえって増大する一方でした。

2. 罪に対する神様の応答

3節に『わたしの霊は人の中に永久にとどまらざるべきではない。人は肉にすぎないのだから。』こうして、人の一生は百二十年となった」とあります。「人の一生は百二十年となった」とは、「寿命が120年になった」ということではなく、当時の人間が、ある出来事までに120年しか生きられない、つまり罪に対する神様の裁きがなされるまで120年であるという執行猶予期間を表し、神様が人間の悔い改めを望んでおられることが示されています。

しかし、人間は罪の道を好んで歩み続けます。神様はその様子を御覧になり、その気持ちを明ら

かにされます。6節の「地上に人を造ったことを後悔し、心を痛められた」は、人間の罪を悲しみ、心から苦しんでおられる様子を意味します。神様は、それほどに罪を嫌い、人々の悔い改めを願って下さる。それにも関わらず、人間はその欲望のままに生き続けるため、神様は洪水による裁きを決意し、御自分の正しさを貫こうとされます。

3. 洪水からの救い

神様は洪水による裁きを下すことを良しとされますが、罪に満ちた世界の中に一人の人物を見出します。それがノアでした。彼もまた罪人の一人ではありますが。しかしノアは、神様の所に真の平安があることを信じ、神様に従うことを心から願う人でした。神様はしっかりとノアを見出し、彼に恵みをもたらすのです。その恵みこそが、救いの恵みとなっていくのです。

神様は、ノアに対して箱舟を造るよう命じます。その制作に関し、神様は細部に至るまで指示を出します。神様は、救いの御計画を自ら立ち上げ、その方法や手段を御心のままになされます。ノアは、自分に都合の良い言葉だけでなく、神様の細かい指示を真摯に受け止め、その通りに箱舟を造ります。そして、その姿勢を保ちつつ、家族と全ての生き物の種類と共に舟に乗り込み、ノアとその家族は洪水から救い出されます。18節に「わたしはあなたと契約を立てる」との神様の言葉があります。洪水から救い出された恵みは、神様の側からもたらされた約束によるものです。罪に対する怒りを頭わにする神様ですが、その御方は、罪に染まっている人間に対し深い憐れみをも示され、罪人を裁きの中から救い出す道をも用意して下さるのです。それを知る時、私たちは神様に対して感謝せずにはいられません。（千ヶ崎基）

テキスト 創世記6章1～22節
参照カテキズム 子どもカテキズム問18

(単元のねらい)

本日は、ノアの物語、大洪水と箱舟のお話です。テキストは、創世記第6章から第9章までとなっています。聖書朗読は、説教者のご判断で適宜、選択してください。その意味でも、この展開例は、まさに一つの例に過ぎません。この説教では、神が人間の罪をどれほど真剣に憤っておられるのか、その怒りと刑罰を語ります。しかしまた、神が、罪の刑罰から救い出す道をも定めておられることをも物語ります。主イエス・キリストの十字架と復活による救済の御業を仰がせ、また、仰いでいる場所である教会のすばらしさにも気づかせたいと思います。

「ノアの箱舟より大きく、沈まない教会」

神さまがアダムとエバを創造された後、人間たちは、どのようにすごしていたのでしょうか。聖書には、このように記されています。「常に悪いことばかりを心に思い計っている。」神さまの御目に映る人間の姿は、悪いことばかりを心に思い、それを実行している姿でした。人間はどんどん、神さまに喜ばれるような生き方から離れて行きました。

そしてとうとう、神さまは決心なさいました。人間たちが神さまの御計画に逆らってばかりいて、世界がどんどん、暗くなって行くので、人間ばかりでなく、地上に生きているすべての動物たちを滅ぼすことです。

神さまに創られた最高の作品の人間、神さまから地を治めるようにと作られた人間たちは、神さまからの祝福と責任をぜんぶほっぽりだしていたのです。つまり、神さまに従わない人間は、世界を滅ぼしてしまうことになるというわけですね。

そんな人たちがばかりでしたが、ここに一人神さまに従って歩んでいたノアという人がいました。神さまは、ノアに言いました。「木の箱舟を造りなさい。人間たちが自分勝手に、悪いことばかりするから、大雨を降らせて、生き物を滅ぼしてしまうことにしている。」ノアさんは、神さまに言われたとおりに箱舟を造りました。それは、長さ134メートル、幅22メートル、高さ13メートル、

まるで巨大なビルを横倒しにしたようなものでした。

ノアさんは山の上で、箱舟を造りました。そのことは、どれほど大きな信仰が必要であったことでしょう。これは、先生の想像ですけれど、船を作る人は、海とか、川のほとりでつくります。山の上で船を作る人など、聞いたことがありません。多くの人々は、ノアさんがしていることを馬鹿にしたのではないのでしょうか。

「ノアさん、あなたは、朝から晩まで、木を切ったり、はったりしているけれど、こんなところで何やってるの?」「見ていて、分かりませんか、これは、船です。」「えーっ、大きな家をつくっているのかと思ったら、船だって!?」ノアさん、あなたは変わった人だなあ、どうやって、海まで運ぶ気なんだ、どうやって川まで運ぶ気なんだい。いや、川に運んでみても、あんまり大きすぎて、浮かびやしないぞ。」

ノアさんは、この船を作るのに、どれほどの時間をかけたのでしょうか。はっきりしたことは分かりませんが、もしかすると100年くらいかかったのかもしれない。人々は、そんなノアを見るたびに、馬鹿にしたことでしょう。けれども、ノアさんは、馬鹿にされても、朝から晩まで、働き続けたのです。そして、おそらく、馬鹿にして見に来る人たちに警告したと思います。「皆さん、天

と地を、おつくり下さった神さまを、信じなさい。この神さまを畏れ敬いなさい。神さまは、これまであなたたちに忍耐してこられました。今や、神さまの怒りがあらわされます。世界は大雨によって、大洪水になってしまいます。わたしはそのときのため、救われるために、神さまから命じられたとおり、ここで箱舟を建てているのです。」

ところが、この声に耳を傾ける人はおりませんでした。言えば言うほど、馬鹿にされたと思います。しかし、ついに、神さまが言われたとおり、これまで見たこともない大雨が降り続けました。すると、動物たちが、神さまに導かれるようにして、ノアの造った箱舟のところにやってきて、どんどん入って行くのでした。

40日間も降り続いた雨で世界中が洪水で覆われました。ノアと奥さん、子どもたちとその奥さんたちも乗り込みました。すると神さまが、箱舟の戸を閉じられました。その後150日間、ずっと大地は水に沈んでしまって、箱舟に乗らなかった生き物はすべて死んでしまったのです。

しかしもちろん、神さまはノアさんたちの箱舟を忘れられません。ついに、雨もやみ、水が引いてゆきます。ノアの箱舟は、アララト山のの上に止まりました。

舟から降りたノアは、何よりも神さまに礼拝を捧げました。そこで、神さまは、あらためて、ノアとその家族に仰せになられました。「水が洪水となって、肉なるものをすべて滅ぼすことは決してしない。」そして、その約束の証として、虹を出されました。神さまは空にできるあの虹を通して、この人間に与えてくださった約束を覚えてくださるのです。

さて、神さまは、僕たち私たちに、この箱舟のお話、ノアさんのお話から何を告げてくださるの

でしょうか。

面白い言い方ですが、外国の教会では、みんなが座っている礼拝堂の席のことを「舟」(シップ)と呼ぶことがあります。つまり、教会のことをノアの箱舟になぞらえたわけです。あるいは、大昔の教会、まだ、礼拝堂など建てることもできなかった時代に、教会のシンボルマークの一つとして舟の絵が描かれている壁画などが残っています。舟の帆には、十字架がついているのです。

昔の先輩たちは、神さまのことを信じないで、悪く言う人々に取り囲まれていたのですけれど、教会のなかに入ったことによって、神さまの怒りから救われることを知っていたのです。教会は、建物のことではありません。イエスさまを信じている人々の集いです。イエスさまがお甦りになられた日曜日にここに来ている僕たち私たちは、あのノアの箱舟のように、神さまの裁きや怒りから救い出されているのです。イエスさまの十字架によって、罪を赦され、罪の汚い心を洗われているのです。

またこういうことでもあります。今、みんなと一っしょにこの日曜学校で、ノアの箱舟を造っている最中です。「ねえ、何で、君は、日曜日の朝、教会に行くの？ 寝坊しよう、テレビを観よう、遊びに行こう？」なんて答えるのでしょうか。「ねえ、僕と一緒に教会に行こうよ。神さまのこと、イエスさまのことを知っている？ 教会の先生が教えてくれるよ。」馬鹿にされても、いろいろ言われても、ノアさんのように、日曜学校、教会に来る人は、今、みんな、箱舟を造っているのです。

イエスさまが再び来られる日には、イエスさまを信じていない人たちは、ノアの箱舟に乗らなかった人と同じになってしまいます。だから、伝道しましょう。(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句]

ヘブライ人への手紙12章7節

あなたがたは、これを鍛錬として忍耐しなさい。

神は、あなたがたを子として取り扱っておられます。

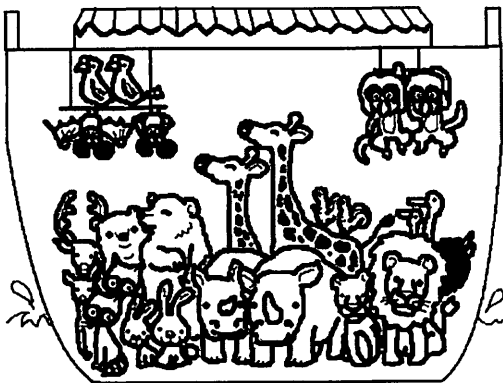
いったい、父から鍛えられない子があるのでしょうか。

〈一週間の準備：これで分級の90%は決まる〉

1) 5/7にお休みの子はいませんでしたか？
 どうしてお休みだったんでしょう。次回出席できるようにお祈りください。できたら、お手紙を差しましょう。2) 5/14の分級で何を話しますか。話す内容を一週間じっくり考えましょう。当然、出席する子供たちの顔を浮かべながら……。教案の準備は祈りではじめましょう。3) 子供たちの成長のために、教会に送り出してくれている家族のみなさんのために祈りましょう。

〈分級では〉

母の日です。分級の時間はお母さんへのカードを作る時間にしても OK ではないでしょうか。でも、大事なことを忘れないでくださいね。お母さんは、みんなのことを本当に、本当に、本当に、いとおしく、大切に思っているということをお子供たちに口に出して伝えてほしいです（ちと取ずかしいですけどね）。そして、神様も、お母さん以上に、みんなを大切に思っていることも忘れず、伝えていただけたらと願っています。

**〈分級のねらい〉**

ノアが箱舟を作っているのを馬鹿にしていた人たちは、実は、私たちではないでしょうか。

神様の言葉を信じて進む……。ただ単純に箱舟の話に終始するのではなく、ノアのお話が、実は自分たちのお話なのだということまでいければと思います。また、神さまは、本当は全人類を滅ぼすこともできたはずなのに、そうなさいませんでした。何故？、神さまはどうしようもない私たちを愛してくださっていることを伝えられたらと願っています。

〈展開例：最初の部分のみ書きます〉

いろいろな生き物が乗っているね。キリンもいるよ、さるもいるね。鳥もいるね。

さて、この生き物がたくさん乗っているものは何かな？、おり、車、いえいえ、これはね、船なんだよ。きりんが乗る船ってどんな船かな？

大きい船だよ。それも、この船は海に浮かんでいなんだ……。山の上にあるんだよ……。変だね。

この船を造ったのはノアさんという人です。何で、ノアさんはこんな船を作らないといけなかったんだろう。

今日のお話は、そのお話です……

世界中に人間がどんどん増えてきました。でもね、その人たちは、神様のことをすっかり忘れて自分勝手に生きていたんだ……。神様はね、そのことをとても悲しまれたんだ。そして、決めたの……。大雨を降らして、滅ぼしてしまおうと。でもね、全部の人を滅ぼすことをしなかったの。ノアさんという人を選んで……

〈折り〉

かみさまは、ノアさんが神様のご命令を受けて、箱舟を作ったことを聞きました。私たちも、神様のいうことをよく聞くことができるようにしてください。

〈これだけは子どもたちに伝えたい！〉

神様は御自分に従おうとされない者たちをおゆるしにならないということ。

神様を選んだ者には、どんな場合でも神様に従って救われる道を備えていてくださること。

〈展開例〉

礼拝で聞いたお話を思い出しましょう。

○アダムとエバの子どもたちは悪いことばかりを続けていました。神様はそんな人間たちをどうしようとお考えになったのでしょうか。

※神様は、御自分に従おうとせず悪いことばかりを続ける人間たちを地球上からいなくしてしまおうとお考えになりました(6:7)。

神様に従おうとしない者に、神様は容赦せずに裁きを下されます。神様は悪いことを知らないふりはできないのです。今の私たちの周りにも、「神様なんか知らないよ」と考えている人たちはたくさんいます。神様はその人たちが神様を信じるようになることを待っておられますが、「そのままでもいいよ」と思っておられるわけではありません。

ノアの箱舟のお話は、私たちと関係のない「神話」ではありません。神様を信じようとする人たちがたくさんいる現代は、まさにノアの洪水の前と同じです。

○それでも、神様はノアには助かる方法(箱舟の作り方)を教えてくださいました。どうして、神様はノアにだけ箱舟の作り方を教えてくださいましたのでしょうか。

※ノアは神様に従う無垢な(汚れのない)人(6:9)でしたが、その前に神様がノアに好意を示された(6:8)と書かれていることに注目しましょう。ノアが正しい人だから神様が助けてくださったのではなく、先に神様が好意を示してくださった(選んでくださった)から、ノアは神様に従うことができたのです。私たちも、決して神様に喜ばれることばかりはできないけれども、神様が私のことを好きでいてくださる(好意を示してくださる)から、こうして教会に来て神様を礼拝できるのです。

神様はノアに助かる方法(箱舟の作り方)をくわしく教えてくださいました(6:14~16)。神様は私たちにも助かる方法(十字架による救い)をこの聖書をとおして教会で(日曜学校で)くわしく教えていてくださるのです。

〈ちいさなお祈り〉

○私たちも神様の言うことがなかなか聞けないけれど、神様が私を好きでいてくださって、こうして教会につれてきてくださることを「ありがとう」とお祈りしましょう。



〈ねらい〉

アダムによって人間の中に入った罪の本性は、私たち人間を罪に赴くようにするが、キリストという箱舟の中にいるならば、神様からの審きを免れ、神様から救いをいただくことが出来ることを確認する。

〈展開例〉

1. ノアの時代の人々は悪いことばかり考えていました。今の人々はどうかと思いますか。
2. ノアが作った箱舟に乗らなかった人と、乗った人の違いはどこにあるでしょうか。
3. イエス様を信じることはノアの箱舟に乗ることと同じです。なぜ、人々はイエス様を信じてないと思いますか。
4. そのような人々をどうしたらよいでしょう。

〈折り〉

神様。わたしたちは罪深いものですが、ノアの箱舟のようなイエス様を送ってくださって感謝します。罪の多いわたしたちですが、イエス様を信じて救われますように、そしてまたイエス様のことを多くの友達に伝えることができるように助けてください。



〈今日のカテキズム〉

カテキズムをする前に……

☆洗礼式の式文から

幼児洗礼の祈禱文に次のような文言がある。

「恵み深い父なる神よ。あなたは昔、不信仰と暴虐に満ちたこの世を洪水をもって清め、信じるノアとその家族を救って洗礼の予表とされました。あなたは今、御子イエス・キリストのあがないによって幼子の罪を赦し、教会の一員として受け入れ、洗礼によってこれを示し確かなものとしてくださったことを感謝いたします。」

☆洗礼とノアの箱船の関係についての聖書箇所

「この箱船に乗り込んだ数人、すなわち八人だけが水の中を通過して救われました。この水で前もって表された洗礼は、今や、イエス・キリストの復活によってあなたがたをも救うのです。洗礼は、肉の汚れを取り除くことではなくて、神に正しい良心を願ひ求めることです。」

(ペトロー3:20b~21)

そこで今日は、洗礼についての問答をします。

ウェストミンスター小教理問答

問94 洗礼とは、何ですか。

答 洗礼とは、ひとつの礼典です。そのとき、父と子と聖霊の御名によって水で洗うことが、私たちがキリストにつき木され、恵みの契約の祝福を分け与えられ、主のものになると約束することを、表わし証印するのです。

ハイデルベルク信仰問答

問69 あなたは聖なる洗礼において、十字架上で唯一の犠牲があなたの益になることを、どのように思い起こしました確信させられるのですか。

答 次のようにです。

キリストがこの外的な水の洗いを制定された時 約束なされたことは、わたしがわたしの魂の汚(けが)れ、すなわち、わたしのすべての罪を、この方の血と霊とによって確実に洗っていただける、ということ。そして、それは日頃体の汚(よご)れを落としているその水で、わたしが外的に洗われるのと同じくらい確実である、ということです。

〈今週の聖書日課〉

日曜日 ペトロー3:20b~21

月曜日 ヘブライ11:7

火曜日 マタイ28:19~20

水曜日 ローマ6:3~4

木曜日 ガラテヤ3:26~27

金曜日 マタイ3:11

土曜日 使徒2:38~39

先生方へ⑥

「……私はもはや自分のなかに留まってはいない。テキストの聞き手になりきるのである。そうなる大切なのは、わたしがいかなるテキストに赴くかということである。」(p. 21)

そしてそのテキストとしてのカテキズムのことをポーレンはこのように表現しています。

「カテキズムはそこで聞き取られたことを、凝縮して〈詩〉〔凝縮物〕にしている。福音のメッセージと聞き手とをひとつに結び合わせる〈凝縮物〉〔詩〕にしているのである。」(pp. 51~52) カテキズムを、聖書を凝縮させた詩だと言うのです。(つづく)

テキスト 創世記11章1～9節

バベルの塔物語は、創世記においてノアの洪水後の世界の民族の全世界への再拡散・再出発の文脈の中に置かれている（創世記10章参照）。そうした神のみ心に反して一つのところに集まり、神の高さまで成り上がろうとした人間のおごりと反逆に対して、主なる神は直ちに介入され、神の審きと正しい導きとをなされる。こうして再び神の救いのご計画は、アブラハムの登場まで密やかではあるが前進を始めていく。

〈シニアルの地での塔建設〉

バベルの塔が建てられた町はシニアルの地の平原であったと、11章2節で述べられている。この「シニアルの地」とは、後に古バビロニア帝国の興った、いわゆるユーフラテス河畔のことであろう（創世記10:10）。文明が高度に発達するためには、平和（ことばが一つ）と平地と水のほとりが必要である。シニアルの地とは、そうした人間の理想が実現されうる条件の整ったところであった。そしてこの町を築いた人々は、ハムの子孫の内の「ニムロド」であったと10章9節に記されている。この「ニムロド」は、元の意味では「狩猟者」をさすが、ここでは大きな権力を持った守護者として受け止めた方が適切である。彼らは、高度な科学技術を併せて保持していた（創世記11:3）。これまでの石材のように山地の石切場を持たなくても、レンガはどこであっても調達可能であったし、アスファルトはレンガの強度を増すのに非常に有効なものであった。これら科学技術（土木技術）の粋を集めて建られたのが、バベルの塔であったのである。これは又単に立派な高層建築物であるだけでなく、宗教的な（異教）施設を兼ねたものではなかったか。実際バビロニア遺跡から発見されているジグラットは、月の女神を祭る建物であったとされている。権力者がその権力を保持するためには、どうしても大きな力と、それを権威づけるところの宗教が必要であったからである。まさに真の神のみを崇める宗教に敵対

する偽宗教の出現に他ならない。

〈言葉の攪乱による塔建設の中断〉

これら一切の人間の悪しき企てをつぶさにごらんになっておられた主なる神は、大いなる憤りにより直ちにこの出来事に介入され、一つであった言葉を攪乱させ互に通じなく、反目するようにしむけ、バベルの塔の建設は中断される。この神の審きによるところの言葉の攪乱こそが、「バベル」という言葉の意味として示されている（創世記11:9）。これは、全世界にあるさまざまな言語の多様性を示すと共に、そこに言葉の壁・文化の相違が人間の罪深さ、神に成り上がろうとするおごりと一致への歯止めとして神が置かれたのであり、神の裁きであると同時に又神の愛のご配剤・良き導きをも示すのである。こうして再び、人類は世界中へと散らされていき、神のご意志に服することになる。真の神だけが持たれるご主権と、私たちの罪深さを知り抜かれる深い憐れみこそが世界の真の希望となるのである。

〈ペンテコステとバベルの塔〉

よく聖霊降臨の出来事が、このバベルの塔物語への神による救済のみ業であると言われる。しかしあのペンテコステの日の使徒ペトロの説教のどこにもそのことへの言及はないし、又ペンテコステの言葉の奇跡は一回限りのものであってそれは繰り返されることはなかった。そういう点で、短絡的にバベルの塔物語の成就としてみなす事は難しい。けれども神の救いのご計画全体からすると、キリストの救いをもたらす神のみ言葉による統一は、大きくバベルの塔への救済としてみなすことも出来なくはない。私たちを真の神の民とならしめるのは、主イエス・キリストによる唯一の救いのみ業と神のみ言葉の権威とに私たちがひれ伏すことを通してだけである。ここに神の民が何に拠り所を置き、又何を目指して歩まなければならないかが明らかにされてくると言える。（山下朋彦）

テキスト 創世記11章1～9節
参照カテキズム 子どもカテキズム問18

〔単元のねらい〕

サタンはアダムとエバに、あなたが神のようになれると誘惑した。この誘惑は昔も今も、サタンが人を神から引き離そうとする時の誘惑であり続けている。「バベルの塔」の物語は、洪水のさばきを経てなお人はみずからが神になろうとする思い上がり根強く持ち続けたことを語っている。しかし、人のそのようなくわだてを神はもちろんさばきたもう。人に備えられた知恵や力は、神の栄光をあらわすためのものである。また、人が一致し協力しあうというときにも、それが神なき一致であればまことの一致ではない。これらのことをこの物語から学び取りたい。

「イエスさまにあってひとつとなる」

先に、アダムとエバがサタンの誘惑を受けて罪を犯したことを学びました。そのときにサタンがアダムとエバをどういう言葉で神さまから引き離そうとしたか、覚えていますか。

そう、あなたが神になれる、と言ったのでしたね。アダムとエバはこの言葉に誘われて、木の実を食べて神さまのみ言葉に背きました。

そして、このアダムの罪を全人類が、私たちのひとりひとりも、生まれながらに受け継いでいます。私たちが神さまになりたいのです。私たちは神さまに造られた作品なのに、作者になりたいのです。これはさかさまです。おかしいことです。でも、ほんとうなのです。

さて、そういう思い上がりをもったまま、人間はだんだん知恵や力をつけていきました。そして、その知恵や力を見せびらかそうとして、力をあわせてひとつの巨大な塔をつくらうとしたのです。「バベルの塔」と呼ばれる塔です。

ところで注意をしなければならぬのは、人間たちがその塔を天にまで届けようとしたことです。ただ高い塔をつくって、それで満足したというのではなかったのです。天とは神さまの住まいです。そこにまで届く塔をつくりあげるとは、神さまと力くらべをしようということです。もう私たちは神さまに負けないだけの力と知恵を身につけた、だから神さまを離れても、自分たちだけで

も、こんなにすばらしいことができるのだ——そういう思いがそこにはあらわれているのです。

けれども、このようなくわだてを神さまはもちろんほうっておかれません。人々が来る日も来る日も汗を流して塔を築いているその建築現場に、神さまはおりてこられます。おりてこられた、というところに注意をしてください。塔は地上から見れば、もうずいぶん高いところにまで届いたように見えました。けれども天におられる神さまのおん目からごらんになるなら、わざわざおりてこられなければ見えないような小さな小さな建物でしかなかったのです。神さまの知恵や力に挑戦するなどということは、ほんとうにおろかなくわだてでしかなかったのです。

神さまはこの工事をやめさせられます。どのようにしてでしょうか。言葉を乱して、通じなくさせることによってです。言葉が通じなくなってしまうとは、工事を進めようがありません。こうして人々は塔をそこに残して、ちりちりに散っていくほかはなかったのです。

人間は知恵や力を持っています。皆さんのひとりひとりにもそれがあるでしょう。けれども覚えておいてほしいことは、それは人間が自分で得たものではなく、神さまが備えてくださったものということです。何のためにでしょうか。神さまの栄光をあらわすためにです。神さまはお造りに

なったどの獣や鳥よりもすばらしく人間をお造りになりました。人間だけのご自身のみかたちに似せてお造りになりました。知恵や力をも与えてくださいました。

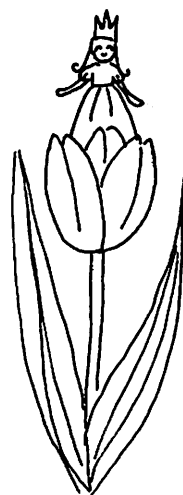
それは、神さまの代理として、かみさまのみこころに従って、すべてのつくられたものを治め、管理するという重大なつとめを人間におゆだねになるということがあったからこそです。そのことを忘れ、神さまがくださったものを自分の力で得たかのように思いちがえるとき、人間はバベルの塔を築きます。バベルの塔は人間の罪の象徴です。自分の栄光でなく、神さまの栄光のために知恵と力を用いるとき、はじめて私たちは平和に、幸

せに生きることができるのです。

バベルの塔を築いたとき、人々はたがいに力を合わせ、思いをひとつにしたことでしょう。一致すること、協力することそのものはすばらしいことです。でも、人間は悪いこと、たとえば戦争をするときなどもひとつにまとまります。神さまなしの一致と協力は、かならずしも平和や幸せを築くことにはならないのです。

イエスさまこそ、まことの一致と平和のいしずえであることを覚えましょう。イエスさまにあってひとつとなり、神さまのみ栄えのためにともに生きること——それが私たちの人生の目的なのです。
(木下裕也)

[今週の暗唱聖句] コリントの信徒への手紙二10章17節
誇る者は主を誇れ。



〈一週間の準備：これで分級の90%は決まる〉

1) 5/14にお休みの子はどのようにお休みだったんでしょう。次回出席できるようお祈りください。できたら、お手紙をだしましょう。2) 5/21の分級で何を話しますか。話す内容を一週間じっくり考えましょう。当然、出席する子供たちの顔を浮かべながら……、教案の準備は折りではじめましょう。3) 子供たちの成長のために、教会に送り出してくれている家族のみなさんのために祈りましょう。

〈分級では〉

天候もいい時期です。思い切って環境を変えて、教会に庭があったら、外で、シートをしいて話すのもいいと思います。

私にとってバベルの塔のお話は、子供のころ大好きだったアニメ（パビル2世）のイメージが強いため、いつも、妙な違和感を持って話すところです。これを逆手にとってほど、正直に子供たちにアニメの話と自分の思いを話し、主題を歌ってみたら、子供たちがのってきて、その後の本題に

すっと入ってきてくれた経験をしたことがあります。意外なところにも子供たちを神さまに向けるチャンスがあるのだと思いました。ちょっとリスクー??な方法ですが、同じ年代の方は試してみても???（積極的に勧めはしませんが）

〈分級のねらい〉

アダムとエバ、ノアの洪水、そして今回のバベルの塔、そして私たち人間はなんと傲慢で、神さまを恐れない存在なのでしょう。そのような思いや計画は、ことごとく神さまを悲しませませし成功しません。でも、でも、そんなどうしようもない私たちを神さまはそれでも愛し、導いてくださいます。そんなダメダメ人間と、神さまの愛を話せたらと願っています。

〈折り〉

神さま、私たちは、すっかり神さまのことを忘れて、自分勝手なことをします。神様のことを決してわすれることがありませんように。

工作例

主 題：わたしたちは人間です

目 的：バベルの塔は“神さまのようになれる”という人間のおごりから作り出されたものでした。私たちは神さまによって創られた人間でしかないということ、神さまにかたどられても神さまではないということを知りましょう。

準備するもの：色紙、白紙（使用済みカレンダー等大きな紙でもよい）、テープ、のり、はさみ、くれよん、色鉛筆（絵を描く道具ならなんでもよい）

展開例：

- ①グループを作り（人数が少なければ一人一人でも構わない）、グループごとに犬（動物等生き物なら何でもよい）の足、腕、手、胴体、頭と紙で作るように指示します。
- ②創ったものを紙に貼り付けていき、みんなでかたちにしていきます。
- ③全部貼ったら、張り紙を立てかけて、みんなにこの人に向かって「歩け」とか「おすわり」とか生き物として動けるように命令してみるようにいいます。もしくはみんなが作ったけど、命令したら生きるようになった？ と直接的に問いかけるのもよいでしょう。
- ④最後に、人間はどんなにうまく生き物に似せて作っても生きるものとはならない。天地創造のときの神さまの創造の技を思いださせながら、人間も神さまに創られたものにすぎないということ。神さまではないということ語り聞かせましょう。

〈子どもたちに伝えたいこと〉

人間たちが塔を作ろうとしたのは、人間があいかわらず、神様に従うよりも、自分が神様みたいになりたかった（神様のおられる天に届こうとして）から。それは今も私たちの中に根強くあること。

〈展開例〉

礼拝で聞いたお話を思い出しましょう。

○東の方から来た人々は何のために「バベルの塔」を作ろうと考えたのでしょうか。

※人々は、塔を天までとどくように作ろうとしました（3:4）。天は神様のいらっしゃる場所だから、そこまで行って神様みたいになろうと考えたのです（有名になろう）。「神様みたいになりたい」というのは前にもありましたね。アダムとエバも同じように思って悪魔の誘惑にのってしまったのです。

「神様みたいになりたい」という思いは、アダムとエバが持ってから、ノアの洪水があろうと何があろうと、人の心から消えないのです。そしてその思いは、私の心の中にもしっかりと残っています。神様の言いつけを守るよりは、自分の考えで好きなようにしていきたいのがもともとの私なのです。

神様に従うよりも自分が神様みたいになりたい

という「罪」の根本にあるものは、何度でも繰り返し語り語っておきたいと思います。「罪＝悪いこと」ではなく「罪＝神様に従おうとしないこと」ということを、小さいときから繰り返し聞くことによって、大きくなるに従って自分の中に「罪」が確実にあることに気がつく基になると思います。

○神様は塔を作っていた人々をどうなさいましたか。

※神様はそれまで一つの言葉を使っていた人々にたくさん（今の日本語や英語や中国語のように）言葉を与えられ、人々を世界中に散らされました（11:7）。

神様が人々をすぐに罰することなく世界中に散らされたのは、人々が世界中で「神様のされたこと」を話し伝えるようになるためでした。

〈ちいさなお祈り〉

○私たちの中には、神様の言う事を聞くよりも、自分が神様みたいになって好きなようにしたいという「罪」が確かにあります。それでも、神様は私を日曜学校につれてきて、私に罪があることを教えてくださって、神様の方に向かっていくことができるようにして下さることに「ありがとう」とお祈りしましょう。



〈ねらい〉

人は神の創造物であり、人が神になることは出来なく、むしろ人が神のようになろうとするとともに、人間の罪深さがあることを認識し、すべてのことを、イエス様にお委ねすることができるようにする。

〈展開例〉

1. 自分が頑張れば出来ることと、頑張っても出来ないことが何があるのか話し合ひましょう。
2. 自分が頑張っても出来ないことの中で他の人には出きると言うことがありますか。
3. 逆に自分も出来ないけれども、他の人にも出来ないと思うことがありますか。
4. なぜ、他の人にも出来ないと思いますか。
5. 罪人を救うことは、人が出来ることではありません。そのために神様が送ってくださった方がイエス様です。わたしたちの救いは自分どころか頑張っても出来ることではないことですが、イエス様を信じれば、神様はイエス様によって私たちが救ってくださると約束しました。私たちはそのイエス様を信じて救いを求めたいと思います。

〈祈り〉

私たちが造られた神様。私たちは神様に似せて造られましたが、しかし神様ではないので、出来ないことが沢山あります。どうか、私たちが自分の弱さを覚えて、へりくだって神様の助けを求めることが出来るように、私たちを導いてください。



〈今日のカテキズム〉

カテキズムをする前に……

☆「神さまなしの一致と協力は、必ずしも平和や幸せを築くことにはならない、イエスさまにあってひとつとなり、神さまのみ栄えのためにも生きること？ それが私たちの人生の目的なのです」との説教展開から、人の主な目的を確認します。

ウェストミンスター小教理問答

問1 人のおもな目的は、何ですか。

答 人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことです。

問2 神は、私たちに神の栄光をあらわし神を喜ぶ道を教えるため、どんな基準を授けてくださいますか。

答 旧新約聖書にある神の御言葉だけが、私たちに神の栄光をあらわし神を喜ぶ道を教える、ただ一つの基準です。

☆人のおもな目的を教えるただ一つの基準である聖書について、ウェストミンスター信仰告白では、バベルの塔の出来事によってもたらされた多言語の状況からこれを回復すべきことが告白されています。

ウェストミンスター信仰告白第1章

八 (昔の神の民の国語であった) ヘブル語の旧約聖書と、(しるされた当時、最も一般的に諸国民に知られていた) ギリシャ語の新約聖書とは、神によって直接靈感され、神の独特な配慮と摂理によって、あらゆる時代に純粹に保たれたので、确实である。それで、すべての宗教論争において、教会は最終的にはこれらに訴えるべきである。しかしこれらの原語は、聖書に近づく権利と興味をもち、神を恐れつつ聖書を読みまた探究するよう命じられているすべての神の民に知られてはいないから、聖書は、神のみ言葉がすべての者に豊かに内住して、

彼らがみ心にかなう方法で神を礼拝し、聖書の忍耐と慰めによって希望をもつために、聖書が接するあらゆる国民の言語に翻訳されなければならない。

〈今週の聖書日課〉

日曜日 コリントー10:31

月曜日 ローマ11:36

火曜日 詩編73:25~28

水曜日 テモテニ3:16

木曜日 コロサイ3:16

金曜日 コリントー14:6~19

土曜日 コリントー14:20~28

先生方へ⑦

そして、ポーレンは暗記によるカテキズムの学びは、私たちに慰めてくださるという聖霊の働きを助ける奉仕をする、とも言います。

「聖霊がわれわれに想起を促すことによる。われわれがイエスの語られたことを忘れていたのに、その忘却の境地から呼び出してくださるのである。(中略) 聖霊がわれわれを慰めてくださるのは、聖霊ご自身が、われわれのうちにおいて、読んだ言葉をなぞりつつ口にしてくださり、学んだ言葉を引用してくださる、という仕方で、私を慰めてくださるのである。私が聞いた言葉を、まるでこだまのように、何度でも聞かせてくださる。これが慰めの第一の道である。聖霊は、こころのうちにおいて、私に語りかけてくださるのである。」
(p.68) (つづく)

テキスト 創世記12章1～9節

信仰の父、神の友と呼ばれた族長アブラハムの登場である。これまでは人間の墮落により急速に増大する罪への主なる神の審きと防御策とが述べられてきた。しかしこのアブラハムの召命から、神の救いのご計画である恵みの契約がはっきりとした姿をもって示されてくる。即ち、約束のメシアはアブラハムの子孫として生まれられ、全世界の選びの民がイエス・キリストによって召し集められるという約束である。

〈アブラハムに臨んだ神の召し〉

生まれ故郷ウルを父テラと共に発ってハランにいたアブラハムに、神の召しが突如臨む(1)。その神の召しとは、約束の地カナンへと旅立つようにとの神からの命令であった。この神の召しに従ってアブラハムは、彼の家族と郎党・全財産を携えて出発した。彼が75歳の時である(4)。ここにはアブラハムのそれまでの歩み、幼少も青年時代も愛妻サライとの結婚も全く触れられていない。いきなりこの神の召命をもって彼の生涯が述べられていく。この神による召しこそ、彼の生涯を一変させ、決定的な人生の意味と使命とを与えるものとなった。アブラハムの信仰の生涯、それはただひたすらにこの神の召しへの従順であった。彼の生涯は、もはや彼自身のものではなく、神の救いのご計画の選びの器として用いられることとなる。もちろん彼の生涯に罪・過ちがなかったのではない。けれどもこの神の召しが彼の人生を神に向けて規定し、導くものとなったことは確かである。イエス・キリストとの出会いが、その人の生涯を一変させ、決定的な人生の意味と神からの使命をもたらすのである。

〈祭壇を築き、主の名を呼ぶアブラハム〉

いったいハランからカナンまでの道のりはどれぐらいあるであろうか。何千kmにも及ぶ長旅であるにもかかわらず、その途中は全て省かれている。ただちにアブラハムと家族とはカナンの地へと到

着する(5)。何故なら、そこが約束の地であったからである。彼は、そこで再び神の約束の言葉を聞き、確認させられる(7)。しかし約束の地カナンに着きながら、アブラハムはこの地方を、シケム、ベテルとアイの間、ネゲブとあちらこちら転々とするのである。それらいずれにおいても彼は、祭壇を築き、主の御名を呼んだ(7,8)。このアブラハムが築いた祭壇にはどっしりとした重い石を用いたとのことである。移動の為に用いた天幕が組み立て式の簡易なものであったのに対し、祭壇のそれは動かない確かな石を用いた。そこにアブラハムが人生の土台を何に置いていたのかが明白に示される。彼は、主を礼拝する事を人生の土台とした。アブラハムは、そうして揺るがない神と神の国(都)とを土台として彼の生涯を立てていった(ヘブライ11:16)。

〈神の約束をただ見つめて〉

神の一方的な召しによって導かれ、神への礼拝を土台としたアブラハムの生涯、そのアブラハムがずっと見離さなかったものとは何か。それは、神の約束の実現であった(2,3)。この神の約束は、アブラハム契約と呼ばれるものである。その内容は、一つは約束の地カナンを与えるということ、二つ目は約束の子孫を増し加えること、三つ目が祝福の基となる、というものである。この約束は、どれもアブラハムの地上の生涯においては、本当に小さく・実現不可能と思われるものばかりであった。土地の約束はただ妻サラの墓地を得ただけであり、約束の子孫についてもイサクが与えられたのみであり、更に祝福の基に至ってははるか先のことであった。しかしアブラハムは、現実に目にするところがどんなにわずかのものであっても、その約束を神が確かに実現して下さることを信じて疑わなかったのである。この神の約束を信じる信仰を神はよみして下さったのである(ヨハネ8:56、ローマ4:18-22)。 (山下朋彦)

テキスト 創世記12章1～9節
 参照カテキズム 子どもカテキズム問14、34、35

〔単元のねらい〕

アブラハムの物語を三回に分けて学んでまいります。ヘブライ人へ手紙第11章を是非お読みください。彼は、キリスト者の原型、また模範です。その足跡をたどるとき、おのずと主イエスの足跡をもたどることになります。信仰の父と称されるアブラハムの物語から、子どもたちに伝えるべきことは山ほどあるでしょう。ここでは、信仰とは、自分の外にでること。自己中心の縄目から解き放たれ、神へと解き放たれること。そこでこそ、自由に、本当に人間らしく生きてゆくことができることを学びます。また、信じて生きる時、自分が祝福されるばかりではなく、世界を、まわりのお友達をも祝福することができることを教え、励ましたいと思います。子どもたちが友達を日曜学校に誘い、連れてくる、それこそ、日曜学校伝道の要です。

「天国をめざして出発だ！」

今日からアブラハムという人について学んで、神さまに礼拝を捧げてまいります。

みんなのなかで、ザアカイさんのお話を知っているお友達もいるでしょう。イエスさまに救っていただいた徴税人、背の低いあのザアカイさんです。イエスさまは、ザアカイさんがイエスさまを信じたとき、こう仰せになりました。「今日、救いがこの家に来ました。ザアカイも、アブラハムの子なのですからね。」つまり、イエスさまを信じている僕たち私たちも、アブラハムの子どもたちというわけです。それなら、僕たちの信仰のお父さん、僕たち私たちの信仰のお手本のアブラハムさんっていったいどんな人なのでしょう。

今からおよそ4000年の昔のことです。アブラハムさんは、カルデアのウルというところに住んでいました。今のイラクという国がある場所です。ユーフラテス川という川のほとりにある町がアブラハムさんの生まれ故郷でした。この町では、皆が月を神さまとして拝んでいました。今でいうと、星占いのようなものです。

そのような町にアブラハムさんは家族と暮らしていました。ところが、ある日のことです。神さまはアブラハムに呼びかけて言われました。「あなたは生まれ故郷、父の家を離れて、わたしが示

す地に行きなさい。」神さまはアブラハムさんには何の相談もなしに、一方的に、生まれ故郷を離れなさい、そこから出なさいと、お命じになりました。そのとき、アブラハムさんは75歳です。もう、決して若くはありません。

けれども、今日の暗唱聖句のように、主の言葉に従って旅立ちました。

どうして、神さまは、アブラハムさんにお父さんの家、生まれ故郷を離れなさい、その外に出てゆきなさいと命じられたのでしょうか。それは、おそらく、月を神さまと拝んでいるような場所、偶像礼拝といいますが、そんな神さまが悲しまれ、憤られる町から離れて、天と地とを創造された真の神さまを礼拝するように、そのような民を新しくおつくりになられるためであったと思います。月を拝むなんて、おかしいと思いませんか。でも、昔は、月には、ウサギがいてお餅をついているなんて、本気で信じていた時代が、日本でもありました。お月見団子を、月にお供えするなんて、見たことのあるお友達もいるかもしれません。お月見はしないかもしれませんが、「古いのおばさん」を、テレビで見たことがあるお友達もいるかもしれません。自分は何でも知っているようなフリをして、「ズバリ言うわよ」だなんて、おかしいこ

とをテレビではおもしろがってやっています。でも、そんなことにだまされたり、脅されたりしてはいけません。

でも、そんなテレビを観なければそれでよいのでしょうか。星占いなんてばかばかしいと、しなければそれで、神さまに喜んでいただけるのでしょうか。そうではありません。肝心なことがあります。それは、神さまを信じることです。神さまを信じ続け、神さまに従い続けることです。たとえば、僕たち私たちの住んでいる町には、教会はとても少ないです。イエスさまを信じていない人たちがばかりです。学校のお友達なかで、イエスさまを信じているのは、一人だけのお友達もいるはずですが。だったら、そんな学校には行かなくても良いのでしょうか。違います。

神さまがアブラハムさんを、生まれ故郷から離れなさいとおっしゃったのは、神さまを信じない心の外に出てきなさい。自分のことばかりを中心に考える心の外に出なさいということです。つまり、自分が一番、自分が絶対、自分が、自分がという自己中心の心の外に飛び出て、神さまを信じて従うということです。アブラハムさんがしたのは、そのことでした。そして、アブラハムさんは、神さまの言われたとおり、外にでたのです。旅立ったのです。

そのときは、どこに行くのか分かりませんでした。でも、分かっていたのは、神さまに言われたとおりにすること、神さまが言われた外にでること、神さまがおられるところを目指して旅立つことでした。

これは、僕たち私たちも、まったく同じです。イエスさまを信じる僕たち私たちは、天国を目指して旅をしているのです。日曜学校の先生たちと、日曜学校のお友達と、教会の人たちと天国を目指して歩いているのです。教会はこの場所に建って

います。でも、教会は、いつでも、天国に向かって進んでいるのです。神さまとイエスさまがおられるところに向かって一歩一歩進んでいるのです。アブラハムさんと同じように、旅立っているわけです。

さて、そのように天国を目指して前進するアブラハムさんは、神さまからすばらしい約束も与えられています。「わたしはあなたを祝福し、あなたの名を高める、祝福の源になるように。～地上の氏族はすべて、あなたによって祝福に入る。」

つまり地球の上に住んでいる人間は、アブラハムさんによって神さまの祝福を受けるというすばらしい約束です。神さまの祝福とは、何でしょうか。それは、神さまの救いを受けて神さまの子どもとされるということです。それは、本当でしょうか？ 本当です。なぜなら、アブラハムの子孫としてイエスさまがお生まれになりました。イエスさまによってすべての人が祝福を受けるからです。イエスさまを信じている僕たち私たちは、アブラハムの子どもたちというわけです。

そして、このアブラハムさんに与えられた祝福は、アブラハムの子どもたちにも与えられているのです。つまり、僕たち私たちも自分中心の悪い心の外に出て、神さま、イエスさまを信じるなら、あなたを通して神さまの祝福があなただけではなく、あなたの愛する人、お父さん、お母さん、兄弟姉妹、お友達にも及ぶのです。逆に、あなたがイエスさまを信じるのをやめて、自分の小さな世界のなかに閉じこもってしまえば、神さまの祝福があなたのまわりに及ばないのです。僕たち私たちは、アブラハムの子です。世界中に神さまの祝福、救いを広げることができるのです。皆で一緒に、アブラハムさんのように、神さまに向かって、天国に向かって、今週も出発しましょう。

(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] 創世記12章4節前半

アブラムは、主の言葉に従って旅立った。ロトも共に行った。

〈一週間の準備：これで分級の90%は決まる〉

1) 5/21の礼拝では、休みの生徒さんはいませんでしたか？ どうしてお休みだったんでしょう。次回出席できるようお祈りください。できたら、お手紙をだしましょう。2) 5/28の分級で何を話しますか。話す内容を一週間じっくり考えましょう。当然、出席する子供たちの顔を浮かべながら……、教案の準備は祈りではじめましょう。3) 子供たちの成長のために、教会に送り出してくれている家族のみなさんのために祈りましょう。



〈分級では〉

新しいクラスが始まって2ヶ月、何人も生徒さんのいるクラスでは、微妙な人間関係が生まれていませんか?? 仲良しグループができて、ちょっと周りの人たちどうまくいかないお子さんはいませんか?? 先生が声をかけたり、話を聞いてあげたりしてくださいね。この時期になると、休みがちのお子さんも出てきます。手紙、必要に応じて、ご家族との連絡（無理強いしたりしないように注意）をしましょう。もちろん子供のためにお祈りすることをお忘れなく。また、休みがちなお子さんを軽率に注意したり、毎回出席する子供と比較したりする先生を時々見受けます。軽率なこのような行為は、子供を教会から遠ざけてしまいます。充分注意の上にも注意してください。

〈分級のねらい〉

神様の言われることにしたがって旅に出たアブラハムのすごさが伝わればと願っています。私たちは、本当にこのような決断ができるでしょうか。自分の弱さを正直に語ると、意外と子供たちによく意図が伝わるように思います。

〈展開例：最初の部分のみ書きます〉

今日のお話はね、アブラハムという人の話をするよ。

アブラハムさんはね、神様のことをころから信じている人でした。そのアブラハムにね。神様が言うんです。“今住んでいる場所を引っ越してください。そして、私（神様）が示す土地に行きなさい”ってね。みんなは引っ越したことがあるかな??、みんなには幼稚園に友達たくさんいるでしょう。どんな友達がいますか??

（子供たち、友達の名前いっぱい言う……）

〇〇ちゃんとお別れするのどうかな??、全然知らないところに行くのは不安だよ。心配だよ。もうひとつ、アブラハムさんは大変なことがあるんだ。それはね。アブラハムさんがものすごいおじいさんだったということなんだ。みんなのおじいちゃんよりもっと年をとっているかもしれないよ。でもね、ほらほら見てみて、うれしそうじゃない。そうなんだ。アブラハムさんはね。神様のいうことに“ハイ”とってみことばにしたがって旅をはじめたんだ……。

〈祈り〉

神様、今日は、アブラハムさんのお話を聞きました。アブラハムさんは神様のいうことにしたがって旅に出発しました。私たちも、神様に従っていくことができますように、そのために神様にいつもお祈りできますように。

〈子どもたちに伝えたいこと〉

アブラムは、自分の側の理由はなくとも、ただ「主の言葉だから」したがったということ。

アブラムは神様のしてくださることは自分にとって良いことのはずだと考えたが、そのことは私たちにも約束されているということ。

〈展開例〉

礼拝で聞いたお話を思い出しましょう。

○アブラムはお父さんたちといっしょに住んでいたところをはなれて、カナン地方というところへ行きました。アブラムが出発したきっかけは何だったでしょうか。

※アブラムが出発したのは、神様に「行きなさい」と言われたからでした(12:1)。

「命令されたから出発する」ということは、現代でもサラリーマンの転勤などで良くあることです。子どもたちの中にも、お父さんの転勤で引っ越したことがあるという子がいるかもしれません。しかし、アブラムの物語は、新幹線も自動車も何もない、簡単に移動することのできない四千年前のことであるということをしっかりと確認してください。そして、そのころはインターネットもTVも地図も何も無いので、「神様が示す地」というのがどんなところなのか、アブラムはまったく見当をつけることもできなかったはずで、それでもアブラムは神様に口

答えもせずに出発しました。

○アブラムが神様の言葉に従ったのは、どうしてだったと思いますか。

※神様はアブラムに「あなたを祝福する」(12:2~3)と約束してくださいました。アブラムはこの天地を造ったほどの力のある神様の言葉に疑うことなど何もないと考えたのです。アブラムは神様が自分にしてくださることは全てが自分にとって良いことのはずだと考えました。そして、それは今の私たちにも約束されています(ローマ8:28)。

アダムの罪のために、神様に従うよりも自分が神様みたいになりたいと思っている私たちにとって、神様のところである教会に来るということは、自分だけの力ではできません。神様が「行きなさい」と声をかけてくださったから、私たちに神様の力が働いて教会に来ることができるのです。

〈ちいさなお祈り〉

○アブラムは神様に声をかけていただいて、神様が祝福を約束されたカナンの地に出発することができました。同じ神様の声が、私たちを教会につれてきてくださっているということを「ありがとう」と感謝しましょう。



〈ねらい〉

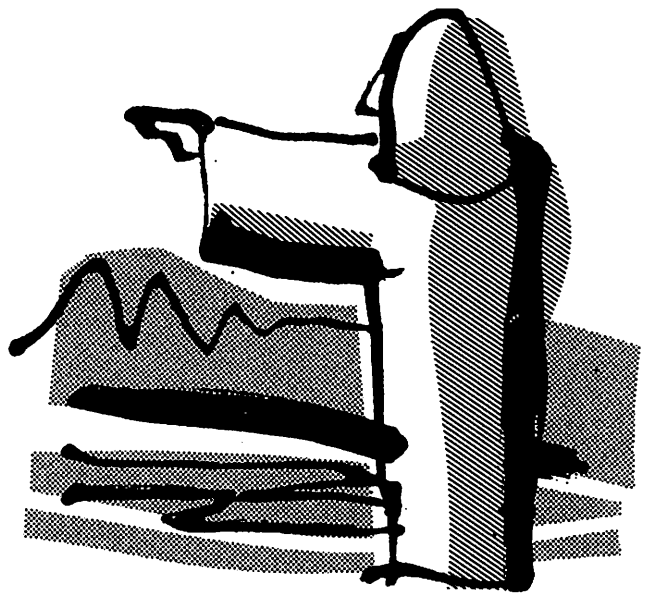
アブラハムを通して、信仰とは、自分の外に出ること、自己中心の縄目から解き放たれ、神へと解き放たれることであること、そのような人に神様の豊かな祝福が約束されていることを確認する。

〈展開例〉

1. 聖書の付録地図（1聖書の古代世界）から、ハラとカナン地方を探し、どのぐらい距離であるのか測って見ましょう。
2. 引越しの経験がある人、特に長距離の引越しを経験した人々を中心に、住んでいたところを離れる気持などを分かち合ひましょう
3. 神様に従うことは、今までの自己中心的な生活から、神中心的な生活に引越すことです。そうすると、どんな問題が生じるか考えてみましょう。
4. 神様はそのようなすべての問題、悩みを解決して下さいます。そして、神の子となる素晴らしい祝福を与えて下さいます。だから、まずは、決断をしてそこから出ることです。自分も、そして友達も自己中心の生活から、神様を中心とした生活に移ることが出来るように祈りましょう。

〈祈り〉

神様。わたしたちは今まで自分のために、自分を中心として考えをもって生活してきました。しかし、今、イエス・キリストを信じて、神様を自分の心に受け入れ、神様を心の真ん中に迎え入れることができるように、そして神様の子となる喜びをいただくことができるようにしてください。



〈今日のカテキズム〉

カテキズムをする前に……

☆主の言葉に従って旅立ったアブラハムは信仰者の父といわれます。わたしたちがいつも祈る主の祈りの第三の祈願「みこころの天になるごとく、地にもなさせたまえ」が祈り願っていることについての問答が、アブラハムの信仰を思い起こさせてくれますので、今日はこの問答をします。

ハイデルベルク信仰問答

問124 第三の願いは何ですか。

答 「みこころの天になるごとく、地にもなさせたまえ」です。
すなわち、わたしたちやすべての人々が、自分自身の思いを捨て去り、唯一正しいあなたの御心に、何一つ言い逆らうことなく聞き従えるようにしてください、そして、一人一人が自分の務めと召命とを、天の御使いのように喜んで忠実に果たせるようにしてください、ということです。

ウェストミンスター小教理問答

問103 第三の祈願では、私たちは何を祈り求めるのですか。

答 (「みこころの天になるごとく、地にもなさせたまえ」という) 第三の祈願で私たちが祈る事は、神が恵みによって私たちにも、天における御使いたちのように、万事につけて神の御意志を知り・従い・服することができる力と意志とを、授けてくださるよう、ということです。

〈今週の聖書日課〉

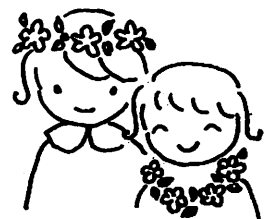
日曜日 ローマ12:1~2
月曜日 テトス2:11~13
火曜日 エフェソ6:5~9
水曜日 詩編103:20~22
木曜日 詩編67編
金曜日 マタイ26:39
土曜日 ヨブ1:21

先生方へ⑧

ポーレンはまたこうも言っています。「(聖霊は) あなたの感情が、まだ聖霊の働きに気づいていなくても、働かれる。あなたが、カテキズムが先に語ってくれることを、口真似して語るとき、あなたにダンスをしようと促し、手を与えてくださる。応えて、立つたらよい。その導きに身を委ねたらよい。聖霊は現実に働くものとなる。」(p. 91)

実際に教理問答を学ぶ状況を思い起こしてみると、指導者が問を読み、教わる者が声を合わせて答を読むことが多いと思います。そして、ポーレンが言うようなカテキズムの効用はそこでは見られず(意識されず)、多くの場合、形式的に終わってしまっていることを、反省を込めて指摘したいと思います。

では、問答という言語活動を通して、神様と生徒たちが、そして教師と生徒たちが本当に響き合う関係となるため、魂に話し相手を与えるものとするためには、どのようにこれを実践したらよいでしょうか。(つづく)



テキスト 使徒言行録2章1～13節

「五旬祭」とは、レビ記23章15～21節に基づく収穫祭で、ギリシャ語でペンテコステ（第五十日の意）といいます。過越祭の翌日の除酵祭（レビ23：6）から数えて七週目のことです。この日は、小麦の初穂をささげる感謝の日で、過越祭、仮庵祭とともに、ユダヤ教三大祭りの一つで、ユダヤ人の成人男子は、この日はエルサレム神殿に巡礼することが義務付けられていました。

イエス・キリストの証人となるために、弟子達はイエスの約束に従って、「一同が一つになって集まって」いました。「一同」の数は不明ですが、十一弟子と「婦人たちやイエスの母マリア、またイエスの兄弟たち」（1：14）であり、彼らは「心を合わせて熱心に祈って」聖霊の降臨を待ちました。すると突然「朝の九時」（15）に激しい風が吹いてくるような音が点から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いたのです。イエスは、「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる」（1：8）と弟子達に約束しておられました。この出来事によって「五旬祭」と「聖霊降臨」とが結び付いたのです。

聖霊は、二つのしるしを伴って降られました。一つは「風」、もう一つは「炎のような舌が分かれば分かれに現れた」ことです。

「風」は、聖霊の象徴で、「風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない」（ヨハネ3：8）のです。この場合の風の起源は天にあります。

もう一つの「舌」は、言葉の賜物の象徴で、4節でも、11節でも「言葉」（複数形）と訳されています。一同は、聖霊に満たされ、聖霊が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話し出したのです。

この時のエルサレムには、天下のあらゆる国が

ら、五旬祭のために帰ってきた信心深いユダヤ人が滞在していました。この「ユダヤ人」は、いわゆる離散のユダヤ人（ディアスポラ）であり、祭りのために、エルサレムに一時滞在していた敬虔な人たちです。彼らは各々、「自分の故郷の言葉」（自分達の母国語）で使徒たちが話しているのを聞いて、あっけにとられてしまいました。彼らが「あっけにとられた」（狼狽させられた）のは、「話しをしているこの人たちは、皆ガリラヤの人であった」からです。

ガリラヤは、かねてより、「異邦人のガリラヤ」（イザヤ8：23）、「ガリラヤからは預言者の出ない」（ヨハネ7：52）と言われ、軽蔑されていました。聖霊に満たされたガリラヤの人たちは、各々の国の言葉で、「神の偉大な業」（11）について語りました。「神の偉大な業」の具体例は、14節以下のペトロの説教において明らかにされます。つまり、ナザレの人イエス・キリストについての福音です。しかし、自分達の国の言葉で「神の偉大な業」について福音を聞いても、驚く者もいれば、「あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言っただげの者もいました。

神はこのようなガリラヤ人を、福音宣教の言葉の器として選ばれたのです。彼らは特別に雄弁であるとか、説得力があったわけではありません。しかし聖霊は、人間の賜物とか能力とは別に、神の一方的な恵みと憐れみによって注がれて、御言葉を託されるのです。

これらの出来事は、かつてのバベルの塔の物語で全地の言葉が「混乱」（バラル）していたことの回復を意味します。それによって今も、世界各地において、各々の国民が、聖霊の働きと導きの下で、自国の言葉によってイエス・キリストの福音を耳にすることができ、信仰へと導かれていくのです。（久保浩文）

テキスト 使徒言行録2章1～13節
参照カテキズム 子どもカテキズム問68

〔単元のねらい〕

今日は聖霊降臨日（ペンテコステ）であり、聖霊降臨を記念して礼拝をささげる。聖霊が降り、聖霊に満たされて、新約のキリスト教会の歩みが始められた。教会は、ただ神の御業をよりどころとしている。聖霊降臨日には、そのことを繰り返し確認させられ、感謝と賛美へと導かれるのである。今年度は救済史を学んでおり、5月21日に「バベルの塔」の物語を学んだ。その記憶が子どもたちに残っているであろう。主なる神が民を散らされた御業である。しかし、私たちの主は、私たちを散らされたままで放り出すようなことはなさらない。主は再び集めてくださる。それは、主イエス・キリストによってであり、一つ御霊によって一つ民とされるのである。主は私たちを召し集めて、キリストのものとして一つにしたもう。それがキリストの体なる教会である。子どもカテキズムの問68を念頭に置いて、聖霊の働くところである教会に召し集められている幸いに感謝したい。

「聖霊による一つなる教会」

今朝は、まず皆さんにこうごあいさつしたいと思います。「おめでどうございます。主にあって、おめでどうございます」。えっ、何がおめでたいのかって？ それは、今日が教会のお誕生日だからです。みんなも、お誕生日には「おめでどう」と言ってお祝いするでしょう。だから、教会のお誕生日には、教会のみんなでお互いに「おめでどう」とあいさつしたいと思うのです。

今日は、「ペンテコステ」という日です。クリスマスのように、一般の社会に知られていませんが、これは教会の大切なお祝いの日です。天のお父さまは、私たちの主なる神は、およそ2000年前のこの日に、聖霊をお与えくださいました。それは、主イエスが天にあげられたあと10日目のことでした。

主イエスは、私たちのすべての罪を引き受けて十字架につけられ、三日目によみがえられました。私たちは、イースターにそのお話を聴きました。その復活から40日の間、主イエスは弟子たちの前にあらわれて、御自身がよみがえられたことを証しされました。そして、祈って待っていないさいと命じられたのです。天のお父さまが遣わしてくださるもう一人の助け主を祈り求めなさいとお

しゃいました。天のお父さまが必ずもう一人の助け主をお送りくださると、そう約束して、主イエスは天にあげられました。その通り、弟子たちが一つところに集まって祈りをささげていると、主イエスが天にあげられて10日目の主の日のこと、集まっていた弟子たちに聖霊が注がれました。もう一人の助け主が与えられたのです。主イエスが、御自身の御霊を注いで、満たしてくださったのです。それがペンテコステの出来事、聖霊が降ってくださった出来事です。

聖霊が降る。それは、神の御業なのであり、たいへん驚くべき出来事でした。弟子たちが集まっていると、突然、激しい風が吹いてくるような音が聞こえてきて、それも普通の風の音ではありません、どう変わっていたのか、「天から」と言うほかない、心に響く風の音なのです。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れるというしるしをともなって、聖霊が注がれました。風も炎も神の御力、栄光をあらわすしるしであり、このとき、主なる神は聖霊を注いで、弟子たちに御自身の豊かな賜物を与えられたのです。

弟子たちが聖霊に満たされて、どのような驚くべき力を与えられたのか。聖霊は、「炎のような

舌」のしるしをともなった通り、言葉の霊なのです。主イエス・キリストを証し、神の国の福音を熱心に宣べ伝える霊です。弟子たち一人一人に福音を宣べ伝える、そのための言葉が与えられたのであり、弟子たちは主イエス・キリストを宣べ伝えて熱心に語り始めました。そのようにして、聖霊は教会を建てあげます。今日は朗読しませんでした。使徒言行録2章の終わりのところには、福音を聞いた多くの人たちが洗礼を受けて、神を礼拝し、共同生活をするようになった。教会を建て上げて、一つ神の民として生きるようになったと、そのことが語られています。弟子たちは、福音を宣べ伝えることによって、教会を建て上げる器として用いられたのです。

こうして、ペンテコステとは、天のお父さまが、また天にあげられた主イエス・キリストが、御自身の御霊を注いで、教会を建て上げられた、御自身の民を一つとされた出来事です。主なる神が、全地に散らされた民を御自身のもとに一つに集めてくださる御業なのです。

今日のところで、みんなが驚くことがあったでしょう。うらやましかったかもしれません。それは、弟子たちがほかの国々の言葉で話したということです。弟子たちは、聖霊を注がれて、自分の国の言葉ではない、それぞれほかの国々の言葉で話し始めて、そうして、全世界の国々に福音を宣べ伝えることができるようにされました。「ほくもわたしも、他の国の言葉で話せるようになりたい」、「外国語を話せるようになるなら聖霊を注いでほしい」と思うかもしれません。

弟子たちはほかの国々の言葉で話し始めました。「ほかの国々の言葉で」ということはもちろん驚きで、素晴らしいことなのですが、もっと大切なことがあります。それは、主イエス・キリストの福音を証して、それが受け入れられたことです。心一つにすることができたのです。だから、三

千人ものたくさんの人たちが洗礼を受けました。一方で、弟子たちをあざける人たちもいたのですが、きちんと耳を傾けて、心一つにする人々が現れた。そうして一つ信仰の民、教会とされました。言葉というのは、ただ通じるだけでなく、心に響いて、一つになることができる。そのことが大切です。言葉は心をのせる器なのです。その意味で、弟子たちは、心一つにすることができる、そのような真理の言葉、キリストの霊を与えられたのです。それが素晴らしいことです。

私たち罪人は、かつてバベルの塔の出来事において、心一つにして、天まで届く塔を建てようといいました。バベルの塔の物語を思い出しましょう。人は、自分の名誉、人間の誉れを求め、神になろうといいました。そのために心一つにして、バベルの塔を建てました。主なる神は、人のそのような企てを拒み、お怒りになって、人を散らされたのです。しかし、主なる神は散らしたままで放っておかれたわけではありません。今や時満ちて、主イエス・キリストと聖霊をお与えくださいました。キリストの真理と霊にあって、私たちは集められます。福音によって心一つにされて、一つ神の民を建て上げます。それが教会です。私たちの集められている、この〇〇教会だけでなく、全世界の教会が一つの教会なのです。主イエス・キリストを信じる民として、私たちを一つにしてくださいました。この教会にあって、私たち、主の御名をほめたたえます。感謝と讃美をささげます。かつては、自分たちが神になろうといいました。人間の誉れを求めようといいました。そうであってはならない。教会に集められた私たちは、主イエス・キリストの父なる神、天のお父さまをほめたたえて、生けるまことの神がおられることを証して、この地上を歩むのです。

(望月 信)

[今週の暗唱聖句] 使徒言行録2章4節

すると、一同は聖霊に満たされ、
“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。

〈一週間の準備：これで分級の90%は決まる〉

1) 5/28にお休みの子はどのようにお休みだったんでしょう。次回出席できるようお祈りください。できたら、お手紙を……。2) 6/4の分級で何を話しますか。話す内容を一週間じっくり考えましょう。当然、出席する子供たちの顔を浮かべながら……。教案の準備は祈りではじめましょう。3) 子供たちの成長のために、教会に送り出している家族のみなさんのために祈りましょう。



〈分級では〉

みなさんの教会では、ペンテコステの日にどんなことしますか??。私が以前お世話になっていた教会では、みんなで鳩サブレを食べました。

「聖霊が鳩のように……」というルカ3:22などの箇所からのこじつけなのですが……。特別な日であることを子供たちに感じてもらうのに、食べ物は結構いい item だと思います。時にはいいのでは?? と思うのですが、いかがですか??

〈分級のねらい〉

神さまにより聖霊が与えられたこと、その結果として、弱虫だった、無力だった、イエス様の本当の真意を理解していなかった弟子たちが、雄弁に神様の御言葉の話しはじめたことを子供たちに伝えていただければと思います。続いて、何故、弟子たちはまったく変わってしまったか。分級の短

い時間では難しいかもしれませんが、その点も是非子供たちに伝えたいところです。彼らは復活した確かにイエス様に会い、そして、祈り、聖霊の働きにより変わったのではないのでしょうか。今日だけでは時間がないので、弟子たちのその後を話すことは無理かもしれません。できたら、如何に弟子たちがその後、福音を命がけで伝えたのか、その源にあるものは何か。とても大切なこの部分を子供たちに感じ取ってもらえればと願っています。

〈祈り〉

神さま、神さまは私たちに聖霊を送ってください。弟子たちのように、いつも神さまに祈り、神さまのことをみんなにお話できるようにしてください。

工作例

主題：みことばをプレゼントしましょう

目的：家族やお友達、教会にきている求道者の方へみことばをプレゼントしましょう。

準備するもの：みことばを書いた紙（子どもの人数分または少し多めにコピーしておく）、茶封筒

展開例：

①今日は手紙を書いてもらいますとあらかじめ説明をする。

②コピーして用意した紙に”〇〇さんへ どうぞ 教会にきてください”等、みことばの下に手紙を書いてもらう。文字を書くことができない子どもの場合は教会をイメージするような絵を描いてもらってもかまわない。

③書き終わったら、お手紙を茶封筒に入れて、こどもがお手紙を渡せるような状態にしてもたせる。

〈子どもたちに伝えたいこと〉

神様は「たすけ主」聖霊を送ってくださって、イエス様がいなくなって心細かった弟子たちにイエス様のことを述べ伝える勇気を与えてくださったということ。

神様はイエス様のことを述べ伝える教会をつくり上げてくださったが、その教会は一人の神様を信じるという意味で「一つ」であるということ。

〈展開例〉

礼拝で聞いたお話を思い出しましょう。

○五旬節の日、弟子たちが集まっていると、突然激しい風が吹いてくるような音がして、聖霊が降りました。聖霊をいただいた弟子たちはどうなったでしょうか。

※弟子たちはいろいろな国の言葉で「神様の偉大な業」を話しました(2:4)。

弟子たちはこの日みんなが一つになって集まっていた、と書かれています。まず、弟子たちがどんな気持ちで集まっていたかを、子どもたちと想像してみましょう。

弟子たちの置かれていた状況は次のようなものです。

- ・イエス様は強盗と同じように十字架にかけられ犯罪者として死刑になってしまった。

- ・イエス様はせっかくよみがえらえたのに、天に昇ってまた自分たちのところから離れていってしまった。

弟子たちは心細かったはず。集まっていたのも人目を避けてこっそりとだったはず。

それが、たくさんの人たちが集まってきても胸

を張って「神の偉大な業」について語りました。「神の偉大な業」＝「神様のなさったすばらしいこと」とは、何でしょうか。それは、神様が救い主イエス様をくださって、私たちの罪を無いことにしてくださり、永遠の命を約束してくださいました、ということです。

聖霊は、弟子たちに「神の偉大な業」＝イエス様のことを、たくさんの人前で述べ伝える勇気を下さいました。イエス様のことを述べ伝えることは、聖霊の助けによって行なわれる教会のつとめです。

○聖霊をいただいた弟子たちが、それからどうなったかが、2:43～47に書かれています。そこを読んでみましょう。

※この短い箇所にも、「一つになる」という言葉が三回も出てきます。聖霊によって勇気づけられた弟子たちの集まりの特徴は「一つ」であるということでした。この弟子たちの集まりが「教会」です。今、教会は世界中にたくさんあるのに、どうして「一つ」なのでしょう。

一人の神様、一人の救い主を信じるということで私たちは、いつ、どこにいても「一つ」なのだということを語りましょう。

〈ちいさなお祈り〉

○神様は聖霊を送ることによって、心細かった弟子たちに勇気をくださいました。私たちも聖霊の助けによって、イエス様のことが好きだと言えるようにしていただきましょう。



〈ねらい〉

聖霊は、イエス様が送ってくださった方であり、聖霊によって信じるものが一つになり、教会になったことを覚え、今わたしたちの教会の中にも聖霊が働いておられることを確認する。

〈展開例〉

1. イエス様（神様）が聖霊を送ってくださると約束してくださった聖書箇所を探してみましょう。
(マタイ12:18、ヨハネ14:26、15:26、16:7、13、使徒2:17など)
2. 聖霊は神の霊であり、わたしたちの中に入って、私たちが心を一つにして神様を礼拝するようにしてください。教会はその聖霊の働きによって立てられたのであります。では、教会は私たちの体にたとえるならば、聖霊は何にたとえられることができるでしょうか。
3. 聖霊は今わたしたちの教会の中にもおられると思いますか。
4. 皆と一緒に礼拝するところに聖霊はおられるのか、わたしたちの教会にも確におられることを信じましょう。

〈祈り〉

神様。私たちに聖霊を送ってくださって、私たちが心を一つにして神様を礼拝するようにしてください。どうか、わたしたちの心をもっと聖霊に満たされて、神様の喜ばれる教会を立て上げていくことができるようにしてください。



〈今日のカテキズム〉

ハイデルベルク信仰問答

問54 「聖なる公同の教会」について、あなたは何を信じていますか。

答 神の御子が、全人類の中から、御自身のために永遠の命へと選ばれた一つの群れを、御自分の御霊（みたま）と御言葉とにより、まことの信仰の一致において、世の初めから終わりまで集め、守り、保たれる、ということ。

そしてまた、わたしがその群れの生きた部分であり、永遠にそうあり続ける、ということです。

※再び、使徒信条の箇条についての問答です。

〈今週の聖書日課〉

日曜日 マタイ16：18

月曜日 ヨハネ10：27～30

火曜日 ローマ8：28～30

水曜日 ローマ10：14～17

木曜日 コロサイ1：18

金曜日 エフェソ4：1～6

土曜日 ヨハネ3：19～24

先生方へ⑨

神学生のとき、派遣先の教会の中高生のクラスで、私は次のようにやってみました。

①まず全体で。私が問を読み、皆に答を読んでもらう。

②もう一度私が問を読み、皆に答えてもらうが、このときには、なるべく見ないで言うように挑戦してもらおう。これを様子を見て何度か繰り返す。

③次に、一人ずつに問いかける。そのとき、必ずまず名前呼びかけて、問を言う。「めぐちゃん、人の主な目的は何ですか。」といった具合に。そして、覚えた答を見ないで言ってもらおう。一人で答えるとなると緊張もあって、なかなかスムーズに出てこないときもある。そんなときはヒントを与えて手助けする。一人一人と納得できるやり取りが出来るまで時間をかけて行う。

問いかける前に、名前を呼ぶ、というのがポイントです。そうすると、生徒一人一人の魂と、先生の魂という固有の存在が浮かび上がってくるからでしょうか、ただの形式的な問答の朗読ではなくなってくるから不思議です。
(つづく)



テキスト 創世記15章1～21節

15章から17章までの主題は「契約」です。主はアブラムに「わたしはあなたを大いなる国民にする」(12:2)という約束をされましたが、この章で、さらに具体的に、アブラムの子孫について語られるのです。

1. 主のことば

「これらのこのの後」とは、14章に記されている出来事のことです。

アブラムは、激しい戦いに主の力によって大勝利を収めたにもかかわらず、恐れと不安の中にあり、慰めを必要としていました。主は、「恐れるな、アブラムよ。わたしはあなたの盾である」(15:1b)と語られました。

さらに主は「あなたの受ける報いは非常に大きいであろう。」と語られました。しかし、世継ぎのないアブラムは、「わが神、主よ。わたしに何を下さるというのですか。わたしには子供がありません。」と問わざるを得ませんでした。いかに大きな報いを受けても、それを受け継いでくれる子供がいけないのでは、空しいものです。彼にとって現実の選択肢は、当時の習慣に従い、自分の家の奴隷を相続人とすることしかありませんでした。(3) これは、かつて「あなたの子孫を大地の砂粒のようにする。」(13:16)との主の約束の言葉が今なお実現していないことへのアブラムの不満でした。これに対して主は、アブラムの家の奴隷が跡を継ぐことを禁止されました。跡を継ぐのは、「あなたから生まれる者」だと言われたのです。「すなわち、肉による子供が神の子供なのではなく、約束に従って生まれる子供が、子孫と見なされるのです。」(ローマ9:8)

2. 信仰による義

主なる神は、アブラムに再び、子供を与える約束をされました。それでも頑なに主の約束を信じようとしないうアブラムを、神は外に連れ出して言われました。「天を仰いで、星を数えることがで

きるなら、数えてみるがよい。」「あなたの子孫はこのようになる。」アブラムは、主によって天の星(しるし)を見せられて、もう一度「主を信じた」(彼は主に信頼した)のです。信頼の動詞は、継続を表わす形です。アブラムは、人間の目には不可能と映る事柄であっても、神は約束されたことを実現させる力もお持ちの方であることを、希望を抱いて信じたのです。主はそれを義と認められたのです。これは、新約の時代に生きる私達にとっても大切な神の一方的な恵みです。「(この言葉は)アブラハムのためだけに記されているのではなく、わたしたちのためにも記されているのです。わたしたちの主イエスを死者の中から復活させた方を信じれば、わたしたちも義と認められます。」(ローマ4:13-25)

3. 主の契約

主は、アブラムに対して「わたしはあなたをカルデヤのウルから導き出した主である」(7)と自己紹介されました。主は、アブラムだけでなく、個人の生涯に深いかかわりを持たれ、その人の人生を導かれる、歴史の中で生きて働かれる神です。神は、アブラムと契約を締結されます。神はアブラムに契約の儀式に用いる動物を持って来させ、さらにそれを真っ二つに切り裂き、それぞれを互いに向かい合わせて置かせました。契約の当事者が二つに裂かれた動物の間を通り過ぎることによって、もし、この契約を破るようなことがあれば、この動物のようにされても異存はないということを確認したのです。やがて日が沈み、暗闇に覆われたころ、「煙を吐く炉と燃える松明」が二つに裂かれた動物の間を通り過ぎました。これは主の臨在の象徴です。裂いた動物の間を通られたのは主のみであり、契約の遵守を誓われ、その契約違反の責任を負われたのは主だけでした。新約では、イエス・キリストを十字架にかけて、私達の契約違反の罪の責任を負わされたのです。(ガラテヤ3:13-14、コリント二5:21)(久保浩文)

テキスト 創世記15章1～21節
参照カテキズム 子どもカテキズム問67

(単元のねらい)

信仰とは神の御業であり、「奇跡」である。「奇跡」とは、常識では考えられない自然現象を指すために用いられることが多い。そうであるならば、神に敵対し、神から離れるばかりであった罪人が、何故であろうか、神を信じるように変えられる。このことも、常識では考えられず、人間の業でもありえない。「信仰の奇跡」と言うべきである。アブラハムの信仰も、そのように奇跡として与えられたものであった。奇跡と言うべき信仰を賜る神を仰いで神を讃美したい。また、この神の御業はアブラハムだけのものではない。信仰者みな、この神の御業、神の奇跡にあずかって、信仰者とされている。自らに働く神の御力をおぼえる機会としたい。

「信仰という驚くべき奇跡」

再びアブラハムの物語に戻ります。

今日の聖書には「アブラム」とありますが、アブラムは後に名前が変わります。神さまが、「アブラハムと名乗りなさい」とおっしゃって、「アブラハム」という名前になるのです。私たちがよく聞いて耳になじんでいるのはアブラハムですから、アブラハムとお呼びしますね。

アブラハムは、「信仰の父」と呼ばれます。「信仰者の父」、「信じる者の父」とも言われます。今日の御言葉には、6節、「アブラムは主を信じた」とあります。いったいどんな出来事があったのでしょうか。

アブラハムは、メソポタミア地方、カルデアのウルの出身でした。お父さんに連れられて、ハラに移り住み、そして、神さまに召し出されて、カナン之地に向かって旅立ちました。アブラハムは、まったく見ず知らずの、何の頼るべき知り合いもないカナン之地に、それは、ただ主なる神の御言葉に導かれるままにやってきたのです。このことは、以前学んだとおりです。アブラハムは、自分の力を頼りにして生きることをやめて、まことの主なる神を頼りにして生きていくことにしました。カナンへの出発は、神さまに依り頼む人生への出発であったのです。

その後、カナン之地で、アブラハムは祝福され

ました。エジプトに移り住まなければならなかった時期があり、甥のロトと別れ住むなど、いくつか大きな出来事がありましたが、それらはまた別の機会にお話ししましょう。アブラハムは、苦しむこともありましたが、その苦しみを乗り越えて、主なる神からの祝福を受けていました。主なる神は、自分を頼るのではない、まことの神さまを頼りにするアブラハムを喜んで、豊かに祝福されたのです。

神さまに祝福されて、アブラハムには、多くの財産がありました。羊や山羊、牛といったたくさんの家畜を持っており、しもべたち、たくさんの使用人がいました。アブラハムはお金持ちになっていたのです。しかし、アブラハムには一つ、心配事がありました。アブラハムとサラ(サライ)の夫婦には、子どもがいなかったのです。そのため、アブラハムの財産は、使用人の一人(ダマスコのエリエゼル)が受け継ぐことになっていました。しかし、主なる神は約束しておられました。「わたしはあなたを大いなる国民にし、あなたを祝福し、あなたの名を高める、祝福の源となるように」(12:2)。これは、アブラハムの子孫が祝福されて、大いなる国民になるということです。「あなたの子孫にこの土地を与える」(12:7)という約束も与えられていました。いったいこの約

束はどうなるのか。子どもがいなければ、神さまのこの約束など無意味です。これがアブラハムの心配事です。心の中に主なる神に対する疑問が湧き上がったとしても不思議ではありません。まして、このとき、アブラハムの年齢はおよそ80歳くらい、サラも70歳くらいであったと思われます。アブラハムとサラは、自分たちに子どもが生まれることをすでにあきらめていました。肉体的にその力がなくなっていたのです。

主なる神は、アブラハムのこの気持ちをご存じであるかのように、いや確かにご存じでられます、ですから主なる神はおっしゃいます。「恐れるな、アブラムよ。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きいであろう」。恐れることはない。主なる神を信じるならば、その報いは大きいのです。豊かな祝福が与えられるのです。心配しなくてよいのです。自分の子どもについて心配し、あとを継ぐ者について思いわずらうアブラハムに対して、主なる神はおっしゃいます。「その者があなたの跡を継ぐのではなく、あなたから生まれる者が跡を継ぐ」。さらに、アブラハムを外に連れ出して、夜空に輝く星々を数えさせておっしゃいます。「あなたの子孫はこのようになる」。夜空に輝く満天の星々のように数多く増え広がるとおっしゃるのです。

主なる神のこの言葉を聞いて、アブラハムはどう思ったでしょう。もはや子どもはあきらめるほかないかと思っていた。いくら豊かな富が与えられても、受け継ぐ子孫はいない。主なる神の約束もむなしなものなのであろうかと思っていた。そのところで、再び約束が与えられたのです。これを果たして信じることができるのだろうか。

聖書は言います。「アブラハムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」。

この言葉を聞いて、わたしは、信仰ということは神の御業にはかならない。人間の業ではないと思います。普通に考えるならば、わたしはこう神

さまにお答えしてしまいます。「神さま、もういいですよ。わたしも年をとりました。豊かな祝福を与えられて、わたしも人生を楽しみましたから、もう無理な約束はやめてください。子どものこと、子孫のことは、もうあきらめていますから」。

アブラハムは、決してそうは答えませんでした。「主を信じた」と、聖書はそう言います。素晴らしいと思います。不思議なことであり、驚くべきことです。しかし、これが信仰なのです。信じられないところで、神さまの約束がむなしく聞こえてくるように思えるところで、しかし、信じるのです。信じるのできるのです。それが信仰です。しかも、これは人間の業ではありません。アブラハムの場合も、これは彼の業ではありません。主なる神の御業として、このような信仰が与えられたのです。神の御言葉の力、神の愛の力なのです。主なる神は、このような神の奇跡としての信仰を喜ばれ、「義と認め」られるのです。

わたしにとりまして、わたしが神さまを信じている。イエス様に結ばれている。それは驚きです。いったいどうして神さまを信じることになったのか。わたしは神さまから離れていた、離れていることが当たり前であったのです。そこから立ち返された。それは奇跡なのです。皆さんも同じです。信仰者はみな、不思議な神の御力に捕らえられて、神さまの御業として、信じる者に変えられています。信仰とは、神の聖霊の賜物であり、神からの一方的恩恵なのです。8節以降に記される契約の儀式も、神の一方的恩恵をあらわすしるしにほかなりません。

このような信仰の奇跡を賜った代表的な一人として、アブラハムのことを、「信仰の父」、「信仰者の父」と呼ぶのです。アブラハムと同じ、信仰の奇跡に招かれていることを喜びましょう。神さまのくすしい御業に感謝し讚美しましょう。

(望月 信)

[今週の暗唱聖句] 創世記15章6節

アブラハムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。

〈一週間の準備：これで分級の90%は決まる〉

1) 6/4にお休みの子はどうしてお休みだったんでしょう。次回出席できるようお祈りください。できたら、お手紙を……。2) 6/11の分級で何を話しますか。話す内容を一週間じっくり考えましょう。当然、出席する子供たちの顔を浮かべながら……。教案の準備は祈りではじめましょう。3) 子供たちの成長のために、教会に送り出してくれている家族のみなさんのために祈りましょう。

〈分級では〉

花の日ですね。みなさん教会では、お花を持って交番とか、老人ホームとか行かれるのでしょうか。教会が教会外に向けて感謝をするのは大変いい機会だと思います。ただ、子供たちは花の日になじみがないので、何でお花を渡すのか意味不明なまま花の日が終わってしまっただけではもったいないありません。礼拝で、よく背景を説明していただければいいな……と思います。また、次週の父の日と行事が続きます。お話が途切れてしまいますので、進め方に注意が必要だと思います。

〈分級のねらい〉

もし、私がアブラハムだったら、神様の御言葉を素直に信じることができたでしょうか？ 私たちは子供たちの前で、神様のことを信じましょう……と話しますし、実際信じています。しかし、しかし、神様のことを信じていますといいつつ、如何に自分の中の価値観で勝手に物を判断してい

ることが多いでしょうか。神様の御心を求め、素直に従う、それがわかっている、できていない自分の姿を心に思いつつ、子供たちにアブラハムの信仰を語るができること、アブラハムの信仰のすごさが、子供たちに、いくらかでも良く伝わるのではないかと……とそんなふうには思っています（うまく言えないのですが……）。また、神さまが、アブラハムに満天の星空を見せる場面は大変感動的な場面だと思います。工作する際は、うまく表現をお願いします。

〈展開例〉

アブラハムさんは、もう、80歳くらいのおじいちゃん、おくさんサラさんは70歳くらいのおばあちゃんになっていました。残念ながら二人には子供がいませんでした。もうおじいちゃん、おばあちゃんですから、子供が生まれるなんて全然思っていませんでした。そんな時です。神さまが、アブラハムさんに、「アブラハムさん、あなたに子供が生まれますよ」とお話されました。みんながアブラハムさんだったらどう思う。先生だったら、「何、神さま言ってるんです??、もう、私はおじいさんです。奥さんもおばあちゃんです。そんなのいくら神様の話でも無理ですよ」ってね。でもね、アブラハムさんは違ったんだ……

〈祈り〉

神さま、神さまのことをしっかり信じることができるよう助けてください。

工作例

主 題：みんなアブラハムの子！

目 的：神様がアブラハムに星の数ほど子孫を増やすと約束する場面をみんなで作ります。わたしたち皆、神様がアブラハムに約束された子孫です。そのことを覚えて感謝しましょう。

準備するもの：星型にきった紙、大きな画用紙、もしくはカレンダーの裏の白紙部分、黒く塗ってあるとなおよい。

展開例：子供たちに星型にきった紙を渡して、星のなかに自分の顔や教会にきている方々の顔をかいてもらう。それを用意した大きな紙に貼っていく。神様がアブラハムに約束された場面を語りながら一緒に作業していくとよいでしょう

〈子どもたちに伝えたいこと〉

神様は年老いたアブラハムに「あなたに子どもが生まれる」という信じられないような約束をしてくださいましたが、その信じられないようなことを、アブラハムが信じる事ができたのも、神様の力であるということ。

神様は私たちにも、キリストの十字架と復活という信じられないようなことを、信じる事ができるようにして下さる、ということ。

〈展開例〉

礼拝で聞いたお話を思い出しましょう。

○神様は、アブラハムに「あなたからたくさんの子孫が生まれ、神様から大きな祝福を受ける」ということを約束してくださいました。アブラハムはそのことをすぐに信じる事ができましたか？

※子どもの無いまま80歳を越しておじいさんになっていたアブラハムは、はじめは神様の約束をすぐに信じる事ができませんでした(15:2・3)。言葉だけで信じようとするアブラハムに、神様は空の星を見せて、「こんなにもあなたの子孫は多くなる」と約束してくださいました。

神様のすごいところは、信じられないでいる者に信じられるように助けてくださる事です。アブラハムには、80歳になっているのに子どもが生まれるということ信じさせてくださいました。4月にも学んだことですが、イエス様がよくえられた時、そんなことは信じられないと言ったトマスにイエス様は手のひらの釘のあとを見せて信じられるようにしてくださいまし

た(4月16日展開例参照)。

○「信じられないようなことを信じる事ができるようにして下さる」神様の力は、聖書の中だけの話ではありません。

※神様は私たちにもその力をくださいます。聖書に書いてあることは、神様が言葉だけでこの全世界を造られたことも、救い主として神の子・イエス様が来てくださったことも、イエス様が十字架にかけられた後三日目によみがえったことも、私たちの頭の中で考えたとしても信じられないようなことばかりです。しかし、神様は私たちに信じられないようなことを信じる事ができる力をくださいました。だからこそ、私たちはこうして教会に来て聖書のお話をきく事ができるのです。

神様が信じる事ができるようにして下さる、神様が教会に連れてきてくださる、ということは小さいうちから繰り返し語っておきたいことです。思春期になって「自分の信仰」を考えるようになった時に、主体が神様にあるということが基礎として築かれていると、子どもたちにとっても「自分の選び」ということが受け入れやすいと思います。

〈ちいさなお祈り〉

○アブラハムに信じられないようなことを信じる力を与えてくださった神様が、私たちにもその力を下さって、聖書に書かれている不思議なことを信じる事ができるようにして下さっているということを「ありがとう」と感謝しましょう。

〈ねらい〉

私たち人間にとっては不可能だと思われることを、神様はなさってくださいる方であることを信じ、私たちもそのような信仰の奇跡に招かれていることを確認する。

〈展開例〉

1. 神様がアブラハムさんに与えてくださった約束をもう一度確認して見ましょう。
 - 一 約束の地カナンを与えるということ
 - 二 子孫を増し加えること
 - 三 祝福の基となること
2. このような約束は、アブラハムにとってはとても不可能なことで、信じ難いことでしたが、アブラハムはこれを信じました。皆さんは、教会に来て先生の教えの中で信じられないことがありますか。一緒に話し合しましょう。
3. 聖書の中には信じられない話が沢山ありますが、それはすべて真実であり、神様がわたしたちに信仰を与えるために行った働きであります。神様はそのようなことがお出来になる方です。
4. 神様がなさった働きの中で、もっとも大きな働きはイエス様を信じることを通して、わたしたちの罪を赦し、私たちが救ってくださいることです。わたしたちはこの信仰に招かれています。今信じることができないとしても、そのような信仰が与えられるように神様に祈りましょう。

〈折り〉

愛する神様。聖書の中には数多くの信じられないことが書かれています。神様はわたしたちのためにそのような驚くべき奇跡を行ってくださいました。わたしたちがイエス様を信じて、神様の信仰の奇跡に招かれますように導いてください。



〈今日のカテキズム〉

カテキズムをする前に……

☆創世記15:6に「アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。」とあります。神さまに召された者の祝福として「義認」が挙げられている「有効召命」についての問答を、今日は取り上げたいと思います。アブラハムはキリスト以前の人ですが、同じ祝福を与えられていることを喜びたいと思います。

ウェストミンスター小教理問答

問31 有効召命とは何ですか。

答 有効召命とは、神の御霊の御業です。これによって御霊は、私たちに自分の罪と悲惨とを自覚させ・私たちの心をキリストを知る知識に明るくし・私たちの意志を新しくするという仕方で、福音において一方的に提供されるイエス・キリストを私たちが受け入れるように説得し、受け入れさせてくださるのです。

問32 有効召命されている者は、この世で、どんな祝福を分け与えられますか。

答 有効召命されている者は、この世で、義認、子とされること、聖化、この世でそれらに伴い、あるいはそれらから流れ出るいくつもの祝福を分け与えられます。

〈今週の聖書日課〉

日曜日 ヘブライ11:8~12
 月曜日 ヘブライ11:13~16
 火曜日 創世記15:5~6
 水曜日 ローマ4:1~12
 木曜日 ローマ4:13~25
 金曜日 ローマ5:1~11
 土曜日 ローマ8:30

先生方へ⑩

分級展開例の中で、いくつかの問答を挙げてありますが、全部する必要はありません。中学1年生と3年生とではずいぶん違いがあるでしょうし、暗記が得意な人・苦手な人もいますから、生徒の状況に合わせて、選んでください。

問答のやり方は、先週挙げたやり方のほかに、例えば、生徒が問を読んで、先生が答えるという形にするとか、生徒同士で問答する、などの方法も考えられます。いずれにしても、教師の側からの一方通行にならないように、そして、本当にお互いに語りかけるようにして、取り組んでいただければよいのではないかと思います。

中学生の頃の記憶力は、驚くべきものです。この時に聖書のみ言葉やカテキズムの言葉を覚えさせない法はありません。はじめは他人の言葉を借りているようでも、いつか本人の信仰告白の言葉になるのを、祈りながら待ちたいと思います。

テキスト 創世記21章1～8節、22章1～19節

〈イサク誕生の喜び〉

アブラハムとサラの夫婦に息子イサクが生まれたのは、アブラハムが100才、サラが90才の時でした。その1年前に、神はアブラハムと契約を結び、神がアブラハムとその子孫を祝福し、カナンの地を嗣がせることを約束しておられました。しかし、アブラハムは自分たちのような年老いた夫婦に子供が与えられるなどということ信じることができず、ハガルとの間に生まれたイシュマエルを跡取りにする以外にないと考えていました。ところが、主の御心はサラから生まれる子が契約の子、祝福を受け継ぐべき者であるであるということでした（創世記17:17-19）。そして、1年後にサラは男の子を産むと予告なされたのでした（18:10）。

その約束どおりに、1年後、サラは男の子を出産し、アブラハムは神より示されていたとおり、名をイサク（彼は笑う）と名付けました。夫婦にとってこのイサクの誕生がどんなに喜ばしいものであったか、それは、彼らが「イサクの乳離れの日に盛大な祝宴を開いた」（21:8）ことに表れています。彼ら夫婦にとって、イサクは文字通り「約束の子」でした（ガラテヤ4:23,28）。

〈大きな試練〉

そのようなアブラハムに神は大きな試練をお与えになります。イサクが成人に達する前のある日、神はアブラハムに「あなたの息子、あなたの愛する独り子イサクを……焼き尽くす献げ物としてささげなさい」とお命じになったのです。神ご自身が「約束の子」としてお与え下さったイサクを今度は神自ら「焼き尽くす献げ物」としてささげるように求められたのです。何ということでしょうか。「神はわたしに笑いをお与えくださった」（21:6）と大きな喜びをもって受けた独り子イサクで

ありましたのに、他でもなくこの子をささげよ、とは！ アブラハムはどれほど思い悩んだことでしょうか。

しかし、聖書はこのことについて「神はアブラハムを試された」（22:1）と記すのみです。アブラハムはこの命令を受けた次の朝早く、息子イサクと従者二人を連れて指示されたモリヤの山に向かいます。

〈アブラハムの信仰〉

アブラハムにとっては、イサクは自分の息子であると同時に、それ以上に神の「約束の子」として神より授かった子でありました。人間的な思いからするならば、この独り子をささげるなどということは、どうしても避けたいことであつたに違いありません。けれども、信仰の人アブラハムは、この大いなる試練の中で、人間的な情愛にも勝って確かな神のご計画、神の御心に従おうとする決断が与えられたのでした。それで、アブラハムは「信仰によって、試練を受けたとき、イサクを献げた」のです（ヘブライ11:17-19）。この時、アブラハムは「神が人を死者の中から生き返らせることもおできになると信じたのです」と、ヘブライ人への手紙の著者はコメントしています。

このようなアブラハムの信仰を主はお喜びになって、イサクの身代わりとして一匹の雄羊をご用意くださいます。アブラハムは息子の代わりにこの雄羊を焼き尽くす献げ物として献げ、その場所をヤーウェ・イルエ（主は備えてくださる）と名付けたのでした（22:14）。

主は私たち一人一人に対しても主に対する全き献身を求められますが、そのために、先ず身代わりの小羊として御独り子イエス・キリストを献げられました。このような主の愛に忘れて主に献身したいと思います。（宮崎彌男）

テキスト 創世記21章1～8節、22章1～19節 18編聖書 1頁14～19頁
参照カテキズム 子どもカテキズム問13、24

(単元のねらい) 神は神のそのイサクを焼き尽くす献げ物として要求なさいました前そこにアブラハムの生涯における究極の信仰の戦いがありました。同時に、神は神の出来事によってこそ新鮮やかにご自身が御子イサスを十字架の上に犠牲として捧げられる御心を明らかにされたのです。この物語を通して、神の至上の愛の御子イサスの十字架と復活を指し示したいと思えます。さらに、信仰によるのみ、神の深い御心を知らされることを証し、信仰へと励ましたい。第9号の当該箇所からの説教展開例をもご参照ください。

(神の御心)

アブラハムの命の終りに、神は神のそのイサクを焼き尽くす献げ物として要求なさいました前そこにアブラハムの生涯における究極の信仰の戦いがありました。同時に、神は神の出来事によってこそ新鮮やかにご自身が御子イサスを十字架の上に犠牲として捧げられる御心を明らかにされたのです。この物語を通して、神の至上の愛の御子イサスの十字架と復活を指し示したいと思えます。さらに、信仰によるのみ、神の深い御心を知らされることを証し、信仰へと励ましたい。第9号の当該箇所からの説教展開例をもご参照ください。

「神さまの深い御心を知らされたアブラハム」

アブラハムは、神の深い御心を知らされた。神は神のそのイサクを焼き尽くす献げ物として要求なさいました前そこにアブラハムの生涯における究極の信仰の戦いがありました。同時に、神は神の出来事によってこそ新鮮やかにご自身が御子イサスを十字架の上に犠牲として捧げられる御心を明らかにされたのです。この物語を通して、神の至上の愛の御子イサスの十字架と復活を指し示したいと思えます。さらに、信仰によるのみ、神の深い御心を知らされることを証し、信仰へと励ましたい。第9号の当該箇所からの説教展開例をもご参照ください。

ばらしいことをしてくださったのではないか。わたしは、今、イサクを言われたとおりに捧げるのだ。」

朝早く、アブラハムとイサクと僕二人、そしてロバと一緒に、出発しました。そしてその三日目のことです。アブラハムは、イサクを捧げる場所を遠くに見ました。すると、僕たちに言いました。「お前たちは、ロバと一緒にここで待っていないさい。わたしと息子はあそこへ行って、礼拝をして、また戻ってくる。」こう言って、イサクと二人で山に登ってゆきました。イサクは、用意しておいた薪を背負って歩きました。お父さんのアブラハムは、たいまつと火と動物を殺す刃物をもって歩きました。しかし、しばらくして、イサクはどうしても、聞きたくなくなりました。なぜなら、確かに、神さまに礼拝を捧げるために、薪を持ち、火を持ち刃物を持っているけれど、肝心の小羊の準備がないからでした。

そこで尋ねました。「わたしのお父さん。小羊はどこにいるのですか。」アブラハムは答えました。「わたしの愛する子よ、捧げる小羊は、きっと神さまが備えてくださる。」そして、また、二人は歩き続けました。

さて、いよいよ、神さまがお命じになられた場所に着きました。そして、黙々と、祭壇を築き、薪を並べました。すると、どうでしょう。お父さんは、イサクを縛り上げ、小羊のいけにえのように薪の上に乗せたのです。このとき、アブラハムは100歳をはるかに越えたお爺さんです。イサクの方が薪を背負ってあるけるほど、力も強いのです。逃げることもできたはずですが、けれども、イサクは逃げませんでした。おそらく、イサクも、「お父さんは、神さまの命令でそうしているのだ。僕も、神さまの御心なら、従う。」このように考えたのではないかと思います。

さて、ついにアブラハムが、刃物を取り上げ、力の限りに振り下ろそうとしたそのとき、神さま

の御使いが、告げました。「アブラハム、アブラハム。」「その子に手を下すな。あなたが神を畏れる者であることが分かった。」

アブラハムが目を凝らして見回すと、木の茂みに雄羊が角をとられていました。そこで、これを、イサクの代わりに献げ物としました。

アブラハムは、出発してから三日目に、この山に登るとき、僕たちに告げていましたね。「わたしたちは戻ってくる。」きっと、神さまが、信じられないような方法で、二人を戻してくださると信じていたのだと思います。

このお話をしながら、先生は、イエスさまの十字架と復活のことを思い出さずにはおれません。イエスさまは、十字架の上で、僕たち私たちの罪の身代わりとなって、そのお命を犠牲にして、血を流してくださいました。天のお父さまは、その独り子をお与えてくださるほど、僕たち私たちが愛してくださいましたからです。そして、本当に、天のお父さまは、ご自分の御手によって、イエスさまを殺してしまわれたのです。しかし、三日目に死んだものたちの中から甦らせて下さいました。

アブラハムも、出発した三日目に、イサクを捧げました。そして、もう一度、イサクを与えられました。イサクは一度死んで、よみがえらされたようなものだと思います。この物語は、イエスさまの十字架と復活の物語とぴったり重なりますね。天のお父さまの愛を思います。

また、このような天のお父さまの御心を知らされたのは、アブラハムでした。本当に神様を信じて従う人に、神さまの御心がよく分かってくるのです。僕たち私たちも、これからも神さまを信じてゆきましょう。そして、神さまは、僕たち私たちが今、よく分からないことでも、信じて従うことが大切なのだと教えてくださったのですから、そのとおり、したがって行きましょう。

(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] 創世記22章14節後半

そこで、人々は今日でも「主の山に、備えあり(イエラエ)」と言っている。

〈一週間の準備：これで分級の90%は決まる〉

1) 6/4にお休みの子はいませんでしたか？
 どうしてお休みだったんでしょう。次回出席できるようにお祈りください。できたら、お手紙を……。2) 6/11の分級で何を話しますか。話す内容を一週間じっくり考えましょう。当然、出席する子供たちの顔を浮かべながら……。教案の準備は祈りではじめましょう。3) 子供たちの成長のために、教会に送り出してくれている家族のみなさんのために祈りましょう。

〈分級では〉

父の日です。分級の時間はお父さんへのカードを作る時間にしても OK ではないでしょうか。子供たちの父の印象はどうでしょうか。やさしいけど、怒ると怖いお父さん？。神様はお父さんのように、みんなを大切に思ってくださいています。でも、お父さんのように厳しいお父さんでもあることをこの機会に話せるといいな……と思います。

〈分級のねらい〉

とても切ないお話です。何で神様はこんなことをするんでしょう？？。私がアブラハムだったらこんなことやりきる自信全然ありません。でも、私たちは、このことを通じて、アブラハムの信仰のすさまじさを知ります。そして、イエスさまを十字架におかけになった神様のすごさも知ることができます。ここまで話すことは難しいかもしれませんが、アブラハムの葛藤を子供たちが理解してくれたらと思います。

〈展開例：最初の部分のみ書きます〉

アブラハムさん、奥さんのサラさんの間に男のことが生まれました。名前はイサクです。アブラハムさんにとって、とっても、とってもかわいい子、みんなのように、大切に、大切に育てていました。

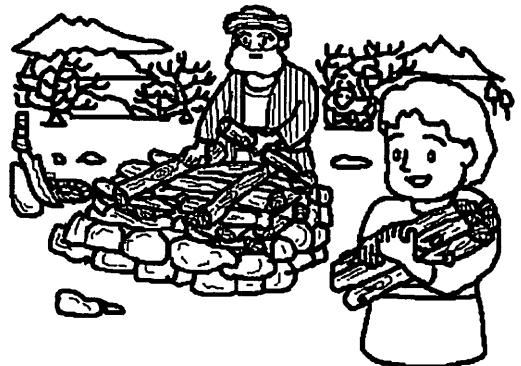
そんなある日のことです。神様が、アブラハムに言います。それはね。イサクをささげ物として捧げなさいということでした。みんな分かるかな（たぶん、子供たちにはよく理解できないと思うので、絵を使って説明するのがいいのでは……）、絵を見せてください。たきぎが組んであるでしょう。そこで、焼かれるのは？、そうイサクさんなんだ。神様はなんてすごいことをアブラハムに言うんだろうね。自分だったらどうするかな？、自分の子供を隠しちゃうかな？でもね、アブラハムさんはね、神様のいうことを実行するの……ほら、アブラハムさんが木を組んでいるよ……イサクはこのまま、焼かれてしまうのかな……

(途中 略)

ところで、みんなはイエスさまが十字架で死なれたこと覚えているよね。イエス様は神様の子、ということは、神様はイサクさんを捧げ物にしなかったけど、イエス様は捧げられたんだよね。神様の苦しみってどんなだったんだろうね。

〈折り〉

神様、アブラハムさんのように、神様を信じて歩むことができるようにしてください。



〈子どもたちに伝えたいこと〉

アブラハムが「イサクをささげなさい」という神様の命令に従うことができたのは、神様はいつも自分にとって良いことをしてくださる方だし、約束を必ず守って下さる方だという確信があったからだということ。

〈展開例〉

礼拝で聞いたお話を思い出しましょう。

○神様はアブラハムに約束どおり子どもを与えてくださいました。しかし、ある日のこと、神様は「イサクを焼き尽くすささげ物として私にささげなさい」とアブラハムにお命じになったのです。その時、アブラハムはどうしたでしょうか。

※アブラハムは、神様に言い返したり神様の前から逃げ出したりせず、あくる朝早くにイサクをささげる旅に出ました。

アブラハムは平気だったわけではありません。100歳になってから神様の約束どおり与えられた子どもですから、かわいくないはずがありません。しかし、それに勝ってアブラハムを動かしたのは、今までもこれからも、神様は自分に一番良いことをしてくださる方だと信じる、神様への信頼でした。それは、アブラハムがカナンに移ってくるようにと神様に命じられたときにアブラハムを動かしたのと同じ、神様への信頼です。

くりかえし、何があっても神様が一番良いこと

をしてくださるということを語りましょう。子どもに繰り返し語ることによって、そのことを教師が自分の確信として、子どもたちと対してくださるよう願っています。

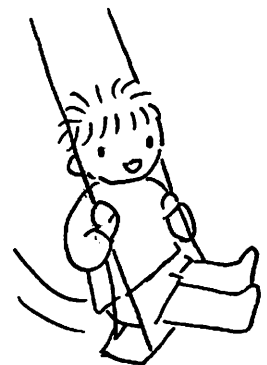
また、アブラハムにとって、神様は約束を守ってくださる方でした。そのことをアブラハムは年取っていたにもかかわらずイサクを自分の子どもとして与えられたことから、しっかりと教えられていたのです。

神様はイサクを自分の子どもとしてお与えになり、子孫を星の数ほどに増やすと約束して下さったのですから、焼き尽くすささげ物としてイサクをささげても、イサクがいなくなってしまうことは無いと信じていたのでしょう。ヘブライ11:19には、アブラハムが「神が人を死人の中から生き返らせることもできる」ということを信じていた、と書かれています。アブラハムは自分の思いよりも、神様が約束してくださることの方が確かだと考えていたのです。

私たちにとっても、神様は約束をしっかりと守ってくださる方だということを語りましょう。

〈ちいさなお祈り〉

○アブラハムは神様を、自分に一番よいことをして下さる方、約束を守ってくださる方だと確信していました。その確信を私たちにも与えてくださって、神様をずっと信じていくことができるようにならねばなりません。



〈ねらい〉

イエス様に従うことは良いことばかりあるわけではない。時々、試練もあるけれども、神様の御言葉に従いつつ歩む人には、万事が益となるように神様が共に働くことを確信する。

〈展開例〉

1. 今日はとてもびっくりするような話でした。もし、皆がアブラハムだったならばどうしたと思いますか。一緒に話し合いましょう。
2. アブラハムが神様の言葉を従って、一人息子を殺そうとしていたのは、神様を信頼していたからであります。絶対裏切る方ではないと確信すると、どんなに納得できないことでも、それを行うことが出来るのです。
3. 〈実験〉では、一緒に実験をしてみましょう。
 - ①少し高い所（講壇に段差があればその上、高さは階段一つぐらい）に生徒を立たせませす。
 - ②足を動かさないまま、腕も固定したままに、後に倒れるようにしましょう。（その時、

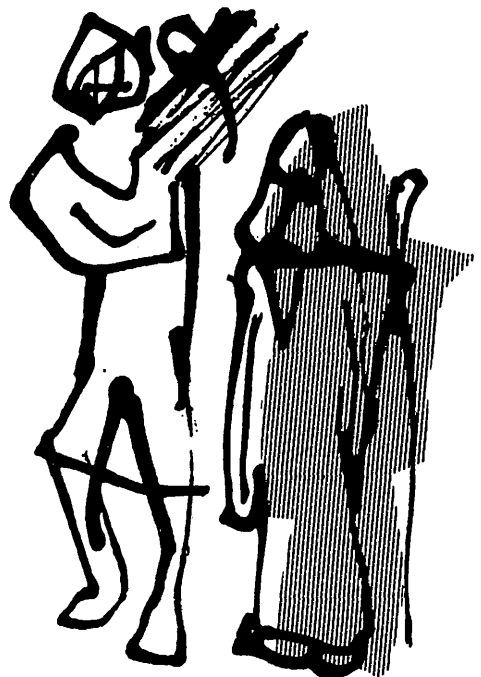
「心配はしないでください。後には先生があなたをじゃんと受取りますから」と安心させる。

- ③教師は、実際後ろで倒れてくる生徒をしっかり受けて支える。

4人を信頼して自分の身を任せることが出来るかな？ いくら親しい先生であっても、自分の身を任せるほど人を信頼することは難しいです。しかし、神様は、私たちのために、イエス・キリストを死に渡された方でありませす。神様を信頼して、いつも神様に従って行くわたしたちにならしましう。

〈折り〉

父なる神様。アブラハムの信仰を通して、神様に従っていくことの大切さを教えてくださって感謝します。私たちは弱くて、すべてを神様にお委ねすることがなかなかできないけれども、これから、神様を信頼して歩むことができるように、信仰を与えてください。



6月18日 イサクの誕生と奉獻

〈今日のカテキズム〉

カテキズムをする前に……

☆理不尽だと思われるような神様のご命令に従ったアブラハム。このように神さまにお従いする人を、神さまはお喜びになります。次の問答にある通りです。

ウェストミンスター小教理問答

問39 神が人に求めておられる義務は、何ですか。

答 神が人に求めておられる義務は、神の啓示された御意志に服従することです。

〈今週の聖書日課〉

日曜日 創世記22：1～6

月曜日 創世記22：7～13

火曜日 ヘブライ11：17～19

水曜日 ミカ6：8

木曜日 サムエル記上15：22

金曜日 詩編1：6

土曜日 ヤコブ1：2～3

先生方へ⑩

聖書日課についてですが、毎日少しずつ読むために使っていただくことはもちろんですが、少し作業があると、励みになって続けられるかもしれません。例えば、読んだ箇所には線を引く、というのは、よくなされることだと思います。線を引いたところがどんどん増えていくのを見るのが楽しみになるかもしれません。また、文房具屋さんで、名刺サイズのきれいなカードが20枚入りで150円くらいで売っています。そういうものを利用して、1枚に1つ、聖句を書き込んで、定期券入れや生徒手帳に入れておくことを勧めてみてはいかがでしょうか。分厚い聖書を持ち歩くことは難しくても、これなら、み言葉とともにある生活が実践できると思います。「書く」という作業によっても、持ち歩いて繰り返し「読む」という作業によっても、み言葉の暗記に役立ちます。心に刻まれたみ言葉は、いつかきっとその人を助けるでしょう、聖霊とともに働いて。



テキスト 創世記27章18～29節

〈祝福をだまし取るヤコブ〉

アブラハムの息子イサクとその妻リベカには、エサウとヤコブという双子の兄弟が生まれます。エサウが先に出てきたので、長男となったのですが、後から出てきた弟のヤコブは兄のかかと（アケブ）をつかんでいたの、ヤコブと呼ばれるようになりました（創世記25：26）。

このヤコブはその名のように、生涯二度にわたって兄の足を引っ張り（アーカブ、27:36）、兄の上に立とうとします。

一度は、兄エサウから「長子の権利」を奪ってしまった時です（25：27-34）。エサウは狩人でしたが、疲れ切って野原から帰ってきた時、煮物をしていたヤコブに食べ物を求めます。その時、ヤコブは「まず、お兄さんの長子の権利を譲ってください」と言って、それと引き替えに食物を提供するのです。このようにしてヤコブは先ず兄エサウから長子の権利を奪ってしまいます。

次に、ヤコブは兄エサウから父イサクの祝福をも奪ってしまいます。年老いたイサクがエサウを呼んで祝福を与えようとした時、そのことを母リベカから知らされたヤコブは、エサウになりすまして父親のもとに先に行き、イサクから祝福を得てしまいます。後から来たエサウはこのことを知って、二度もだまされたと怒り、ヤコブを殺してしまおうと図るようになります。ヤコブは、このため父の家から逃げ出し、遠くの親戚の家に行かねばならなくなったのです。

〈神の選び〉

このように、ヤコブが長子の権利や主の祝福を得ようとするやり方は決してほめられたものではありません。主の律法に照らして罪とすら言われ

ばならないものでした。にもかかわらず、主はヤコブを選び、エサウを退けられたのです。主は何を根拠として恵みの救いへとお選びなるのでしょうか。それは神は主権的な恵みの選びとしか言いようのないものです（ローマ9：11-18参照）。

ヤコブは「穏やかな人」であったから選ばれたわけではありません。主はヤコブをその生来の「ずるがしこい」性格にもかかわらず、選び、きよめ、アブラハム、イサクの祝福を受け継ぐ者とされるのです。主はただその主権的な恵みによってヤコブをお選びになったのです。

〈長子の権利を軽んじたエサウ〉

それでは、主はエサウをなぜ退けられたのでしょうか。これもただ神の主権的なご意志によるのでしょうか。もしそうならば、私たちはエサウが選ばれなかったことについて、神さまに責任を押しつけることになります。これは聖書の教えるところではありません。

エサウの側には退けられるべき理由は何もなかったのでしょうか。聖書は、エサウについて、「こうして、エサウは長子の権利を軽んじた」と言っています（創世記25：34）。残念ながら、エサウには主を畏れ、主の祝福を第一に求める信仰的な姿勢が欠けていたのです。それで、ヘブライ人への手紙の著者も、「ただ一杯の食物のために長子の権利を譲り渡したエサウのように、みだらな者や俗悪な者とならないように」と警告しています（ヘブライ12：16）。それは、「神の恵みから除かれることのないように」するためなのです。

私たちは、ヤコブとエサウの物語を神の恵みの選びと同時に、神の警告のメッセージとしても読むべきです。

(宮崎彌男)

テキスト 創世記27章18～29節
参照カテキズム 子どもカテキズム問43、44、13

〔単元のねらい〕

創世記の信仰は、創造と摂理の教理が中核となっています。本日のエサウとヤコブの物語もまた、摂理の神の勝利の証です。しかし、摂理は、神の恵みと人間の応答（信仰）が用いられ、織り成されてまいります。暗唱聖句のヘブライ人への手紙は、エサウを不信仰者、あるいは、信仰によって生き抜くことをやめた俗悪な者と糾弾しています。その通りです。しかし、子どもの心には、同情する思い、また、だましたヤコブへの反発とそれにともなう神へのとまどいも生じるかもしれません。神は、今や、主イエス・キリストにおいて無尽蔵の祝福を与えてくださるゆえ、だましとる必要はない。子どもたちに、御子の犠牲を指し示し、与えられている幸いを気づかせ、熱心に留まり、深めるように励ましたい。

「神さまの祝福より大切なものはない」

神さまに捧げられたイサクは、その後40歳のとき、リベカというお嫁さんが与えられました。イサクさんは一生懸命、赤ちゃんが生まれるように神さまにお祈りしました。そして、ついに60歳のとき、赤ちゃん、しかも双子の兄弟が生まれました。お兄さんはエサウ、弟は、お兄さんのかかどをつかんで、生まれてきたので、「かかど」という意味のヤコブと名づけられました。

二人は、大人になって、それぞれ別々の仕事をしました。エサウは、狩りを、ヤコブは家の周りで仕事をしていました。ある日のことです。エサウは、お腹をべこべこにすかしながら、野原から帰ってきました。家に近づくと、それはそれは、おいしそうなスープの匂いが漂って来ました。もうたまりません。そのお料理は、ヤコブの得意料理の赤いスープです。エサウは、早足で、弟のヤコブの家に急ぎました。そしてすぐに、言いました。「やあヤコブ、ちょうどいい時に、料理を作っているね。僕は、今、獵から帰って、もうお腹がすいて死にそうなんだ。すぐに、そのスープを食べさせてくれ。」

すると待ってましたとばかりに、ヤコブは言いました。「いいですよ、でも、ひとつだけ条件があるのです。」「なんだい、早く言えよ。」「まず、お兄さんの長男の権利、長男の祝福を譲ってくだ

さい。」「なんだい、突然に。でももう死にそうにお腹がすいているんだ、長男の権利なんてどうでもよい、今はお腹を満たすほうが先さ、意地悪しないで、早く食べさせてくれ。」「それなら、お兄さん、今すぐ誓ってください。すぐ、お皿によそってあげますから。」「わかった、誓うよ、誓うよ、長男の権利は、神さまにかけて、お前に譲った。さあ、もういいだろう、早くよこしなさい。」エサウは、ものすごい食欲で、パンと赤いお豆のスープを食べました。

さて、お父さんのイサクは、年をとっていいよ、目もかすんで来ました。そこで、イサクさんは、お兄さんのエサウに、自分がアブラハムから与えられた神さまの祝福を、受け継がせようと思いました。イサクは、エサウに、狩りに出かけて、おいしい料理を食べさせてもらった後で、祝福することを約束しました。

その話を、聞いていたお母さんのリベカさんは、実は、ヤコブの方をかわいがっていました。そして、このように決めました。「何とかしてヤコブに長男の祝福を受け継がせなくては。」そこで、夫のイサクをだますことにしました。

そこでヤコブは、言われるままに、お父さんのところに行きました。「わたしのお父さん」とエサウの声色を真似して、言いました。イサクは、

声を聞いても、誰なのかは分かりませんでした。「誰だ。」「はい、長男のエサウです。」イサクは、信じられません。そこで、言いました。「近寄りなさい。触らせなさい。本当にエサウかどうか、確かめさせなさい。」エサウは、とても毛深い人でしたから、触ればすぐに分かると思ったのです。けれども、そんなこともあるだろうと、リベカは、ヤコブの腕や首に子山羊の毛皮を巻きつけさせていました。「お前は、本当にわたしの子エサウなのだ。」「もちろんです。」そうして、ヤコブが持ってきた料理を食べた後、とうとう神さまの祝福を与えたのです。二人は、まんまとだますことに成功しました。

さて、ヤコブが祝福を受けるとすぐに、今度は、エサウが狩りから戻って、お父さんの大好物のおいしい料理を作って運びました。「お父さん、ただいま帰りました。起きてください。わたしの獲物でつくった料理を食べてください。そして、約束どおり、神さまの祝福をわたしに与えてください。」驚いたのは、イサクです。「お前は誰なのか。」「お父さん、エサウではありませんか。」それを聞くや否や、体を震わせて、言いました。「お前の弟がわたしをだまして、お前の祝福を奪ってしまった。」「お父さん、そんなのずるいです。あいつはなんてひどい男だ、前には、長男の権利を奪い、今は、その祝福を奪ってしまった。」

さて、考えましょう。騙したのは、誰ですか。ヤコブが悪いのではないのでしょうか。ところが、神さまの祝福を受けたのは、このヤコブでした。「何だか、おかしいな、ずるいな」と思っていますね。また、騙されたことを知って、イサクはあらためてヤコブに祝福を与えればよいと思えますよね。でも、イサクはしませんでした。できないからです。神さまの与え、定めてくださった祝福です。祝福を与えるのは、神さまだけだからです。

ただし、ヤコブをその後、とても苦しい人生を

送ることになります。しかしそれでも、ヤコブは神さまの祝福を受けて、事実、イエスさまの血筋の元になったのです。

エサウは、たった一杯のスープのために、神さまの祝福、救いの祝福を、「どうでもよい」と軽く考えました。それが、決定的に、エサウの罪でした。逆に、ヤコブは、必死になって、「どうしても神さまの祝福がほしい、それなしには生きて行けない。それがあれば何にもいらぬ」と、考えたのです。神さまは、このお話を通して、僕たち私たちに何を知ってほしいと願っておられるのでしょうか。もちろん、人を騙しても良いということではありません。大切なことは、神さまは、本当に、真剣に、神さまを求める人、神さまの救い、祝福を第一番に求める人に、お与えくださるということです。神さまは、「あなたも、神さまの祝福、救い、日曜学校に来ることができる特権、恵み、幸せを何よりも感謝しなさい。これを誰にも奪われないようにしなさい」と言ってくださいます。それなら、僕たち私たちは、いい加減な気持ちではなくて、もっと熱い気持ちで、日曜学校に来たいですね。

また、神さまは、こんな人間の悪いたくらみすら用いて、神さまの御業、御心を進めてゆかれるということが分かります。カテキズムにあるように、それを「摂理」といいます。神さまは、先週も、そして今週も、ご自身の御心、ご計画を実現して行かれるのです。この御心、ご計画を壊せるようなものは何もないのです。だから、僕たち私たちは、積極的に、神さまの御心を知って、従ってゆきたいのです。今、神さまの祝福は、イエスさまのおかげで、たった一人の長男だけとか、たった一人の特別な誰かしか受けられないわけではありません。信じるすべての人に与えられるのです。今、先生にも、あなたにも、神さまの祝福がいっぱい与えられていますね。イエスさまの教会に来て、礼拝しているのですから。 (相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] ヘブライ人への手紙12章16節

また、だれであれ、ただ一杯の食物のために長子の権利を譲り渡したエサウのように、みだらな者や俗悪な者とならないよう気をつけるべきです。

〈一週間の準備：これで分級の90%は決まる〉

1) 6/18にお休みの子はどうしてお休みだったんでしょう。次回出席できるようお祈りください。できたら、お手紙を……。2) 6/25の分級で何を話しますか。話す内容を一週間じっくり考えましょう。当然、出席する子供たちの顔を浮かべながら……。教案の準備は祈りではじめましょう。3) 子供たちの成長のために、教会に送り出してくれている家族のみなさんのために祈りましょう。

〈分級では〉

梅雨の時期ですね。でも、子供たちは雨の中、一生懸命教会学校に来てくれます。本当に頭が下がります。幼稚科の生徒さんならなおさらです。大変な天候の中、来てくれた子供たちに礼拝中、“本当によく来てくれた”と感謝の言葉を口に出していうことを忘れてくださいね。また、教会学校が始まる前に、教会の玄関で子供たちを迎えることを是非やってほしいと思っています。子供たちは自分を待っている先生を見て元気

百倍です。だってそうでしょう?、満面の笑顔で、大きく手を振って、みなさんが教会に来るのを待っていてくださるイエス様を想像してみてください。

〈分級のねらい〉

大変子供たちに理解してもらうのに苦慮する箇所だと思います。無理して自分勝手に解釈して子供たちに伝えるのなく、物語を素直に伝え、私たちが神さまのすべてを（当然ですが）理解できないこと、しかし、神さまは、確かに私たちを愛してくれていて、導いてくださっていること、その神さまに従うことの大切さを伝えられたらと願っています。

〈祈り〉

神様は私たちを愛してくださっています。神様にいつも信じて、したがっていくことができますように

工作例

主題：神さまの自由な選び

目的：私たちは神さまの主権の中で生かされている存在です。私たちは、教会にきてみことばを聞けるようにわたしたちを招いた神様に感謝すること、そして神さまのみことばに従えるようにとお祈りしていきましょう。ローマ書9:6～29の陶工と陶器の関係の説明の再現から、私たちが神さまの御手にあることを感じてみましょう。

準備するもの：粘土、粘土細工をするときに下にしく新聞紙

展開例：

- ①教師は子どもが作業を始める前に「牛さんとうさぎさんをつくってみましょう。作り終わったら必ず“これでよしとする”といきましょう」と指示をだします。
- ②それぞれが作り終わったら、教師は次のような指示を出します。「うさぎさんを丸めて、ボールにしましょう」
- ③残った動物の確認と同時に、どうしてうさぎを丸めてボールにするのか（質問がでるとよいのですが）、わかる人がいるかどうか聞いてみましょう。その時、子どもの意見を聞いてみます。先生もそれはわからないということを伝えておくとよいでしょう。神さまの創られたものは皆とてもよかったですという創世記の話を思い出させながら、でも、神さまはあるものは清いものに、あるものは清くないものとわけました（レビ記11章）。ローマ書9:6～29の陶工と陶器の関係のたとえをだしてお話してもよいでしょう。私達にはわからないが、それは神さまがすべて決められたことであることをお話ししましょう。そこでヤコブとエサウのお話をもう一度していくとよいでしょう。

〈ねらい〉

ヤコブはけっして「よい人」ではなかったが、神様はヤコブを選んでくださった。それは、神様が一方的にヤコブを選んでくださったからだということ。

私たちが何もよいことはできないが、神様は選んでくださり、教会に来るといふ「祝福」を与えてくださるといふこと。

〈展開例〉

礼拝で聞いたお話を思い出しましょう。

○ヤコブはお腹のすいているエサウにシチューをあげるのとひきかえに「長子の権利」を手に入れました。また、目がかすんで見えなくなっているお父さんのイサクをだましてお兄さんのエサウのふりをして、神様からの祝福をいただい
てしまいました。

どう考えてもヤコブはずるいですね。それなのに、なぜ、神様はヤコブから「長子の権利」や「祝福」を取り上げなかったのでしょうか。

※それは、ヤコブがどんな人間であっても祝福を与えようと神様が決めておられたからです。神様は「良いことをしたから」「いつも良い子だから」祝福をくださるわけではありません。私たちには知ることのできない理由で、神様は「こ

の子に祝福をあげよう」とお考えになるのです。聖書のつづきを読んでいくと、ヤコブはエソウから祝福をだましとったかわりに、家から逃げ出さなくてはならなくなり、おじさんのラバンのところに行って、ただで働かされたいへん苦勞をします。

「神様の祝福」と言うのは、けっしてお金もうけができたり、遊んで暮らしたりできるということではありません。「神様の祝福」というのは、「神様のところへ行くことができる」といふ約束をいただくことです。

そして、神様は私たちにも良いことはできなくても「この子に祝福をあげよう」とお考えになっておられます。それがどうしてわかるかと言うと、私たちはこうして教会（神様のところ）に来て、神様を礼拝できるという「祝福」をいただいているからです。

〈ちいさなお祈り〉

○私は神様の喜ばれるようなことは何もできませんが、ヤコブに祝福をくださった神様が、私を選んでくださり、「神様のところに行く」といふ祝福を下さっていることを「ありがとう」と感謝しましょう。



〈ねらい〉

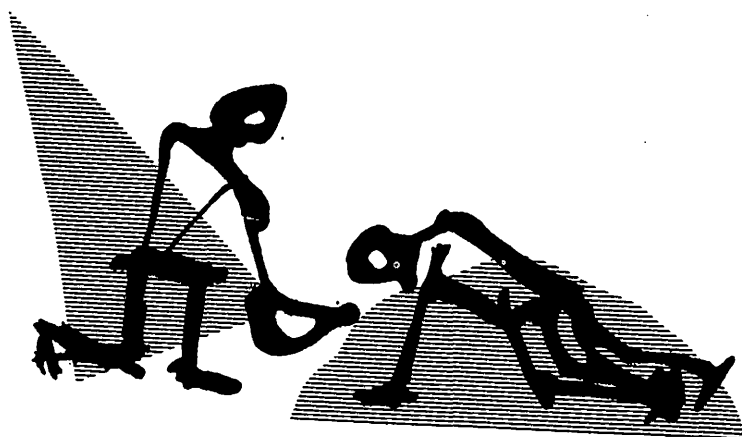
神様を本当に、真剣に求める人に、神様が祝福を与えてくださることを確信し、日曜学校に熱心に出席することができるようにする。

〈展開例〉

1. 今日の話の中で、ヤコブの良いところは何であったのか話し合ひましょう。
2. 今度は、エサウの場合良くないと思う点はなんだったのでしょうか？
3. では、一緒に新約聖書のヘブライ人への手紙12:16節を開いて読んでみましょう。
「また、だれであれ、ただ一杯の食物のために長子の権利を譲り渡したエサウのように、みだらな者や俗悪な者とならないよう気をつけるべきです。」
4. これは、わたしたちが神様からいただく恵みを軽んじては行けないことを教えています。日曜学校に出て、神様の恵みを御言葉を聞くことを何よりも大切にすることを、神様は喜んでくださるのです。
5. 日曜学校を何よりも大切にするためには、どんなことをしなければならないのか一緒に話し合ひましょう。

〈祈り〉

愛する神様。私たちがイエス様を知り、イエス様を信じて、神様の御言葉をいつも与えてくださって感謝します。わたしたちがいつも熱心に日曜学校に出て、神様の御言葉を学ぶことができるように導いてください。しかし、私たちにはエサウのように多くの誘惑があります。そのような誘惑に負けることのないように、神様が信仰の力を与えてください。



〈今日のカテキズム〉

カテキズムをする前に……

☆説教展開例で、最後に、神さまが御心のままにご計画を進めてゆかれることを「摂理」と言うかと語られています。「摂理」についてカテキズムがどう教えているか、確認してみましょう。

ハイデルベルク信仰問答

問27 神の摂理について、あなたは何を理解していますか。

答 全能かつ現実の、神の力です。
それによって神は天と地とすべての被造物を、いわばその御手をもって、今なお保ちまた支配しておられるので、木の葉も草も、雨もひでりも、豊作の年も不作の年も、食べ物も飲み物も、健康も病も、富も貧困も、すべてが偶然によることなく、父親らしい御手によってわたしたちにもたらされるのです。

問28 神の創造と摂理を知ることによって、わたしたちはどのような益を受けますか。

答 わたしたちが逆境においては忍耐強く、順境においては感謝し、将来についてはわたしたちの真実な父なる神をかたく信じ、どんな被造物もこの方の愛からわたしたちを引き離すことはできないと確信できるようになる、ということです。
なぜなら、あらゆる被造物はこの方の御手の中にあるので、御心によらないでは動くことも動かされることもできないからです。

ウェストミンスター小教理問答

問11 神の摂理の御業とは、何ですか。

答 神の摂理の御業とは、神が、最もきよく、賢く、力強く、すべての被造物とそのあらゆる動きを保ち、治めておられることです。

〈今週の聖書日課〉

日曜日 創世記27：18～29
月曜日 創世記27：30～40
火曜日 ヘブライ11：20
水曜日 ヘブライ12：16～17
木曜日 詩編55：23
金曜日 箴言21：1～2
土曜日 詩編145：17



第1課 窮乏感覚をもって祈る

1. 祈りの修練

日本の教会で、一般に「修養会」と言っているところを、韓国の長老系諸教会は「修練会」と呼んでいます。「修養」と聞けば、普通の日本語の感覚からすると、人格を高めることを思い浮かべますが、「修練」となりますと、自分自身を磨き鍛える厳しさに思い至り、身の引き締まるのを覚えます。

信仰の進歩は、祈りの修練によって加速されます。宗教改革者J・カルヴァンは、『キリスト教綱要』第3篇第20章で、多くのページを費やして祈りについて述べていますが、その章の表題は次のとおりです——「祈りについて。これは信仰の修練の主要なものであり、われわれはこれによって日々神の恵みを受けるのである」。この表題が示すとおり、カルヴァンは、祈りをもつば修練の角度からとらえ、祈りの実行を勧め、祈りの体験を深めるように、と励ましています。

若いときからのことを振り返りますと、私が祈りについて最も深く教えられてきたのは、この第20章でした（渡辺訳で全80ページ）。それに並ぶのが、同じカルヴァンの書いた『ジュネーヴ教会信仰問答』第3章「祈りについて」です（問233～295）。以下、この両書をたどる形で、私の体験をも交えながら、祈りの生活を究める道を考えていきたい、と願っています。

これから一年にわたる学びにあたって、ぜひ次の個所を詳しく読み合わせてください。

- ・『ウェストミンスター信仰告白』第21章
- ・『同大教理問答』問178～196
- ・『同小教理問答』問98～107
- ・『ハイデルベルク信仰問答』問116～129

2. 祈りに求められる窮乏感覚

60年も前のことになりますが、戦中・戦後の食糧難は、思い出してもひどいものでした。さつまいものつるや葉は、貴重なおかずでした。耐乏生活は、衣食住のすべての面に及びました。「困窮」の

「窮」と「欠乏」の「乏」を組み合わせで造った「窮乏」は、辞書を引いて出てくる語ではなく毎日の現実そのものでした。「困苦（くるしみ）にあひたりしは我に善きことなり」（詩篇119:71文語訳）との霊的真理を悟ることに連なる経験であった、と今にして思います。

祈りの法則として窮乏の意識のことを特に挙げるカルヴァンは、次のとおり言います——「祈りにさいして、自分自身の窮乏を真に意識し、また求めるすべてのものにどんなに乏しいかを真剣に考え、それを得ようとの真剣な、いや燃えあがるような感情を、祈りそのものに結び合わすということである」（『綱要』3:20:6）。神の前に、自分の罪と汚れと惨めさを深く知り、自分の欠乏を率直に認めるところから、神への求めである祈りが湧き出ます。窮迫の度合いを計り知れば知るほど、祈りは研ぎ澄まされます。

「満ち足りた腹からは、いかなる鋭い思想も出てはこない」と言った人があります。飽食と美食の時代のただ中であって、信仰の角度から心して聴くべき言葉です。窮乏感覚が鋭敏になればなるほど、神の赦しと恵みを求める思いは熱烈となります。「すべて祈ろうと備えをするものは……乞食（こじき）としての位置と感情とを持つべきである」とまで、カルヴァンは言いました（『綱要』3:20:7）。「乞食」とは、大胆すぎるたえでしようか。他人から食べ物を恵んでもらわなければ生きていくことができない立場の人のことを思うならば、なおさらのこと、自分の霊的窮乏と悲惨とを徹底的に認識して、求める者に惜しみなく与えてくださる神の顔の前にへりくだらなければなりません。

窮乏の意識は、罪を悔いる心に直結されていきます——「わたしたちは……自分自身の無価値と窮乏と罪との深い意識をもって、罪を悔いる、感謝に満ちた、広い心をもって……祈らなければならない」（『ウェストミンスター大教理問答』問185）。人を神の裁きの前に立たせる意識こそ、霊的生活を生き生きと維持するに必要なセンスであります。悔い改めをもって祈ることについては、

第2課で詳しく述べることにします。

3. 「あわれなみみず」「わたしは虫けら」

主イエスの仲保によって神に近づき、恵みを見いだすことのできる確かさを明らかにする文脈において、『ジュネーヴ教会信仰問答』問250は次のとおり言います——「あわれなみみずであり、また惨めな罪人にすぎないわれわれが、神の輝く尊厳のまえに進み出ることを恐れないように、神はわれわれの主イエスを仲保者としてお与えになるのであって……」（1963年外山訳）。「あわれなみみず」は、1937年の外山訳では、「惨めな虫けら」となっていました。1989年の渡辺訳では、「うじ虫のようなもの」とあります。

詩篇がカルヴァンに及ぼした影響は計り知れないものがあります。わけても、カルヴァンのダビデへの沈潜は著しいものでありました。『綱要』の中で、ダビデへの言及を重ねていることは、特筆すべき事実であり、そのことからカルヴァンが自分の生涯を、「ダビデのまねび」として位置付けていたことが分かります。ダビデのうちに、あたかも鏡に映して見るように、自分の来し方を静思する、と述べるとともに、ダビデにかかわるすべてのことが、模倣すべき範例として神から自分に与えられている、とカルヴァンは明言しています（『詩篇注解』序文）。カルヴァンが、詩編を瞑想することを常としたことは、もっぱらダビデの瞑想に倣う事でありました。

わたしたちを祈りへと励ますにあたって、その役割を果たすことは何であれ、詩編に教えられている、とカルヴァンは明言しています。『ジュネーヴ教会信仰問答』問250で、惨めな罪人のことを「あわれなみみず」にたとえたのは、わたしの推測によれば、詩編22:7でダビデが「わたしは虫けら、とても人とはいえない。／人間の肩、民の恥」と言っていることに基づいています。「虫けら」には、ほかに次の用例があります。「まして人間は蛆虫（うじむし）／人の子は虫けらにすぎない」（ヨブ記25:6）、「恐れるな、虫けらのようなヤコブよ／イスラエルの人々よ、わたしはあな

たを助ける」（イザヤ書41:14）。「虫けら」は虫を卑しめて言うのに用いられる語です。

敵の嘲りに遭ってダビデが自分に問うたのは、このような苦難に遭うのはなぜか、という解き難い課題でした。それでもなお、ダビデは神を「わたしの神よ」と呼び続け（2、3、11節）、神の契約の真実に依り頼み（6節＝あなたに依り頼んで、裏切られたことはない）、神の確かさのうえに、救いを求める祈りを四重の表現をとってささげています。

- ①わたしを遠く離れないでください（20節）
- ②今すぐにわたしを助けてください（20節）
- ③わたしの魂と身を救い出してください（21節）
- ④わたしに答えてください（22節）

ダビデの窮乏感覚は、神を「わたしの力」（20節）と呼ぶ信仰に固く結ばれ、最終的には、次の告白と賛美へと昇りつめます——「主は貧しい人の苦しみを／決して侮らず、さげすまれません。／御身を隠すことなく／助けを求める叫びを聞いてくださいます」（25節）。窮迫の日に主を呼べば、主は救ってくださいます（詩編50:15）。窮乏の意識に促されて、わたしたちの祈りは熱く燃え立ちます。

まことに、詩編は敬虔の宝庫であり、祈りの半び舎であります。カルヴァンを手本として、詩編をとおしてダビデのまねびに精進したい、と願います。詩編は、あらゆる時代の信徒を敬虔の修煉へと励まします。ダビデと二人きりになるときに神のもとへと逃がれ、神のふところに憩うことに習熟する者となります。祈りの体験を積むことによって、神に近くあることを実感できる者となります。カルヴァンは大胆にも、「神を実感する」と言っています。特に「神の現臨を実感する」と表現するところに、カルヴァンの信仰の息吹がほとばしり出ています（『綱要』1:1:3）。

【宿題】 詩編55編ダビデの詩を熟読し、窮乏感覚を表す語に注意しなさい。18節「夕べの朝も、そして昼も」とダビデの言うところを、自分の祈りの生活への励みとしなさい。（石丸新）

第2課 悔い改めをもって祈る

1. 悔い改めて神に近づく

「わたしは心を尽くして主に感謝をささげ／驚くべき御業をすべて語り伝えよう」と、ダビデは歌いました（詩編9:2）。神を信じる者にとって、祈りだけではなく、全生活が感謝であることは、「命のある限り、わたしは主を賛美し／長らえる限り／わたしの神にほめ歌をうたおう」と、旧約の信徒たちが言うとおりで（詩編146:2）。

『ハイデルベルク信仰問答』116は、祈りを、「神がわたしたちにお求めになる感謝の最も重要な部分」と位置付けています。しかし、同じ問答で、神が与えようとなさる恵みと聖霊とを、「心からの呻（うめ）きをもって」請い求めるべきことが明言されているのに注目しなければなりません。祈りにおいて神に近づくにあたっては、まず悔い改めることが必要です。

祈りから遠ざかっている自分を見いだすときには、何をおいても、自分の罪を悔い改めて、神に近付きましょう。自分の息情を認め、これを率直に告白して神の赦しを願いましょう。赦されたとの確信から、もろもろの感謝がほとぼり出ます。『ウェストミンスター小教理問答』98は、祈りとは、わたしたちの願いを神にささげることであり、と定義しています。願いをささげるにあたり、わたしたちに求められているのは、第1に、わたしたちの罪のざんげであり、第2に、神のあわれみへの感謝です。この順序は大切です。罪の告白についての証契聖句であるダビデの言葉を、口に出して、自分の言葉としてください——「わたしは言いました／『主にわたしの背きを告白しよう』と。／そのとき、あなたはわたしの罪と過ちを／赦してくださいました」（詩編32:5）。罪を隠すところには、祈りは成り立ちません。

2. 危機意識をもって嘆願する

生ける神への畏（おそ）れを抱くところに、霊性の修練が重ねられ、聖書の求める敬虔の深みに達することができます。窮乏の意識は、常に人を

神の聖なるみ顔の前に立たせ、神の裁きを畏れさせます。自分自身の無価値と窮乏と罪との深い意識を持つ者は、直ちに神のもとへと急ぎ、赦しときよめとを、ひたすら祈り求めます。窮乏の意識は、危機意識を生み出し、切迫感をもって神のふところに走り込むように、とわたしたちを促します。「危機管理能力」としきりに言われていますが、神の裁きによって滅ぼされることを最も強く恐れるわたしたちは、叫びの声を挙げて、嘆き祈るほかありません。

祈りは、嘆願です。信仰者たちは、神の父としての愛を確信し、神の誠意に自分を委ね、神が約束された助けを懇願する、と言ったカルヴァンは、「己れを低くすることにおいて歎願者であり続ける」と、祈る者の姿を描き出しました（『綱要』3:20:14）。「あわれなみず」である惨めな罪人は、その惨めさと無力のゆえに、神に声を上げるほかありません。子どものときに、静かな夜、土の中でみみずの鳴く声を聞いた記憶がよみがえってきます。

『ハイデルベルク信仰問答』117が、ただ主キリストのゆえに祈りが確かに聞き入れられることの根拠として挙げた聖書箇所の一つが、ダニエル書9:17～19でした。『ウェストミンスター大教理問答』180が、キリストのゆえにあわれみを願うことの根拠としたのも、同じくダニエル書9:17でした。ダニエルの祈りは、切迫感に発するものであり、そこには、鋭い罪の告白に基づく激しい嘆願が込められています——「わたしたちの神よ、僕（しもべ）の祈りと嘆願に耳を傾けて、荒廃した聖所に主御自身のために御顔の光を輝かしてください。「わたしの神よ、御自身のために、救いを遅らせないでください」（9:19）とのダニエルの祈りは、神の助けのもとに急ぐ者の息遣いを伝えています。

悔い改めなしに祈ることはできません。今から35年も前のことです。ヤスクニ闘争に従事していたときに、仙台教会で共に読んだのが、ダニエル書9章でした。ダニエルが、父祖の罪と自分たちの罪とを告白したことに、日本の教会と日本人の

犯した罪の告白を重ねて、神の赦しを請い、聞いた力をいただきました。エズラも、先祖の時代から今に至るまでの罪惡を告白し、ただ神の憐れみを願ひ求めました（エズラ記9章）。ネヘミヤ記にも、イスラエルの人々が、自分たちの罪科と先祖の罪惡を告白したことが記されています（9章）。ダニエル書、エズラ記、ネヘミヤ記のいずれも同じ第9章に、罪の告白と赦しの嘆願が置かれていることに、わたしは特別の思いを抱いています。

3. へりくだりをもって祈る

「わが神よ、御前に恥じ入るあまり、わたしは顔を上げることができません」との言葉をもってエズラは祈りはじめました（エズラ記9:6）。ひざまずいたまま、主に向かって手を広げての祈りの姿でした（同9:5）。民の罪と悪事の実情を知らされたエズラは、衣とマントを裂き、髪と毛とひげをむしり、ぼう然として座り込むばかりでありました（同9:3）。

祈りの学校において、わたしたちは、へりくだりを身に着けることを学びます。「皆互いに謙遜を身に着けなさい」と、ペトロは勧めて言います（ペトロー5:5）。神の前に自分を低くすることを基本姿勢とする者こそ、人の間で謙遜に振る舞うことができます。謙遜は、コートや羽織るような簡単なことではありません。謙遜とは、ずり落ちることのないように、腰のところにしっかりと引きつけておくべきズボンのようなものです。

罪の告白をもって神に近づく者は、へりくだりをもって罪の赦しを願う者にほかなりません。真実にへりくだる者を、神は退けることなく、打ち砕かれて悔いる心を受け入れてくださいます。徹底的に打ちのめされ、低くされた者の祈りを、神が必ずや聞き届けてくださるとの確かな希望が、わたしたちの祈りを燃え立たせます。主イエスのたとえ話に登場する徴税人は、自分の罪を心から認めた結果、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら言いました——「神様、罪人のわたしを憐れんでください」（ルカ18:13）。人は、大切な

ときには、多くを語りません。凝縮された言葉にその人のすべてが込められています。

祈りにおいて神に嘆願することができるのは、神が憐れんでくださるとの確信が基礎となっているからです。神の赦しを避けどころとするほか、自分は立ち得ないと知っているからです。ダビデの祈りをなぞるようにして、ただ神の憐れみを祈り求めましょう——「主よ思い起こしてください／あなたのとこしえの憐れみと慈しみを」（詩編25:6）。まことの救い主イエス・キリストの十字架の血による罪の赦しと、罪からのきよめにあずかっているわたしたちは、ヨハネの証言を自分の告白として、大胆に神に近づくことを許されます——「自分の罪を公に言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、罪を赦し、あらゆる不義からわたしたちを清めてくださいます」（ヨハネ1:9）。

ダビデは、来たるべき約束のメシアを望み見て祈りました。既に来られたメシア・イエスの十字架の血による贖いにあずかっている新約時代の信者は、へりくだって自分の罪を言い表すとき、キリストにある神の恵みの理解の上に、罪の意識を一層深いものとし、命に至る悔い改めとは何かを問う『ウェストミンスター小教理問答』87では、自分の罪の真の自覚と、キリストにある神の憐れみの理解とが、切り離されないものとして、一つに結ばれています。十字架の血の値を理解するときに、自分の罪の自覚は一層深められます。罪から立ち帰る悔い改めは、み子をも惜しまずして罪人のために与えてくださった神の憐れみの理解の上に、救いの恵みとして与えられます。

キリストにある神の憐れみを理解する者は、このキリストを見つめ、このキリストが仲保者として生きて働いておられることを信じ、このキリストのみ名によってささげる祈りが聞かれることを確信して、祈りの生活に励みます。それが次の課の主題です。

【宿題】 詩編51編ダビデの詩を熟読し、自分の罪を言い表す語と、神の赦しを言い表す語を書き出さない。
（石丸新）

第3課 キリストのみ名によって祈る

1. 仲保者イエス・キリスト

窮乏の意識のあるところに、神の憐れみを嘆願する祈りが注ぎ出されます。惨めな罪人を「あわれなみみず」にカルヴァンがたとえたことは、第1課で見たとおりです。その語が用いられている『ジュネーヴ教会信仰問答』250では、そのような存在であるからこそ、神の前に恐れなく進み出ることができるようにと、神は主イエスを仲保者として与えてくださることが確言されています。この個所の参照聖句の一つであるヘブライ人への手紙4章16節は、大祭司である神の子イエスの仲保者としての働きに信頼すべきことを力強く訴えています——「だから、憐れみを受け、恵みにあずかって、時宜にかなった助けをいただくために、大胆に恵みの座に近づこうではありませんか」。

祈りが信仰から出るということは、神の真実に信頼を置くところから、神を呼び求めるということです。神の真実への信頼から、祈りは聴かれるとの確信が生まれるのです。神と信者の間に立って、信者の祈りを確かに神に届けてくださることが、信者にとっての希望のいしずえです。主は生きて働いておられます。神と人との間の仲介者はキリスト・イエスただおひとりなのです（テモテニ1:5）。

2. 執り成しの主イエス・キリスト

キリストが仲保の業をなさるその道筋を表すのが、「執り成し」の語です。仲保と執り成しは、互いに深い関係を持つ語で、信者の祈りにかかわる復活のキリストの働きについて言えば、ほとんど同じ意味である、と考えてさしつかえありません。天上にあって、神の右に座しておられるイエス・キリストのみ名によって祈るならば、キリストの執り成しによって、わたしたちの願いが聴き入れられることが約束されています。主イエスは言われました——「わたしの名によって願うことは、何でもかなえてあげよう」（ヨハネ14:13）。

使徒パウロは、復活のキリストによって、使徒

として立てられました。パウロが、死に勝利して復活させられたキリストに常に目を注いでいたことは、パウロ自身の書き送るところから明らかです——「だれがわたしたちを罪に定めることができます。死んだ方、否、むしろ復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座していて、わたしたちのために執り成してくださるのです」（ローマ8:34）。祈りが聴かれること確かさは、ただキリストにあります。『ジュネーヴ教会信仰問答』251が明らかにしているのが、このキリストの執り成しの働きです。

3. 弁護人イエス・キリスト

同じ問答の252に現れるのが、「弁護人」の語です。復活のキリストは、わたしたちを弁護するという仕方、執り成しの働きをされます。弁護人である主イエスは、わたしたちに先だって進んでくださり、常にわたしたちに寄り添ってくださり、そのことによって、わたしたちが祈りにおいて神に親しく呼び掛けることができるようにしてください。この問答が「われわれはあたかも彼（キリスト）の口によって祈るようなものでありますから」とまで言っていることに、わたしは特に心の引き締まるのを覚えます。キリストへの集中こそ、祈りの基本姿勢です。父なる神は、愛する御子をさえ惜しまずに、わたしたちに与えてくださいました。わたしたちは、ただ御子を見つめます。

父なる神が与えてくださった唯一の仲保者は、かけがえのない弁護者であります。ヨハネは、次のとおり証言しています——「……たとえ罪を犯しても、御父のもとに弁護者、正しい方、イエス・キリストがおられます」（ヨハネ2:1）。贖罪の業を十字架の上で成し遂げ、天に昇り、父なる神の右に座しておられる復活のキリストは、確実に教会の保護者として、弁護人の職務を遂行しておられます（『綱要』3:20:18）。神の前に出すべき言葉をも知らないわたしたちに、祈りの言葉を授けてくださるのが、導き手であるキリストです。

「弁護士」の「弁」は、わたしが小学校で習ったときには、「辯」と書いていました。当用漢字、常用漢字では、「弁」となっていました。考えてみれば、弁護士の「弁」が、弁当の「弁」と同じであるのは、いかにも惜けないことです。ちなみに弁当の「弁」は、旧漢字では、「辯」と書いていました。旧漢字で育ったわたしにとっては、聖書を読んでも考えさせられことがしばしばです。

「辯」には、「言」の字が含まれています。じつは、それが中心を成しています。「護」は、ごんべんですから、当然のこととして、言葉をもって助けることを意味しています。「人權の擁護」と言われます。「擁」は手へんで、「護」はごんべんです。助けを必要とする人に寄り添い、手を回し、手で抱えるようにしてかばうことが、「擁」の意味するところです。主イエスのたとえ話に登場する善いサマリア人は、追いはぎに襲われて横たわっている人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱しました。ここには、手をもってなす業がこと細かに記されています。よく見れば、介抱の「抱」も手へんです。このサマリア人は、翌日、銀貨二枚を宿屋の主人に渡して、介抱を依頼し、費用がもっとかかった場合には、帰りがけに払いますと言った、と記されています。サマリア人の言葉には、行き届いた愛が込められています。手へんとごんべんの巧みな複合を見る思いのする個所です（ルカ10：25～37）。

十字架の上で血を流し、全き贖いとなってくださった、わたしたちの救い主イエス・キリストは、ご自分のもとから聖霊を遣わすという方法を用いて、弁護の働きを現になしておられます。共生の時代に生きるわたしたちは、だれのために手を開き、だれのために口を開くかを問われています。救い主イエスは、イエスに従う者に、「わたしはあなたがたを友と呼ぶ」と厳かに断言されました（ヨハネ15：15）。そればかりではありません。主

は言われます——「わたしはあなたがたをみなしごにはしておかない」（ヨハネ14：18）。天に昇られた主イエスが、信じ従う者と共にいますという不動の祝福を確保するために、主は恵みに満ちた約束をなさいました——「わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護士を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてください」（ヨハネ14：16）。重ねて言われました——「弁護士、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる」。さらに言われました——「わたしが父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護士、すなわち、父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方がわたしについて証しをなさるはずである」（ヨハネ15：26）。

教会の時代は、栄光の座に着かれたキリストがご自身の聖霊によって働かれる時代です。いつ、どこに生きる信者に対しても、復活のキリストはご自身の遣わす聖霊によって、生きた関係に立ってください。復活のキリストは、ご自身の血をもって買い取った教会のかしらとして、教会を愛し、養い、清め、訓練してくださいます。キリストの守護は完全です。それは、終末の完成を目指して、今も、一人ひとりの信者の中で生き生きとなされています。

【宿題】『ジュネーブ教会信仰問題』250を、「大胆」をキーワードとして精読し、主イエスの仲保の業に思いを沈めなさい。「大胆さ」と「親しさ」が結ばれていることにも注意しなさい。なお、252にも「親しさ」が言われることに留意しなさい。

これを受ける形で、100年後の『ウェストミンスター大教理問題』180が、キリストの仲保から「励まし」「大胆さ」「力」「望み」を引き出すべきことを明らかにしていることに着目しなさい。

ヘブライ人への手紙4章14～16節を繰り返し読みなさい。（石丸新）

いのちのパン

日曜学校のお友達へ

神さまは、僕たち私たちに、毎日、朝とお昼と夜に、
—それだけではなく、おやつも！—

おなかいっぱいにおいしいお食事をくださいます。

「日用の糧を今日もあたえたまえ」とお祈りしているからだよ。

だから、心から感謝して、これからもお祈りしようね。

そして、感謝して、「好き嫌い」をいわないでいただきますよう！

イエスさまは、悪魔のゆうわくとたたかわれたとき、こうおっしゃいました。

「人はパンだけで生きるものではない。

神の口からでる一つ一つの言葉で生きる。」(マタイによる福音書第4章4節)

また、あるところで、イエスさまは、こう教えて下さいました。

「わたしが命のパンである。」(ヨハネによる福音書第6章35節)

イエスさまが、いのちのパンなのです。

それなら、イエスさまを食べるとどんなことなのでしょう？

それは、毎日、聖書のみことばは、聴いて、読んで、心に信じて生きることです。

イエスさまを信じて、いのちのパンを食べることです。

さあ、それぞれ進級して、新学期が始まります。

これから、毎日、少しでも、お友達といっしょに、せんせいたちといっしょに、

みことばを讀んでお祈りして行こう！

君のためにつくったこの聖書日課、

「いのちのパン」りやくして「いのぼん」を使ってくれるとうれしいな。

いのちのばん

4月3日(月) そうせい き しょう せつ 創世記 1 章 1 節

はじめに、神は天地を創造された

神さまは、すべてのものと共に、「初め」も造りになりました。つまり時間を造られました。「初め」を造られた神さまは、それを完成させるために、今も生きて働いてくださるのです。



4月6日(木) そうせい き しょう せつ 創世記 1 章 27 節

神はご自分にかたどって人を創造された

人間は、神さまそっくりに造られました。それは神さまが一人でありながら、父・子・聖霊の交わりをもっておられるように、交わりに生きる者として造られたということです。わたしたちも交わりに生きていきましょう。

4月4日(火) そうせい き しょう せつ 創世記 1 章 3 節

「光あれ。」こうして、光があった

神さまは暗闇の中に、「光あれ」と命じて、光を造られました。そのようにわたしたちの暗い心にも、「光あれ」と言って、希望の光を輝かせてくださるのです。



4月7日(金) そうせい き しょう せつ 創世記 1 章 31 節

見よ、それはきわめて良かった

神さまがお造りになったものは、「きわめて良かった」ものばかりでした。だから「感謝して受けるならば、何一つ捨てるものはない」のです(テモテ 4 章 4 節)。



4月5日(水) そうせい き しょう せつ 創世記 1 章 5 節

夕べがあり、朝があった

聖書の一日は、夕べから始まって朝を迎えます。わたしたちは希望の朝から始まって、悲しみや不安の夕べを迎えますが、神さまは、悲しみに包まれ不安を抱える夕べを、希望の朝に変えてくださいます。

4月8日(土) そうせい き しょう せつ 創世記 2 章 2 節

第七の日に、神は、安息なされた

第七の日は、「夕べがあり、朝があった」となっていません。第七日は、まだ続いており、神さまは「安息」が完成されるように、働いておられるからです。わたしたちも、この神さまの「安息」の完成を目指して、今日を生きています。

いのちのぼん

4月10日(月) そうせいぎ せつ せつ
創世記2章7節

その鼻に命の息を吹き入れられた。

人間は神さまの息である聖霊を吹き入れられたことで、「生きる者」になりました。わたしたちの命の源は、神の霊です。今日も聖霊に心が満たされて、命にみなぎるように祈りましょう。



4月13日(木) そうせいぎ せつ せつ
創世記4章7節

罪は戸口で待ち伏せている。お前はそれを支配せねばならない

罪はわたしたちの心で、わたしたちを捕まえようとしています。わたしたちは、罪に捕まえられないように、罪に打ち勝たなければなりません。



4月11日(火) そうせいぎ せつ せつ
創世記2章18節

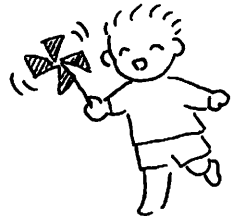
人が独りであるのは良くない

神さまに似せて、神さまの像に造られた人間は、交わりの中で生きていきます。だから一人よがりには、一人ぼっちで生きるのには、人間にふさわしくありません。良い友が与えられることを求めましょう。

4月14日(金) そうせいぎ せつ せつ
創世記9章1節

産めよ、増えよ、地に満ちよ

大洪水の後、神さまは、生き残った人間と動物たちを祝福してくださいました。「産めよ、増えよ、地に満ちよ。」今もわたしたちは、この神さまの祝福の中に守られているのです。



4月12日(水) そうせいぎ せつ せつ
創世記3章9節

どこにいるのか

人間は神さまの戒めを守らず、神さまから離れてしまいました。神さまはわたしたちがどこにいるかを知ておられますが、それでもわたしたちを求められます。「あなたはどこにいるのか」と。

4月15日(土) そうせいぎ せつ せつ
創世記12章2節

わたしはあなたを祝福し、あなたの名を高める。祝福の基となるように

神さまはアブラムに、「祝福の基」となる祝福を与えられました。わたしたちも同じ祝福の中に置かれています。わたしたちも神さまの祝福を伝える源となるのです。

いのちのばん

4月17日(月) 創世記22章8節

小羊はきっと神が備えてくださる。

アブラハムは、「主の山に備えあり」と
神さまを信じ、神さまは、アブラハムの
必要を満たしてくださいま
した。神さまは、わたしたち
の必要をも満たして、備えて
くださる方なのです。



4月20日(木) 創世記35章3節

苦難の時に答えてくださった神

ふるさとに帰ってきたヤコブは、神さ
まが約束を果たし、苦しいときにも共に
いてくださったことを
感謝しました。神さま
は、苦しいときわたし
たちに答えてくださる
神さまなのです。



4月18日(火) 創世記26章3節

わたしはあなたと共にいて祝福し

祝福の源とされたアブラハムの祝
福は、イサクにも引き継がれます。神さ
まの祝福とは、神さまがイサクと共に
いて、守ってくださるということでした。
同じ神さまがあなたと共にいてく
ださいます。

4月21日(金) 創世記39章2節

主がヨセフと共におられたので

ヨセフは兄さんたちの悪だくみでエ
ジプトに売られてしまいます。しかし
神さまは、ヨセフと共に
いて守り、祝福されま
す。そして彼が何をして
もうまく事を運んでくだ
さるのでした。



4月19日(水) 創世記28章15節

どこへ行ってもあなたを守る

「わたしはあなたと共にいる」という
祝福を、ヤコブも受け継ぎます。神さ
まはヤコブに、「あなたがどこへ行っ
てもあなたを守る」と約
束されました。神さまは
あなたをも、決して見
捨てません。



4月22日(土) 創世記50章20節

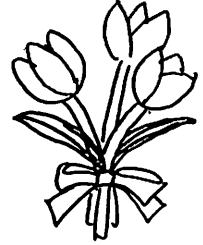
**あなたがたはわたしに悪をたくらみ
ましたが、神はそれを善に変え**

兄さんたちはヨセフにひどいことを
し、そのためにヨセフは苦しみました。
けれども神さまは、ヨセフの苦しみを
喜びに、兄さんたちの悪も善に変えて
くださる、生けるまことの神さまなので
す。

いのちのばん

4月24日(月) 出エジプト 2章 24節
神は、契約を思い起こされた
 神さまは、奴隷としてこき使われ、苦しんでいたイスラエルの人々を救い出されますが、それは彼らの先祖と結ばれた約束に基づいてでした。神さまの救いは、約束に基づいて与えられます。だから、確かに確実な救いなのです。

4月27日(木) 出エジプト 3章 14節
わたしはある
 神さまはモーセに、ご自分の名を教えられました。「わたしはある」が、その名前です。それは、わたしたちをも「ある」ように、立たせてくださる、生ける神さままだということなのです。



4月25日(火) 出エジプト 3章 7節
民の苦しみをつぶさに見た
 わたしたちが苦しむとき、それを神さまはごぞんじないのではありません。神さまは、わたしたちの苦しみをちゃんと見てくださり、それに応えて救われるのです。

4月28日(金) 出エジプト 4章 11節
一体、だれが人間に口を与えたのか
 イスラエルを導くようにと招かれたモーセは、自分はうまく話せないとしりごみます。そのモーセに神さまは、「だれが人間に口を与えたのか」と言われました。神さまは、わたしたちの弱さや足りなさを、おぎなってくださる方なのです。



4月26日(水) 出エジプト 3章 12節
わたしが必ずあなたと共にいる
 イスラエルを救うようにと招かれたモーセは、自分にはできないとしりごみます。そのモーセに神さまは、「わたしが共にいる」と約束されました。神さまは、あなたと共にいてくださるのです。

4月29日(土) 出エジプト 6章 7節
わたしはあなたたちの神となる
 神さまは、強くて立派な人々の神ではなくて、小さくて弱い人々の神となってくださいました。弱さに苦しむ人の悩みを知り、助けてくださる神さまなのです。神さまは、わたしたちをも、助け導いてくださいます。



いのちのばん

5月1日(月) 出エジプト13章21節
主は彼らに先立って進み

どの道を進んだらよいか分からないイスラエルの人々のために、神さまが先に立って、進むべき道を示してくださいました。神さまは、わたしたちの進むべき道をも導いてくださるのです。



5月4日(木) 出エジプト19章4節
わしの翼に乗せて連れて来た

神さまは、まるでわしが、ひなを翼に乗せて運ぶようにイスラエルを守ってこられました。わたしたちをも、「父が子を背負うように」守ってくださるのです(申命記1章31節)。



5月2日(火) 出エジプト14章14節
主があなたたちのために戦われる

後ろからエジプト軍が迫ってきて、イスラエルの人々は絶体絶命のピンチでした。前は海で逃げられません。しかし神さまは約束されました。神さまが、彼らのために戦ってくださると。わたしたちは、ただじっと静かに待ち、神さまの守りを信じるだけでよいのです。

5月5日(金) 出エジプト19章5節
わたしの宝となる

神さまは、奴隷として苦しんでいた、小さくて弱いイスラエルの人々を見捨てることなく、むしろご自分の宝物としてくださると言われました。わたしたちも、神さまの宝とされるのです。



5月3日(水) 出エジプト15章2節
主はわたしの力、わたしの歌

だめかと思ったところで、神さまが助けてくださいました。助けられたことを知ったイスラエルの人々は「主はわたしの力」と歌いました。神さまはわたしたちの助けとなってくださる方なのです。

5月6日(土) 出エジプト20章2節
あなたを奴隷の家から導き出した神

神さまとは、イスラエルを奴隷の苦しみから解放し、救い出してくださいました。恵みの神でした。つまり救い主であり、助け主なのです。だからわたしたちは、神さまに感謝し、神さまに従って生きていくのです。

いのちのぼん

5月8日(月) 出エジプト23章20節

あなたの前に使いを遣わして

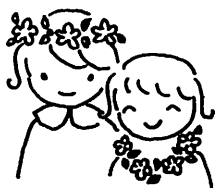
神さまは、わたしたちの進む前に、天使を遣わして、わたしたちを守り、導いてくださると約束されます。今日も神さまは、あなたのもとに天使を遣わして、あなたを守ってくださるのです。



5月11日(木) 出エジプト34章6節

憐れみ深く恵みに富む神

神さまに背いたイスラエルを、それでも神さまはゆるされます。なぜなら「憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、慈しみとまことに満ち」た方だからです。恵み深い神さまに感謝しましょう。



5月9日(火) 出エジプト25章8節

わたしは彼らの中に住むであろう

聖なる神さまが、罪あるわたしたちのところに来て、共に住んでくださると約束されました。幕屋とは、わたしたちのことです(コリントー3章16節)。神さまはわたしたちと共にいてくださるのです。



5月12日(金) 出エジプト34章14節

主は、熱情の神である

「熱情の神」とは、「ねたむ神」だということです。「ねたむ」ほど、神さまはわたしたちを愛してくださっているということです。わたしたちも、神さまを心から愛していきましょう。



5月10日(水) 出エジプト32章4節

これこそ、あなたの神々だ

イスラエルの人々は、てっきり自分たちを導いてこられたまことの神だと思って、金の子牛を拝み、偶像礼拝をしました。わたしたちも気づかないで、偶像礼拝をすることがあるかもしれません。いつも正しく、まことの神さまを知り、礼拝していきましょう。

5月13日(土) 出エジプト40章34節

主の栄光が幕屋に満ちた

荒れ野でイスラエルを導いた雲は、そこに神さまが共にいてくださることの目に見えるしるしでした。それが幕屋に満ちたとは、神さまがイスラエルを喜び、祝福してくださっているということです。神さまは、わたしたちをも導き、祝福してくださっているのです。

いのちのばん

5月15日(月) レビ記11章44節

自分自身を聖別して聖なる者となれ

聖とは、完全無欠ということではなくて、神さまのために用いられるということです。わたしたちも、これからは神さまのために生き、神さまの喜ばれることをするとき、聖なる者となるのです。



5月18日(木) レビ記20章8節

わたしの掟を忠実に守りなさい

神さまの掟、戒めを守るのは、わたしたちが神さまによって、聖なる者、神さまの役に立つ者とされるためです。自分勝手な思いではなくて、神さまの御心を行っていただくためのです。



5月16日(火) レビ記17章11節

生き物の命は血の中にある

イスラエルの人々は、血を飲むことが禁じられました。血の中に命があると考えられたからです。主イエスが血を流されたのは、命を流されたということでした。わたしたちのために命を捨ててくださった救いの主に、感謝をさげましょう。

5月19日(金) レビ記23章22節

貧しい者のために残しなさい

麦などの穀物やぶどうなどの果物を取り入れるときには、落ちたり、取り残したものは、そのままにしなさいと命じられました。それは、生活に困っている人に与えなさいということです。そのような小さなことで、隣り人を愛することを実践していくのです。

5月17日(水) レビ記19章18節

自分自身を愛するように隣人を愛し

神さまがわたしたちに願っておられることは、「自分自身を愛するように隣人を愛する」ことでした。それは相手の身、相手の気持ちになって、その人に喜ばれることをしてあげることなのです。



5月20日(土) レビ記24章11節

あなたの中にわたしの住まいを置き

わたしたちが神さまの戒めを守り、神さまに喜ばれる生き方をするなら、わたしたちのただ中に、神さまは共に住んでくださると約束されました。わたしたちも神さまを迎え入れましょう。



いのちのばん

5月22日(月) みんすうき しょう せつ 民数記6章24節

主があなたを祝福し、守られるよう

わたしたちは、神さまがわたしたちを祝福し、守ってくださるようにとの、祝福を求める祈りの中で生きています。今日も主イエスが、わたしたちのために、天で神さまの祝福を祈っているのです。



5月25日(木) みんすうき しょう せつ 民数記20章16節

主は、声を聞いて御使いを遣わし

かつて行く手を海に阻まれ、エジプトの軍隊に攻められたとき、「主に助けを求めて叫びますと、主はわたしたちの声を聞いて御使いを遣わし、導き出してくださいました」。そのように神さまは、わたしたちの叫びを聞き、助けを与えてくださる神なのです。

5月23日(火) みんすうき しょう せつ 民数記11章23節

主の手が短いというのか

「手が短い」とは、助けが届かないことです。荒野で食べ物がないと泣きごとを言うイスラエルの民に、神さまの助け手は短くないことを表わすために、うづらが与えられました。神さまは、今日も力強い御手によって、わたしたちを守り、導いてくださっているのです。

5月26日(金) みんすうき しょう せつ 民数記21章9節

青銅の蛇を仰ぐと、命を得た

毒蛇によって死にそうになった人々に、青銅の蛇を見上げれば助かると約束されました。青銅の蛇に毒を消す力があるのではなくて、神さまの約束を信じた人が救われたのです。わたしたちも、十字架の木にかけられた主イエスを仰ぐなら、救われるのです。

5月24日(水) みんすうき しょう せつ 民数記14章9節

主が我々と共におられる

強い民ばかりでぜったいに勝てないという不信仰な人々に、ヨシュアとカレブは言いました。「主が我々と共におられる。彼らを恐れてはならない」と。神さまはあなたとも共にいてくださいます。



5月27日(土) みんすうき しょう せつ 民数記23章11節

あなたを彼らを祝福してしまった

モアブの王は呪いをかけることで、イスラエルを打ち負かそうとします。しかし、かしくら呪いをかけても、呪うことができませんでした。イスラエルは神さまに守られていたからでした。そのようにわたしたちも、神さまの祝福によって守られているのです。

いのちのばん

<p>5月29日(月) <small>みんすうき しやう せつ</small> 民数記24章6節</p> <p>水のほとりの杉のようだ</p> <p>雨があまり降らないイスラエルでは、水がないと草木が枯れてしまいます。水が豊かに流れる場所にあるとは、草木はもちろん動物にとっても、オアシスのような「いいい」の場所です。そのようにわたしたちは、神さまによって守られ、養われ、うるおされているのです。</p>	<p>6月1日(木) <small>しんめいき しやう せつ</small> 申命記1章33節</p> <p>あなたたちの先頭に道を進み</p> <p>わたしたちは、自分がこれからどのよ うな道を進んでいかなければならないか、分からなくなる ことがあります。けれども神さまは、わたしたちの先を進み、道 を導いてくださいます。</p> 
<p>5月30日(火) <small>しんめいき しやう せつ</small> 申命記1章30節</p> <p>主が、あなたたちのために戦われる</p> <p>イスラエルは弱くて小さな民でしたが、それでも強い民を打ち負かすことができたのは、神さまが彼らのために戦ってくださったからでした。今日もわたしたちと共に、神さまは戦ってくださいます。</p>	<p>6月2日(金) <small>しんめいき しやう せつ</small> 申命記3章22節</p> <p>彼らを恐れてはならない</p> <p>これからはモーセの代わりにヨシ アが指導者となります。恐れるヨシ アにモーセは励ましました。「彼らを 恐れてはならない。主自らあなたたち のために戦ってくださる」。同じ神さま が、今日もあなたと共にいて、あなた のために戦ってくださるのです。</p>
<p>5月31日(水) <small>しんめいき しやう せつ</small> 申命記1章31節</p> <p>父が子を背負うように</p> <p>疲れて、もう一歩も歩けなくなったとき、お父さんやお母さんがおんぶしたり、抱っこしてくれます。そのようにわたしたちが疲れ果ててしまうとき、神さまがわたしたちを背負ってくださるのです。</p> 	<p>6月3日(土) <small>しんめいき しやう せつ</small> 申命記4章7節</p> <p>いつ呼び求めても近くにおられる神</p> <p>わたしたちの神さまは、「いつ呼び 求めても、近くにおられる神」だと約 束されます。だから苦しいとき、つらい ときにも、わたした ちは神さまの助け を祈り求めること ができるのです。</p> 

いのちのばん

6月5日(月) 申命記4章29節

あなたは神に出会うであろう

「いつ呼び求めても、近くに
おられる神」は、わたしたちが「心を
尽くし、魂を尽くして求める
ならば、神に出会う」と約束さ
れます。今日も、祈りと御言
葉において、神さまと出会
いましょう。



6月8日(木) 申命記7章6節

あなたをご自分の宝の民とされた

わたしたちは、神さまの宝の民とさ
れました。「わたしの目にあなたは価
高く、貴く、わたしはあなた
を愛している」と言われます
(イザヤ43章4節)。わたし
たちは神さまの宝物です。



6月6日(火) 申命記4章40節

あなたは幸いを得、長く生きる

神さまが願っておられることは、わた
したちが幸せになることです。そのた
めに、戒めを与えて、それによって生き
れば、「幸いを得、長く生きる」と約束さ
れました。戒めに従って生きていきま
しょう。

6月9日(金) 申命記7章7節

どの民よりも貧弱であった

神さまがわたしたちを選んでくだ
さったのは、わたしたちに才能があつた
り、すばらしい点があるからではありま
せんでした。むしろ弱く、貧しく、小さ
い者たちだからこそ、わたしたちを憐れ
み、慈しんでくださるのです。神さまの
恵みに感謝しましょう。

6月7日(水) 申命記5章33節

主が命じられた道をひたすら歩み

わたしたちが「命と幸いを得、長く
生きる」ためには、「主が命じられた道を
ひたすら歩みなさい」と求められます。
わたしたちも命と幸いを得るために、
命の道をしっかりと歩いていきましょ
う。




6月10日(土) 申命記7章21節

主はあなたのただ中におられる

小さくて弱いわたしたちのために、
神さまは、わたしたちと共にいてくださ
る方となってくださいました。だから
「主は強ければ、我
弱くとも、恐れはあ
らじ」なのです。



いのちのばん

<p>6月12日(月) <small>しんめいき しょう せつ</small> 申命記8章3節</p> <p>人はパンだけで生きるのではなく</p> <p>わたしたちは食<small>しょくじ</small>事があれば生きていけるとわけではなく、心<small>こころ</small>が養<small>やしな</small>われていくために、心<small>こころ</small>の糧<small>かて</small>が必要<small>ひつよう</small>です。心<small>こころ</small>が元<small>げん</small>気にされて、強<small>つよ</small>く生きていけるからです。心<small>こころ</small>の糧<small>かて</small>を<small>あた</small>えてくださいと祈<small>いの</small>りましょう。</p> 	<p>6月16日(木) <small>しんめいき しょう せつ</small> 申命記10章13節</p> <p>あなたが幸<small>さいわい</small>いを得<small>え</small>ることでは</p> <p>神<small>かみ</small>さまがわたしたちに願<small>ねが</small>っておられることは、「あなたが幸<small>さいわい</small>いを得<small>え</small>ること」だと言<small>い</small>われます。その幸<small>さいわい</small>せを手に入<small>て</small>れるために、神<small>かみ</small>さまを愛<small>あい</small>し、信<small>しん</small>じて、神<small>かみ</small>さまに従<small>したが</small>って生きることを求<small>もと</small>められます。御<small>ご</small>言葉<small>ことば</small>をよく学<small>まな</small>び、心<small>こころ</small>に刻<small>きざ</small>みつけて、神<small>かみ</small>さまの道<small>みち</small>を歩<small>あゆ</small>みましょう。</p>
<p>6月13日(火) <small>しんめいき しょう せつ</small> 申命記8章5節</p> <p>主<small>しゅ</small>があなたを訓練<small>くんれん</small>される</p> <p>神<small>かみ</small>さまは、わたしたちが強<small>つよ</small>く生きるようになるために、苦<small>くる</small>しいことや悲<small>かな</small>しいことによつて、心<small>こころ</small>を訓練<small>くんれん</small>されます。それは意<small>い</small>地<small>じ</small>悪<small>わる</small>ではなく強<small>つよ</small>くするためです。つらいときにも、神<small>かみ</small>さまを信<small>しん</small>じていきましょう。</p> 	<p>6月16日(金) <small>しんめいき しょう せつ</small> 申命記10章19節</p> <p>寄留者<small>きりゅうしゃ</small>を愛<small>あい</small>しなさい</p> <p>寄留者<small>きりゅうしゃ</small>とは、自分<small>じぶん</small>を守<small>まも</small>ってくれる人<small>ひと</small>がいない、身寄<small>みよ</small>りのない人<small>ひと</small>のことです。自分たちもかつてはそうでしたから、その人たちの悲<small>かな</small>しみが分<small>わ</small>かります。だからその人たちを助<small>たす</small>けてあげなさいというのが、神<small>かみ</small>さまがわたしたちに求<small>もと</small>めておられることなのです。</p>
<p>6月14日(水) <small>しんめいき しょう せつ</small> 申命記8章18節</p> <p>富<small>とみ</small>を築<small>ます</small>く力<small>ちから</small>を<small>あた</small>えられたのは</p> <p>神<small>かみ</small>さまがわたしたちに苦<small>くる</small>しいことを経験<small>けいけん</small>させるのは、自分<small>じぶん</small>の力<small>ちから</small>で生きることができると考えないで、いつも神<small>かみ</small>さまに頼<small>たよ</small>って生きるようになるためです。あなた<small>も</small>が持<small>も</small>っている豊<small>ゆた</small>かな食<small>しょくじ</small>事<small>いふく</small>、衣服<small>いふく</small>、家<small>いえ</small>、家族<small>かぞく</small>、学<small>がっこう</small>校<small>がっこう</small>、ガ<small>ちから</small>ン<small>ちから</small>バ<small>ちから</small>る力<small>ちから</small>など、すべてを<small>あた</small>えてくださったのは神<small>かみ</small>さまなのです。</p>	<p>6月17日(土) <small>しんめいき しょう せつ</small> 申命記11章12節</p> <p>主<small>しゅ</small>が常に目<small>め</small>を注<small>そそ</small>いでおられる土地</p> <p>イスラエルは、いつも神<small>かみ</small>さまが目<small>め</small>を注<small>そそ</small>いで、祝<small>しゅくふく</small>福<small>ふく</small>をあふれるほどに与<small>あた</small>えてくださる場所でした。そのようにわたしたちも、神<small>かみ</small>さまの目<small>め</small>が注<small>そそ</small>がれている祝<small>しゅくふく</small>福<small>ふく</small>の中<small>なか</small>におかれています。</p> 

いのちのばん

6月19日(月) 申命記14章29節
 食べて満ち足りることができるよう
 神さまが願われることは、「自分を愛するように隣人を愛する」ことで、それは困っている人々を助けて、わたしたちが自分の満足のためだけに生きないようということでした。神さまがくださる祝福を一人占めせず、分かち合っているとき、本当に祝福されるのです。

6月22日(木) 申命記21章23節
 木にかけられた死体は、神に呪われたもの
 主イエスが十字架にかけられて死んだのは、主が神から呪われたことを表わすためでした。わたしたちの受けるべき呪いを主が代わりに受けてくださるためでした。罪の呪いを引き受けてくださった主に感謝しましょう。

6月20日(火) 申命記18章13節
 主と共にあって、全き者でなければ
 「全き者」とは、完全無欠な人ということではなくて、神さまの御心に従い、それを行って生きる人のことです。そのために、神さまと共に生きる人なのです。わたしたちもそのように歩みましょう。



6月23日(金) 申命記23章6節
 主は呪いを祝福に変えられた
 モアブの王バラクにやとわれた偽預言者バラムの呪いを、神は祝福に変えられました。わたしたちも神の祝福に包まれて、呪いから守られています。



6月21日(水) 申命記20章4節
 主と共に進み、勝利をたまる
 イスラエルが戦いに出るときは、ただ力が強いだけではなく、神さまを信じるのが大切でした。神さまと共に進み、敵と戦って勝利を与えてくださるからです。勝利の神は、あなたとも共にいてくださいます。雄々しく戦いましょう。

6月24日(土) 申命記30章14節
 御言葉はあなたのごく近くにあり
 神さまの言葉は、天まで取りに行かないと手に入らないものではなく、わたしたちのすぐ近くにあります。そのため、教会や聖書があります。感謝して、いよいよ熱心に御言葉を学びましょう。



いのちのばん

<p>6月26日(月) <small>しんめい き しょう せつ</small> 申命記30章 15節</p> <p>命と幸いをあなたの前に置く</p> <p>わたしたちの前には、滅びに至る広い道と、命に至る狭い道があります。多くの人は広い楽な道を選びますが、それは滅びに至ります。わたしたちはつらくても、命に至る道を選び、その道をたゆまず歩き続けていきましょう。</p>	<p>7月29日(木) <small>しんめい き しょう せつ</small> 申命記32章 10節</p> <p>ご自分のひとみのように守られた</p> <p>ひとみはとてもデリケートですから、大切に守ります。わたしたちは、神さまにとって、ご自分のひとみのようだと いわれま す。細心の注意を払って守り、大切にしてください ます。</p> 
<p>6月27日(火) <small>しんめい き しょう せつ</small> 申命記31章 6節</p> <p>強く、また雄々しくあれ</p> <p>モーセからヨシュアに代わろうとしていた時、ヨシュアは恐れました。しかし恐れず、雄々しくなれると励まされます。なぜなら神さまがヨシュアと共にいてくださるからです。モーセと共におられた神は、あなたの神でもあります。</p>	<p>6月30日(金) <small>しんめい き しょう せつ</small> 申命記32章 11節</p> <p>翼に乗せて運ぶように</p> <p>わしが、小さなひなを翼の上に乗せて運ぶように、わたしたちは神さまの背に乗せられています。「わたしはあなたたちを白髪になるまで背負って行こう」と(イザヤ46章 4節)。</p> 
<p>6月28日(水) <small>しんめい き しょう せつ</small> 申命記31章 8節</p> <p>主はあなたを見捨てられない</p> <p>ヨシュアと共にいると約束された神さまは、ヨシュアを見放すことも見捨てることもないとも約束されました。だからわたしたちも強く、雄々しくなることができるのではないのでしょうか。</p> 	<p>7月1日(土) <small>しんめい き しょう せつ</small> 申命記33章 29節</p> <p>主はあなたを助ける盾</p> <p>盾とは、やりや剣から守るものです。そのように神さまは、わたしたちの盾になって、あらゆる災いから守り、助けてくださいます。危険が迫るときも、わたしたちの力となってくださるのです。</p> 

2006年7～9月カリキュラム (第22号)

—救済史に基づく二年サイクルカリキュラムの一年目—

月日 教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
	単 元 の 目 標		
7月2日	ヨセフの苦難	創世記39:1-23	マタイ28:20
	ヨセフ物語を通して、摂理信仰を養う。主が共におられる幸いを知ろう		
7月9日	ヨセフの勝利	創世記50:15-21	創世記50:20
	人間の悪を善へと造りかえる主の御業を示し、摂理の主への信頼を養おう		
7月16日	モーセの誕生	出エジプト1:22-2:10	ローマ8:28
	主なる神の不思議な導き、御業を通して、歴史を支配しておられる主を仰ごう		
7月23日	モーセの召命	出エジプト3:1-14	
	主なる神は契約に真実であられる。神の召きに応える信仰の姿勢をつちかおう		
7月30日	主の過ぎ越し	出エジプト12:1-32	出エジプト12:14
	主なる神は小羊の血により民を救い出される。贖いの御業の恵みを喜ぼう		
8月6日	葦の海を渡る	出エジプト14:1-31	コリントー10:13b
	主なる神御自身がたたかわれる。神の御業、御力の大きさをほめたたえよう		
8月13日 平和主日	平和を創り出す	エフェソ2:14-22	エフェソ2:14a
	平和主日として礼拝をささげる。平和の主キリストを礼拝しよう		
8月20日	天からの食べ物	出エジプト19:20-20:17	詩編119:1
	神が御自身の民を養われる。神に養われる幸い、七日目の祝福を知ろう		
8月27日	十戒を与えられる	出エジプト19:20-20:17	詩編119:1
	神は愛と恵みの言葉として十戒を与えられた。律法を持つ幸いを味わおう		
9月3日	金の子牛	出エジプト32:1-14	出エジプト20:4a
	神は偶像礼拝をしりぞけられる。主なる神の喜ばれる礼拝をささげよう		
9月10日	幕屋づくりと礼拝	出エジプト40:17-38	出エジプト40:34
	神礼拝を中心として共同体が形成される。栄光に満たされる礼拝をささげよう		
9月17日 (18敬老の日)	カナン偵察	民数記14:1-10	ヨハネ3:3
	人を恐れてたたかわない者を主はさばかれる。主なる神をこそ畏れよう		
9月24日	モーセの死	申命記34:1-12	ヘブライ11:16
	モーセの死を越えて神の意思は買かれる。与えられている生を真摯に生きよう		

2006年度 年間カリキュラム

(2006年4月～2007年3月)

二年サイクルの聖書物語(救済史)と教会暦の併用カリキュラム

年・号	月 日	教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所
2006年 21号	4月2日	進級式・レント	十字架のキリスト	マルコ15:21-32
	4月9日	受難週	葬られるキリスト	マルコ15:42-47
	4月16日	復活祭	キリストの復活	マルコ16:1-8
	4月23日		天地の創造	創世記1:1-31
	4月30日		人間の創造	創世記2:4-25
	5月7日		人間の墮落と救いの約束	創世記3:1-15
	5月14日	母の日	ノアの箱舟	創世記6:1-22
	5月21日		バベルの塔	創世記11:1-9
	5月28日		アブラハムの召命	創世記12:1-9
	6月4日	聖霊降臨祭	教会の誕生	使徒2:1-13
	6月11日	花の日	アブラハムへの約束	創世記15:1-21
	6月18日	父の日	イサクの誕生と奉獻	創世記21:1-8, 22:1-19
	6月25日		ヤコブとエサウ	創世記27:18-29
22号	7月2日		ヨセフの苦難	創世記39:1-23
	7月9日		ヨセフの勝利	創世記50:15-21
	7月16日		モーセの誕生	出エジプト1:22-2:10
	7月23日		モーセの召命	出エジプト3:1-14
	7月30日		主の過ぎ越し	出エジプト12:1-32
	8月6日		葦の海を渡る	出エジプト14:1-31
	8月13日	平和主日	平和を創り出す	エフェソ2:14-22
	8月20日		天からの食べ物	出エジプト16:1-36
	8月27日		十戒を与えられる	出エジプト19:20-20:17
	9月3日		金の子牛	出エジプト32:1-14
	9月10日		幕屋づくりと礼拝	出エジプト40:17-38
	9月17日	(18敬老の日)	カナン偵察	民数記14:1-10
	9月24日		モーセの死	申命記34:1-12

年・号	月 日	教会暦・行事	主 題 (仮題)	聖 書 箇 所
2006年 23号	10月1日		洗礼をお受けになる主イエス	マタイ3：13-17
	10月8日		荒れ野での誘惑	マタイ4：1-11
	10月15日		弟子の召命	マタイ4：18-22
	10月22日		幸いの説教	マタイ5：1-12
	10月29日	宗教改革記念日	思い煩いからの解放	マタイ6：25-34
	11月5日		人を裁くな	マタイ7：1-6
	11月12日		岩の上に家を建てる	マタイ7：24-29
	11月19日		一羽の雀でさえ	マタイ10：26-31
	11月26日		重荷を負う者への招き	マタイ11：25-30
	12月3日	アドベント	平和の主の預言	ゼカリヤ9：9-10
	12月10日	アドベント	真の羊飼いの預言	エゼキエル34：1-16
	12月17日	アドベント	心が新しくされる預言	エゼキエル36：25-28
	12月24日	降誕祭	御子の降誕	ルカ2：1-7
	12月31日	年末	少年イエス	ルカ2：41-52
2007年 24号	1月7日	新年	種まきのたとえ	マタイ13：1-9, 18-23
	1月14日		5000人の給食	マタイ14：13-21
	1月21日		嵐を鎮める主	マタイ8：19-22
	1月28日		ペトロの信仰告白	マタイ16：13-20
	2月4日		山上の変貌	マタイ17：1-8
	2月11日	(信仰の自由)	善きサマリア人	ルカ10：25-37
	2月18日		見失った羊のたとえ	マタイ18：12-14
	2月25日	レント	放蕩息子	ルカ15：11-32
	3月4日	レント	マルタとマリア	ルカ10：38-42
	3月11日	レント	幼児の祝福	マタイ19：13-15
	3月18日	レント	金持ちの青年	マタイ19：16-30
	3月25日	レント	ザアカイの救い	ルカ9：1-10

副読本発行のお知らせ

『主は羊飼いい—中高生のための教理入門—』

発行予定日 2006年5月

予定価格 500円

著者 木下裕也

(名古屋教会牧師・教会学校教案誌編集委員・神戸改革派神学校講師)

日本キリスト改革派教会は、契約の子たちへの信仰継承教育に心血を注いでいる教会です。ところが、日曜学校での楽しい教会生活を経て、中高生の時期に、自覚的で明瞭な信仰を告白を、と願いつつ、日曜学校教師はもとより、牧師たちも頭を悩ませつつも、真剣に告白準備のための学びのプログラムを整え、提供しています。

しかしながら、現実には、既成のテキストで、「これは使える！」というものがなかなか見当たらないのが実情です。ウエストミンスター小教理問答の解説を試みるか、牧師のオリジナルなテキストを作成して用いるか、果ては他教派のものをアレンジしながら用いるということが多いかと思えます。

このような現実の中で、ついに！ 中部中会教育委員会『教会学校教案誌』の副読本として、中高生の信仰告白準備のためのテキスト、『主は羊飼いい—中高生のための教理入門—』を刊行することと致しました。

すでに、副読本の『子どもカテキズム』は、2300部が子ども達、教師たちの手元に届けられています。この『主は羊飼いい—中高生のための教理入門—』も中高生、教師たちの手に広く行き渡るなら、必ずや、よき実りを与えられるものと確信いたしております。

廉価に抑えております。子ども達のお小遣いで購入できます。しかし、教会としてお買い求めいただき、契約の子らをはじめ地域の中高生にも、プレゼントできれば、なお、すばらしいのではないのでしょうか。

著者の木下裕也牧師は、弊誌編集委員であるばかりか、「創刊」の中心人物です。前任地の豊明教会での実践のなかから、日本キリスト改革派教会としての「教案誌」の必要性を深く認識され、しかもつぶやいているだけでなく、実際に、同志たちとともに、今日まで執筆、編集、刊行の中心で奉仕しておられます。現在、神戸改革派神学校講師でもあり、日本教会史を講じておられます。煮詰まった編集会議では、必ず、笑いのネタを提供して、場をなごませて下さる楽しい先生です。

教会学校教案誌編集部 (相馬伸郎)

1 人生の目的—神礼拝

もうかなりのお年になってから教会に通い始められた方と聖書の学びをしていたときのことです。そのときたまたま一緒に、ウエストミンスター小教理問答の問1を読みました。その問いは「人のおもな目的は何であるか」です。

この問いを読まれて、その方はつぶやくようにおっしゃいました—わたしはもう何十年も生きてきたのに、人生のほんとうの目的などということ考えたこともありませんでした、と。

人生の目的とは何か。このことをはっきり知っているのと、知らずにいるのとでは、やはり生きかたが大きくことになってくるのではないのでしょうか。

さまざまなことが人生の目的になり得ます。お金をもうけること、地位や名誉を得ること、仕事で成功をおさめること、熱烈な恋愛をすることなどです。これらのことは人生にある幸せをもたらすでしょう。

けれども一方で、そのどれもが不確かです。お金は一瞬にして失われることがあります。地位や名誉を得たとしても、たった一度のあやまちでそのすべてを棒にふることもあります。熱烈な恋もさめることがあります。とすれば、これらはいずれも人生の究極の目的とはなり得ないでしょう。

さらに、私たちの命そのものも不確かなものです。明日この地上に生きているという保証を、私たちはだれひとり持たないのです。

では、私たちはついに人生の確かさ、人生のほんとうの目的を見出すことはできないのでしょうか。

いいえ、私たちは人生の真の目的を知ることができます。ほんとうに確かで、生きがいのある命と人生を生きることができるのです。

もういちどウエストミンスター小教理問答の問1を見ましょう。

問 人のおもな目的は何であるか。

答 人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことである。

もうひとつ信仰問答を見ましょう。ジャン・カルヴァンの手になるジュネーブ教会信仰問答の問1はこうです。

問 人生の目的は何ですか。

答 神を知ることです。

人生の目的は神さまを知り、神さまの栄光をあらわし、神さまを喜ぶことにあります。すなわち、神さまを礼拝することこそが人生の真の目的なのです。

人生の確かさは私たち自身の中にはありません。私たち自身の何かを頼りにしているかぎり、私たちの人生は不確かです。

けれども神さまは確かなお方です。神さまこそ私たちの人生のゆるぎなき土台、岩、命のとりです。なぜなら神さまは天地の造り主であられ、私たちの命の与え手であられ、この世界のいとなみと私たちの人生の歩みのすべてをみ手のうちに握っておられるお方だからです。

聖書は神さまを羊飼いに、私たち人間を羊になぞらえています。

羊が羊飼いに守られ、養われるように、私たちは主なる神さまに守られ、養われます。

⋮

〈執筆者よりひとこと〉

●工作、イラストを担当くださった仲栄真姉、植田姉に感謝します。子供たちが、神様の福音にふれるお役にたてればと祈っております(山口弘)。●子どもたちにわかりやすく伝えるためには自分自身がよく理解することが何より大切といつも思うのですが…(伊藤治郎)。●我々の改革信仰に相応しい教案誌が作られていること、そして、それに養われていく子供たちに期待します。この働きに加えられたことを感謝して(申成日)。●実際にやってみての反応を、中部中会教育委員会を通してお知らせいただけたら、うれしく思います(赤石めぐみ)。●春は中高生や学生たちの修養会が持たれる季節でもあります。それぞれの集いに主の祝福が豊かでありますよう(木下裕也)。●子育て奮闘中です。「いのちのパン」を用いて子どもと一緒に家庭礼拝を行おうと思います(望月信)。

〈「成人科」のご紹介〉

●2006年度の成人科は石丸新教師による「祈りの生活」です。次の通り予定されています。

- 第1課 窮乏感覚をもって祈る
- 第2課 悔い改めをもって祈る
- 第3課 キリストのみ名によって祈る
- 第4課 感謝をもって祈る
- 第5課 希望をもって祈る
- 第6課 祈りの姿勢
- 第7課 祈る熱情
- 第8課 祈る忍耐
- 第9課 神に近くあること
- 第10課 祈りを導く聖霊
- 第11課 共同の祈りの作法
- 第12課 魂の言葉としての沈黙

石丸新教師は、長く四国学院大学文学部の教授を務められ、『霊的成長の道』、『聖書生活のいのち』(聖恵授産所出版部)、『改革派カテキズム日本語訳研究』(新教出版社)などの著書があります。石丸先生から、成人科「祈りの生活」を学ぶに際して、ぜひ『霊的成長の道』第2章3節および第3章、『聖書生活のいのち』第3章および第4章をご参照くださいというお勧めをいただいています。編集部としても、ぜひあわせておよみいただくようお願いいたします。最寄りのキリスト教書店までお問い合わせください。

〈「主は羊飼いい—中高生のための教理入門—」〉

●5月に副読本を刊行いたします。148ページの案内をご覧ください。中高生のためのテキストとして提供されていますが、どなたにも読んで益になるものであると確信します。ぜひお買い求めいただくようお願いいたします。ご注文は、教案誌と同じく、名古屋岩の上传道所・相馬伸郎まで、お願いいたします。

〈あとがき〉

●新しい年度を迎えました。2006年度は救済史に基づくカリキュラム、聖書物語を中心にした教案をお届けいたします。説教執筆者には、念頭においたカテキズムの問答をあげていただくようお願いしています。皆様も、御言葉と教理の共鳴に心を留めて、良き学びの時を持たれますように。

●教師会のための学びのために、中部中会教会学校教師研修会の講演録とその応答を掲載いたしました。教師会の事情に応じて何回かに分けてお読みいただければ願います。次号からは、何人かの執筆者で分担しながら、教師会の学びの材料を提供したいと願っています。小さな者たちが大きな働きを担っています。ぜひお祈りください。

●「いのちのパン」をお用いください。短い御言葉とお勧めです。ぜひ自由にコピーして配布し、お用いください。分級時にイラストに色を塗るなど、各教会で工夫して親しまれますように。

●今号にも、すてきなイラストを掲載することができました。感謝。イラスト募集中です。

●契約の子どもたち、地域の子どもたちを主に導く光栄なる奉仕に、今年度も励んで参りましょう。また、教師方の生の声をぜひ誌面で紹介させていただきます！ご意見や感想などをお寄せください。心からお待ちしています！

〈購読の申し込み〉

『教会学校教案誌』をぜひご購読ください。別冊『子どもカテキズム』(300円)、バックナンバーもあります(品切れの号もあり)。第2～16号は一部500円で販売しています。

名古屋岩の上传道所 相馬伸郎まで

〒458-0021 名古屋市緑区滝の水2-2012

Tel/Fax. 052-895-6701

☆ 執筆者一覧 ☆

まえがき

相馬伸郎 (名古屋岩の上伝道所宣教教師)

巻頭説教

牧野信成 (千里山教会牧師)

教会学校・日曜学校訪問

坂戸教会教会学校委員会 (島野美佳子)

講演録

相馬伸郎 (名古屋岩の上伝道所宣教教師)

宮嶋豊美 (多治見教会日曜学校教師)

聖書研究

杉山昌樹 (瑞浪伝道所宣教教師)

貫洞賢次 (札幌伝道所宣教教師)

千ヶ崎基 (草加松原教会牧師)

山下朋彦 (平和の君伝道所宣教教師)

久保浩文 (高知教会牧師)

宮崎彌男 (筑波みことば伝道所宣教教師)

説教展開例

長田詠喜 (高松東教会牧師)

小野静雄 (多治見教会牧師)

辻幸宏 (大垣伝道所協力牧師)

木下裕也 (名古屋教会牧師)

相馬伸郎 (名古屋岩の上伝道所宣教教師)

望月信 (高蔵寺教会牧師)

分級展開例

幼稚科

山口弘 (東広島伝道所教会学校教師)

仲米真里香 (沖縄聖書教会基督恩寵教會)

植田秀子 (東広島伝道所)

小学科下級

伊藤治郎 (四日市教会日曜学校教師)

小学科上級

申成日 (広島教会牧師)

中学科

赤石めぐみ (西神伝道所教会学校教師)

成人科

石丸新 (東部中会引退教師)

いのちのパン (子ども聖書日課)

三川栄二 (稲毛海岸教会牧師)

吉田櫻子 (稲毛海岸教会)

表紙イラスト

坂野知子 (松戸小金原教会日曜学校教師)

本文イラスト

新海敬造 (名古屋岩の上伝道所)

吉田櫻子 (稲毛海岸教会)

☆ 編集部 ☆

相馬伸郎 (長)

名古屋岩の上伝道所宣教教師

木下裕也

名古屋教会牧師

辻幸宏

大垣伝道所協力牧師

望月信

高蔵寺教会牧師

日本キリスト改革派教会 中部中会 『教会学校教案誌』

2006年4・5・6月号 (季刊)

第21号

2006年2月26日発行

発行 日本キリスト改革派教会 中部中会 教育委員会
 発行所 日本キリスト改革派教会 中部中会 教会学校教案誌編集部
 名古屋岩の上伝道所 宣教教師 相馬伸郎
 〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012
 Tel/Fax. 052-895-6701

郵便振替口座 00890-2-148183 「伊藤治郎」

編集・印刷 株式会社あるむ

〒460-0012 愛知県名古屋市中区千代田3-1-12 第三記念橋ビル3F

頒価 900円 (本体価格)